
GIOGAME

Anacletus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G I O G A M E

【Nコード】

N 8 1 6 4 W

【作者名】

A n a c l e t u s

【あらすじ】

借金生活に悩む大学院生『外字久重』（がじ・ひさしげ）は何でも屋として年齢不詳の女アズに働かせられていた。工作中トラブルに見舞われた久重は不思議な力を使う少女ソラに襲われる。ソラは突如として撃ち放たれた凶弾に倒れるものの己の無力に唇を噛んでいた久重の前に再び現れ物語が動き出す。近未来科学によって社会、国家、民族、企業、あらゆる人々の群れが混沌へと飲み込まれていく最中、青年と少女の行く手には死を携えた者達が迫る。バトルとラブコメ少なめでお送りする近未来科学SFただいま連載中！！

プロローグ&第一話 迫り来る恐怖の影

G I O G A M E

プロローグ 天より降り来るモノ

東京。

嘗て隆盛を極めた極東国家に存在する一都市。

人口一千万を越す怪物都市の一角で彼らは奇跡を目撃していた。

奥多摩と呼ばれる東京二十三区内において最も自然を有する地域。

広大な山林や古びた私道、林道、あるいは民家、川、草原、そんな場所の至るところで彼らは空を見上げながら世界最後の日と目されたX-DAYを過ごしていた。

巨大隕石激突なんて映画で使い古されたネタではあった。

しかし、彼らにとって生存不可能という政府広報も十分実感の湧かない冗談だった。

それでも世界各国のマスコミは相変わらず祈る以外にもはや手は無いと言う話を垂れ流していたし、最後の日を家族と過ごすそうと大勢の政治家や企業役員、あらゆる業種職種の重役達も家に帰っていた。世界のリーダー達の帰宅風景が映画さながらに世界中の至る場所で見られ、人々に滅亡を実感させた。

世界中の核弾頭を一斉発射する案や絶対境界線上に宇宙用の核機雷を敷設するなんて方法も国連主体で進められ、全世界の核弾頭三分の一以上が宇宙に上げられていたが、それでも状況は絶望的だった。地球に隕石が当たれば何処に逃げようと惑星そのものが崩壊すると言われた通称【黒い隕石】（ブラックメテオ）は最新の光学観測技術によって地球には存在しない分子組成を持っていて極端な耐熱性を有するらしい・・・なんて新聞に載ったので、彼らの誰もが人類滅亡というお祭り騒ぎを静かに鑑賞しようという諦観しか持ち合

ノートパソコンを持っていた青年はネット上に応えを求めようと
して、メールが届いた事に気づく。

「こんな時に人妻もOLもお断りだ。くそつたれ」

ダイレクトメールの節操の無さで生きている事を実感してしまった
自分に苦笑して、青年はメールを開いた。

「GIO? 何処の会社だ」

メールの添付ファイルを開くと大きな垂れ幕に【祝。人類生存おめ
でとう。我が社の商品を特定区域の方々にプレゼント致します】の
文字。

小さな捕捉項目を呼んで「ああ」と青年は納得する。

特定区域のGPS位置情報を送信する事によってゲーム内でのクー
ポンやら特典やらを受け取る事が出来るジオゲームと呼ばれる種類
のネットゲが最近流行している。

様々な会社が特定のイベントを行う際に様々なネットゲとコラボして
特定時間、特定区域の位置情報にクーポンや特典を設置してもらう
事も多々あり、近頃ではそういう客寄せ効果を期待してか、ゲーム
会社だけではなく普通の会社もサイトで位置情報特典契約という項
目を設けている。

イベント加者が位置情報を送れば特典として何か送られてくる。
そういう話だ。

「それにしてもこんな時に回線込み合ってるはずだろ?」

半ば呆れながら商魂逞しい会社に脱帽しつつ青年はパソコンを閉じ
る。

青年が伸びをして当たりを見回すと誰も彼もが喜びを互いに分かち
合いつつ平静を取り戻し始めていた。

ピロリン。

青年の後方にいた少年が手に持っていたケータイに着信が入る。
ポロン。

青年の前方にいた老人の手にあったスマホにも着信だった。
家族と連絡を取り合った者、電話を終えた者、メールを送り終えた

者。

誰のケータイにも着信音が響き始める。

青年はひょいっと後ろにいた少年のケータイを横から覗き込んだ。

そこにはやはり【GIO】という会社名があった。

世界が減びなかった日、GPS機能を搭載する情報端末約四億台にそのメールが届いた。

新たな世界に響く着信が誰の目にも奇異に映っていた。

セカンドプロローグ ジオネット

20××年某月。

国会において一つの法案が提出され全会一致の可決を見た。

時に人類の生存から十五年後。

太陽系絶対防衛線構想が持ち上がってから十年の月日が流れていた。

【個人座標情報保護法案】

俗に【ジオネット法】と呼ばれる個人情報保護法案は新たな時代の到来を告げた。

それは政府の下にGPSの送受信を一元管理保護する法案であり、複数の財閥、コングロマリットが政治工作を全面的に行ったと揶揄される程に、一部の者達には刺激的な内容だった。

具体的内容に付いては政府管理下のサーバーを経由しなければGPSに関するあらゆる情報をやりとりできないようシステムの再構築と端末への新OS導入を行い、あらゆる環境下で通信を確保する光子通信網を持って旧態然とした複数の情報網を刷新、一元管理するということものだ。

商業利用においてのGPS機能、特にジオゲームと呼ばれる位置情

報の送信によって様々な特典を得るゲームに端を発した【位置情報利益】（ジオプロフィット）に関する様々な規定・罰則を設けた事で、ジオネット法は世に多大な影響を与えたと言われている。

GPS機能を用いた個人位置情報の取得とその送受信に関して世界に先立って行われた法整備が威力を発揮しだしたのはそれから数年後の事だった。

商業目的でジオプロフィットは莫大な利益を生む利権と化した。

企業側から提供される特典と特典を得る為に特定の場所へと集まる民衆。

この図は一目では企業側からのみ利益が供与されているように見えるが、実際には人を集める新しい方法として企業側にとっても有益な手段となった。

最初期、イベントなどの開催を行いながら人を集めて収益を上げるという形を取っていたジオプロフィットの基本的なスタイルに変化が起きた。複数のジオプロフィットを扱う企業や団体が日時や位置に規定を置き、その規定によって得られる利益にも起伏を付けるという事をやりだしたのだ。

これによって単なる客寄せ効果は人口を複雑に分配する効果へと昇華された。

人の位置を自在とまではいかなくとも、ある程度コントロールする術を企業・政府・民間を問わず手に入れたのだ。

心理学とジオプロフィット。

最初に新しいジオプロフィットスタイルを確立した男はそう最初に説いた。

人を動かす為に必要なのは動機。

その動機を補強する為の因子として彼はジオプロフィットを使った。

「もしも、目の前の位置で十秒後十万円を確実に得られるとしたら君たちはどうする？」

カリカリと大学講義を行っていた老齢の教授が訊く。

窓から入ってくる熱線にグッタリしている学生達は心此処にあら

と言った心境で無言だった。

「まあ、大概の連中は十秒後までにその位置を陣取って待つだろう」
反応は無い。

「簡単な話だ。ジオプロフィールは人間を特定位置へ精神的にも経済的にも縛り付ける効果を発揮する。これを心理学的な応用と組み合わせ、彼は様々なイベントや政府主催の巨大事業をプロデュースしたのだ」

カリカリと応えない学生達がノートを取る音だけが響く。

「現在、政府のジオプロフィール政策には主に三つのものがある。一つは超高齢者社会対策、福祉分野への応用。二つ目は税制に関する応用。三つ目は企業へのジオプロフィールトマニユアルの推進。その他の例外として自衛隊、つまり軍事関連が現在模索されている状態だ」

ジリジリと髪を焦がしているような顔で教授が話しを進める。

「君達も知る通り、高齢化と過疎化が進む地域では特定の期間や時刻に政府が特典を設けている。その時期、その時間帯を歩きながら端末で位置情報を送るだけではあるが、人が集まる事で地域の横の繋がりや高齢者と若者の交流、更にはもしもの時の対策として多いに役立っている。昨年、この政策で夏場に病院へ運ばれた人間は六千人。政府広報は当てに出来んが、少なくとも数百人以上の人間は命を取り留めただろう。効果を疑問視されていたには上々な成果だとは思わんかね？ 利益目当ての人間でも死に掛けた老人をそのままにしておけない奴がいれば電話の一つも掛けてくれるというわけだ」

丁度、ベルが鳴った。

「続きは来週。各自、今回話した福祉分野においてのジオプロフィールト応用についてレポートを一枚提出するように。それと先週から言っていた任意の常時位置情報送信については更に一週間期間を延ばす。来週の講義は外国人条項の削除がジオプロフィールトスタイルにおいて望ましいかどうかだ。では、解散」

ゾンビのように起き出した学生達がフラフラと部屋から出て行く。

「あちーよ。なげーよ。もうことばがぜーんぶひらがなになっちゃうぐらいな」

背丈のある青年だった。

洒落っ気の無い黒のスラックスとワイシャツに黒革のごついベルトをしている。

何処かのバーでソファアに寝そべっていれば「組」に関係した「そっち系」な「有力株」のように見えない事もない。

彫りの微妙に深い顔はまるで刃物の鋭さとは無縁そうならしないものだが、ワイシャツの中に詰まっている決して太くは無い洗練された筋肉が青年の雰囲気を多少シリアスに保っている。

青年はソファアの代わりに長椅子でだるそうに寝そべる。

その手にあるペットボトルのお茶は完全に温くなっていた。

「貧乏学生してるかい。パーフェクト貧乏人」

姿の見えない声の主に青年はだるさ全開で無視を決め込む。

「僕が恵んであげた熱々いお茶も温くなってしまっているみたいだけど、やはり君もこちらの冷たいアイスティーの方が良かったかい？」

クスクスと声が弾む。

青年は嘆きながら顔を顰めた。

「それじゃあ、賭けは僕の勝ちだね。利子は明日までに払ってもらおうかな」

「金は無い。それ以前にこのクソ熱い時間帯に熱湯寸前のお茶を飲み干せたら利子を待ってやるとか何か？ 処かの悪鬼羅刹なのかお前は？」

「なああああなんて可哀想な負け犬ちゃんだろう。僕のお家に飛び込んでくれば三食昼寝つき待遇で借金なんて消えてしまうのになあ」

「それは、ない」

「あ、今一瞬だけ考えただろう？」

悪戯ずきな子供のように声の主が笑う。

「まあ、それじゃあ仕方ない。利子も払えぬ輩には一仕事してもらおうかな」

青年の顔に一枚の紙が落ちる。

「探偵事務所もとい興信所の犬として君には新しい任務に付いてもらおう」

「非合法の癖に」

ボソツと青年が愚痴ると紙が細い手によって引き上げられそうになる。

青年は紙の端をさっと掴んだ。

「探偵じゃなくて、何でも屋、だろう？」

青年が紙を放さず起き上がる。

青年の目の前にはニヤニヤと笑う女が一人立っていた。

真夏だというのに全身を黒のスーツで覆い男のように無造作な髪型の女は甘い声で青年に囁く。

「いい加減に返済を諦めてくれると僕も嬉しいんだけどな。外字^{がじ・ひさ}久重^{しげ}君」

「テメエだけはお断りだ。アズ」

黒のスーツの内、ワイシャツのボタンが上から三つまで外れている女はまるで汗を掻いていない。

ワイシャツの中に治まっている胸はかなり「無い」ものの、そのまま直視し続けるのは躊躇われて、青年久重はアズと呼んだ女から顔を背けて紙を強引に奪い取った。

「ふふ、ノーブラな僕に釘付けになりたくないという君の心意気が胸に染み渡るようだ」

「僕口調の年齢不詳女が何言ってやがる」

吐き捨てられる言葉にニヤニヤしながらアズはやれやれと肩を竦める。

「未だに僕の事が怖いなんて、君はよっぽど強い星の下に生まれたんだねえ」

「たまには人間らしい顔してみせやがれ。この悪魔」

「悪魔だったら今頃僕は君を誘惑し放題でとっくの昔に落としてるよ」

「オレの信条はノータッチオカルト、ノータッチアズ、だ」

久重が紙の内容を頭に入れ始める。

「今回のは別に【ちよつと怪しい病院で夜の叫び声の調査をしたら不倫現場でした】とか【丑三つ時の路地裏で行われている取引を調査したらヤクじゃなくてチャカでした】とかじゃないから大丈夫大丈夫。君なら楽勝さ♪」

「無いはずのクラブを探し出せってのはどこら辺が大丈夫なんだおい？」

「いやゝゝゝダミー企業でジオネット使って連中の足取りを追ってみたんだけど、途中で消えちゃって困ってるのさ。地下か特殊な施設にでもいるのか一定区域で情報が途切れたし」

「おい。ダミー企業でジオネット使うとか気でも狂ってんのかダメエ?!」

「大丈夫大丈夫。休眠状態の宗教法人複数買い取って、その系列の会社って事で審査通してるから。使い終わったらポイっとね」

置かれていた飲み掛けのペットボトルに蓋をしてアズがゴミ箱へと投げた。

「あゝゝゝもう?! 訊かなきゃ良かった!! そんな裏話?!」

オレのささやかな青春がバラ色からドブ色にいいいい!」?

もう、お前なんかの話聞いてられるか。

ベチリとそう机に紙を置いて久重はその場から「うわゝゝん。オレの青春がああああああ」と逃げ出していく。

アズは放り出された紙に目を通した。

ビッシリと書き込まれた情報は普通の人間ならば一度見ただけでは覚え切れない程の量に達している。

「ふふ、ふふふふふ、やっぱり君は僕に相応しい男だよ。久重♪」

妖艶に笑んだアズの指から離れ紙が窓から外へと運ばれていく。

20××年七月下旬。

外字久重二十四歳の日常は借金と危ない仕事と黒い女によって九割が占められていた。

第一話 迫り来る恐怖の影

朝方の薄暗闇に画面からの光が輝く。

マンション二十五階ワンフロアの一角で朝からシュールな音楽が流れていた。

じゃーじゃん、じゃーじゃん、じゃーじゃんじゃーじゃんじゃーじゃんじゃーじゃん――。

朝から海と叫びとヒレと牙とサスペンスが繰り広げられる一室で、裸の女が毛布に包まり寝こけている。

横のソファでバスローブ姿の優男が次々に餌食になっていく画面の中の人々をぼんやりと見つめていた。

ポチコーンと安っぽい呼び鈴の音が鳴ると優男はノロノロ起き出して玄関まで遠い廊下を歩きつつ、あちこちに散らかる衣服を無造作に拾い上げ一応の身嗜みを整えた。

無造作に玄関のドアを開けた優男はドアの先にいた男の顔を見て、閉めた。

「おい?! ちょっと待て!! さすがにそれは傷つきますよ?!」

ええ、オレの心情的に!!」

「何だ。ただの新聞配達のおっさんか。家新聞取ってないですよ」

優男の返答にドアがガンガンと叩き壊される勢いで打ち鳴らされる。

「もうその発言が矛盾してるから!？」 親友として少しは親友を敬いやがれ!!」 とうるか飯を食わせろ!!」

優男がドアを開ける。

「本音はそれ? 久重」

「う……」

「今月で何回目だっけ？」

「ぐく……」

「あ、そっか。今月は借金の利息で首が回らなくて二日に一回ペースだったかな？」

「……だ、ダメ?!」

ヒシツと低姿勢で久重が優男に上目遣いのキレーな瞳で訊く。

「はあ……」

優男がサンダルを突っかけてマンションの外付け非常階段を下りる。

「僕、永橋風御ながはし・かぜおはこれから親友（笑）と食事に行きたい気分だから、来たかったら来れば？」

「おお、心の友好的発言に感謝ませう」

なむなむと拝み倒す勢いに優男風御は親友（笑）久重にジツトリとした視線を向けた。

「朝っぱらから友達に食事をたかるしか能の無い人間で最低だよね」

「人間は食わなければ生きていけないんだ」

「ドヤ顔で言うな」

風御は歩きながら財布の中を確認した。

現金なんてものはなく、カードばかりが並ぶ財布の中身に久重が脂汗を浮かべた。

「何でお前のカードは金ぴかと真っ黒しかないんだろうな」

「僕、昔からコレクターだったんだよ。結構今でもコレクターらしいだろ？」

「ええ、そうでございますですはい。どうせオレは鉄道ゲームで必ず貧乏神的な何かが付くような人間ですよ」

「朝から何かテンションおかしくない？ 僕は今はスーパー賢者タイム突入中なんだけど、さすがに切れていい？」

「何て羨まし——ごほん。何て爛れた生活を!？ そんなんだから未だにスーパーニートなんだよ!！」

「悔しがれビンボー人」

「自分で言うっておいて何ですけど自滅!？」

下らない話をしながら二人が向かったのは大手牛丼チェーンだった。朝っぱらから開いている聖地を目の前に久重がハートマークにならんばかりの瞳を輝かせる。

牛丼大盛りが二つ。

久重の箸が牛肉に掛かる刹那、風御が話を切り出す。

「で、どうしたの久重？」

「うぐ、こういう時だけ鋭い……」

「で？」

「……アズからの仕事だ」

「僕、関係ないみたいだから帰ろっかな。あ、支払いはしておいて」

「ちょ、ガチで親友を食い逃げにするおつもりですか親友!？」

溜息を付いて風御は再び席に腰を降ろした。

「それで僕に何を頼みたいわけ？」

「あゝゝほんのちよつとでいいから真っ黒の方貸してくんない？」

「とうとう落ちるとこまで落ちちゃったんだね久重……」

哀れみの視線に久重が首をフル回転させて否定する。

「メッチャ誤解ですから!! 今回行かなきゃならない場所の情報

は解ったんだが、入る方法がそれしかなくて」

「一分以内で簡潔に説明してよ」

「アズに頼まれたスニーキングミッション【あるはずのないクラブを探し出せ（できれば内部の情報も一緒に）】でそれらしい場所までは解ったんだが、扉の前にこわーいガチムチ黒人お兄さんがいて【おいジャップ。テメエみたいな貧乏人には此処に入る資格なんざねーんだよヒャッハー】とか言われた」

「金持ちのフリして入りたいわけね？」

「ま、まあ、簡単に言う」と

「……何処？」

「さっすが親友。話が解るうううう」

「そのキャラうざい。静かに食べようよ。人間でしょ君？」

「はい。申し訳ありませんでした親友様」

イソイソと食事に戻った久重が牛丼を約三分で平らげる。

「それにしてもまだ諦めてないの？ あのアストゥーアズに狙われて無事だなんて君くらいだよ」

「オレだってまだ人生の墓場に向かうのは早いと思ってる」

「最終手段はアズの奴隷か。これが大学一の頭脳（笑）とは世界って広いよね」

「頭の出来と貧乏は関係ない」

「ちよちよいと書庫で金融工学でも学んでくれば？」

「オレはそういうのは……」

久重が苦い顔で水を呷る。

「あーはいはい。頭良い癖に中の中で成績維持してた人間には無理か。ま、こっちも人のことをとやかく言えるような人間じゃないからいいよ」

「……悪い」

「悪いと思ってるなら誠意で返して欲しいね。今まで奢った朝食代を耳を揃えて返してくれるとか」

「ごめんなさい。オレが全面的に悪い」

溜息を吐いて久重から時間と場所を聞き出した風御は食事を済ませた後、久重を連れて駅へと向かう。

「カード貸したところで入れる場所でもないでしょ。僕が付いてってやるからガードと調査は任せる」

「了解した。それで何処に向かってるんだ？」

「こんなみすばらしい格好でクラブとか行けとかどうしてるよ。」

久重

「男の買い物に付き合うとか。オレの青春が遠のいていく」

「ま、君もだけどね」

「は？」

久重がその言葉を理解するのは数時間後。

無駄に高そうなスーツを着込まされ、グラサンを与えられ、ちゃらいリングや指輪を付けさせられてからだだった。

午後八時。

当初の予定時刻に達した二人は高層ビルが立ち並ぶ一角の商業ビルへと足を運んでいた。

未だに営業している店が多数あるというのに早々とネオンが消えたビルの中を進む。

あちこちにある監視カメラに視線を向ける事もなく二人はその入り口まで辿り着く事が出来た。

安っぽい鉄製の扉の前にはお約束の如く黒スーツの黒人が屯している。

「ハロー」

ズンズン進んでいき軽いノリで挨拶をかました風御に黒人の瞳が集まる。

如何にもちやらいスーツ姿の優男。

無駄に光物が使用されている腕時計を煌かせる姿は何処かのホスト風とも見える。

しかし、黒人達はその腕に囚われるわけでもなく、風御の隅々まで舐めるように見回した。

「いやん。僕そういう趣味ないよ？」

ゲラゲラと品も無く笑う男の全身がまったくもって完全無欠に【金】以外の言葉が見当たらない事を確認して、二人の内の一人が風御にボソボソと質問した。

「あーうん。紹介は無いんだけどさ。お得意様にはなってあげられるかもよ？　ここそういう場所でしょ？」

黒人が難色を示すと風御は後ろで控えていた完全無欠に危ない「お兄さん」と化した久重に目配せする。

久重は手に持っていたケースの中身をぶちまけた。

比較的重い紙の束がほぼ百、床に落ちたソレを見て黒人達が慌てる。

「あーうん。これでこのオーナーさんに取り次いでくれる？　幾分か懐に入れても構わないよ？」

サラッと流した風御の言葉に男達が二人で顔を見合わせた後、一人を残して慌てて扉の中に入っていく。

扉を開けると更に扉があり、その扉の内には更に扉がある。

三重の警戒を解いた内部へ駆け込んだ黒人が戻ってくる頃にはケースに再び束が収められていた。

残って散らかった束を片付けた黒人が手数料とばかりに幾つか束を懐に入れていたのをニコニコしながら見ていた風御が出てきた黒人に振り返る。

黒人は慇懃無礼に礼をして扉の内部へと二人を招き入れる。

扉の先の暗幕が払われた。

ボディーチェックを受けて入った扉の中には十数人の客。

(!?)

内部の様子に僅かに久重が動揺する。

「久重。自重」

「――解ってる」

久重がグラサン越しにも解る内部の様子に歯を軋ませ風御に止められる。

内部では競りが行われていた。

競りが行われている以外の場所には複数の強化プラスチック製とも見える大きな箱が無造作に置かれている。商品はまるで生気もなく与えられた食事をもそもそと口に入れていた。

「あなたがお見えになられたお客様ですか？」

競りを行っているステージ横から出てきたのは安っぽい流行りの戦隊モノの仮面を被った壮年の男だった。

「その仮面も売り物？」

「いえ、これはちょっとしたお遊びですよ。競りに来ている方々の中にもそういう方がいらっしやいます」

久重が競りを行っている者達の内の数人が様々な仮面を付けている事に気付く。

東南アジアのものと思われるもの。

米国のヒーローを象ったもの。

それぞれにまったく別の仮面が競りに夢中で札を上げ下げする光景は滑稽なものに見えた。

「ふーん。結構、雰囲気良い店だね。昔はこういうところって、もつと臭い場所だったもんだけど」

「いえ、それでは近頃の商売は成り立たないもので」

「そうなんだ」

「はい。それでお客様は何方様からの紹介も無いという事ですが、此処の事は何処で？」

「え？ ああ、僕さ。【A D E T】の関係者だったもんなんだけど、一人で商売始めたらずし仕入れが芳しくなくてね。小耳に挟んだ此処でちよっと仕入れて見ようかなあって」

「【A D E T】の？ 今はフリーという事ですか？」

「まあいかな？」

「いえ、それなら基本的に身元確認さえ行っていたらできれば今からでも競りに参加できますが」

「あ、そう？ 無理言って悪いね。それじゃあ、ほら出して」

久重が懷から数枚の書類を取り出して仮面の男に渡す。

「はい。では、どうぞ。ご既約はお読みになりますか？」

「え？ いいよ。どうせ、何処も同じでしょ」

「それは・・・まあ、そうかもしれません」

「そうそう。で、ちよつと相談なんだけど、今競りに出されてるモノと此処にいるモノ合計で何匹？」

「今はそうですね。おい、在庫表を」

仮面が競りの参加者にシャンパンを配っていたボーイ風の男に声を掛ける。

ラテン系の顔立ちの男はすぐに店の奥に消えて戻ってきた。

男から渡された紙に仮面の男が目を通す。

「現在二十四匹で。今競りに出されているのが一、上物が七、売約済みが一、それ以外が十四、塵が一」

「売約済みと競りに出されてるの以外を全部でコレぐらいでどう？」
風御がスマホを取り出して計算した金額を提示した。

「ん・・・ん。今日のお客様方をこちら手ぶらで帰らせるのは
忍びないのですが」

難色を示す仮面の男に風御が更に追い討ちを掛ける。

「ま、それじゃあ、ちょっとおまけしようか。参加者に一人これくら
いどう？」

「ふむ。それならば」

「商談成立。ちなみにキャッシュでいいよね？」

「ええ、それ以外は受け付けていません」

「なら、コレ。隣のビルの七階にフェラーリ止めてあるから。車ごと
でいいよ。差分は次の競りが行われる時に回収でいいかな？」

「よろしいですとも」

仮面が上機嫌に頷く。

「で、モノの移動はどうやってしてるのか聞いていい？」

「はい。落札後は基本的にお客様のご自宅に私どもの宅配業者が赴
く事になって――」

「トイレって何処？」

「トイレは左奥の部屋を曲がって突き当たりです」

久重の言葉に仮面の男がすぐに返した。

「じゃ、後は任せる」

「はいはい」

風御が安請け合いすると久重はそのまま歩き出した。

（ホント、君は優しいよ。久重）

内心で溜息を吐きながら、親友の善良さを好ましく思う風御は更に
商談を進めた。

誰もいないトイレの鏡の前。

「クソがッ」

手洗いの台に拳を振り下ろして久重が唇を噛み締めた。

店内の商品と競りが生み出す空気が未だ久重の肺に蟠っていた。

「人間を何だと思ってやがる!？」

店の商品は人間であり店の競りは人間の競りだった。

嘗て黒人奴隷が競りに賭けられていた如く店内では若い人間が競られていた。

(ああ、くそ! アズめ! ? 最初からオレがどういう反応するか解ってて……)

妖艶な笑みで人を地獄に落とす天才を恨みながら久重は頭を切り替える。

トイレを出ると左脇にスタッフオンリーの文字が扉に刻印されていた。

躊躇無く扉を開けて内部に侵入し扉を閉じる。

内部で監視モニターを見ている二人と先程までボーイをしていたラテン系の男がギョツと驚いている間に久重は行動に移る。

距離を瞬時に詰め、立っているラテン系の男の喉を拳で潰し、そのまま肘で鳩尾を抉り抜く。

振り向きざまに二人の男の一人を無防備な首筋に拳を振り下ろし昏倒させ、立ち上がるうとしたもう一人の顔面を蹴り碎いた。

脳震盪で意識を失った三人の男達がそれぞれに下手をすると死亡する可能性があったが、久重は構わずに辺りに積み上げられている資料の何枚かを掴んで懷に収める。

部屋の上部にブレーカーと配電盤を見つけて、久重は座る者無き椅子を持ち上げて投げ放った。

突如として店内の全ての電源が落ち、一瞬の静寂の後、ざわめきが広がる。

部屋から出た久重は確認しておいたステージの舞台裏へと移動した。まだ何が起こったのか店側が把握しない店側の監視者が三人いた。

舞台裏で外国人の少年少女を監視していた男達へと音も無く歩み寄った久重は片目を予め闇に慣らしていた片目からの情報を頼りに拳銃を取り出していた男の鳩尾に拳を打ち込んだ。

「がはッ!？」

仲間の苦鳴に驚いた二人が仲間の方へと銃口を向けた時には、姿勢を低く保ったまま突進していた久重の拳がもう一人の鳩尾を打ち抜いている。

「がッッ」

やっと慣れてきた目で仲間を打ち倒した侵入者を見つけた最後の一人が発砲する。

左腕を掠めた銃弾に怯む事なく、久重が低姿勢から全力で膝蹴りを放つ。

「—————」

ゴチャリと男の下半身から聞こえる嫌な音に顔を顰めて、久重は男達が落とした銃を舞台へと蹴った。

銃声に恐慌を来たした客達が扉の方へと殺到しているのか。

悲鳴とざわめきに包まれる暗闇がやっと本来の意味を取り戻したように異様な気配を醸し出す。

人が売り買いされるといふ異質さを包んでいたオブラートが消え去った今、その場に残っているのは暴力と悪徳の気配のみだった。

「これで後は警察にでも任せるか」

さっさと撤収しようと久重が親友の姿を探そうとした時だった。

「【I T E】 起動」

小さな声に籠る殺意に久重は反射的にその場から飛び退いた。

刹那、久重が今までいた場所が明滅した。

瞬時に治まった光が何だったのか解らない久重の背筋に冷たいものが走る。

理解できない致命的な何か。

それを本能的に感じ取った久重がその場から舞台へと疾走する。

「【I T E N D】 Multi p l i c a t i o n R a t e 4. I n c r e a s e L e v e l 3」

久重の後を追うように立て続けに光が明滅した。

「【D e v i l l】 A r m o r y y o r i 項 目 M a r t i a l A r t

を検索。第四種近接格闘武装Download」

久重が舞台から飛び降りると明滅が止まった。

しかし、それでも久重の耳には小さな声がしっかりと聞こえていた。その声に込められた敵意の源を見定めた久重が呻く。

「マジか・・・子供とか」

声の主が今まで震えていた舞台袖の子供達の中から立ち上がる。

夜目の利く久重には線の細い欧州系の人種、十二歳程の白人の少女と見えた。

「構築終了まで十七秒。SabWeapon“Fire Bag”」
舞台へと進み出てくる少女が仄かに照らし出された。

「な!?!」

少女の手が燃えていた。

辺りにガソリンの匂いが立ち込め始める。

『助けてくれえええええええええええええええええ!!!!』

誰も少女など見ていなかった。

客の誰もが入り口へと殺到し続けている。

一人客席に取り残された形になった久重は己の手が燃えている少女の瞳に息を呑む。

その瞳には殺意と侮蔑と敵意だけが宿っていた。

「アレは絶対に渡さない」

「な、何の話だ!?! ちょ、ちょっと待て!!」

「惚ける気? 言っておくわ。もし、私があの場所まで行けばジオネットを通してアレは破壊される」

「何か物凄い勘違いで殺されかけているような気が。って何だソレ?!」

少女のまったく聞く耳を持たない姿勢に久重が脱力しようとして、少女の燃えている手に長い棒が握られつつある事に気付いた。

「痛いじゃ済まないわ。もう増殖は終わってる。構築も終了した。

“Fire Bag”の威力は知ってるわよね? この屋内で逃げ場が無い以上、逃れられると思わない事ね!」

一人で盛り上がる少女が血気盛んに叫ぶ。

ギリッと今だに燃えている手が握っていた棒が差し向けられる。

（この棒・・・伸びてるのか？）

異常な状況を久重は冷静に受け止める。

1少女は自分を敵だと思っている。

2少女は手が燃えて、燃えた手に握られた棒は伸びている。

3少女はFire Bag（たぶんはあの発光現象）を攻撃手段として認識している。

4少女の言い分を聞く限り攻撃が当たったら死ぬ（かもしれない）。

5少女から安全に逃げる術が今のところ思いつかない。

以下の条件から導き出されるその場での最善の方策を久重は瞬時に叩き出した。

「投降する。だから、オレの話を聞いてくれ」

「馬鹿じゃないの？ 死ねば！！」

思い切り悪態を吐かれて、棒が振り回される。

飛び退った久重のいた場所を棒が通り抜けていく。

少女の燃えていた手の光が消える。

次の瞬間、久重は一瞬少女を見失い、大量に何かの欠片が落ちる音を聞いた。

「い?!」

それが少女の振り回した棒の通り過ぎた後の観客達の椅子の末路だと気付いて、久重はそろそろ全員が脱出しそうになっている扉へと逃げるべきか悩んだ。

「ッッ」

久重が瞬時にその場から跳ぶ。

瞬間的に空間がまた明滅した。

「何ソレ?! 気配も何も無い攻撃避けるなんてアンタ葉でもやってるわけ?!」

「オレは基本的にノータッチオカルト・ノータッチアズ・ノータッチヤクの厳然とした普通人だ!!」

「そうやって混乱させようなんてシヨボいわね!! あいつらの手先ってそんなんばかり!!」

「あいつらって誰だ!!」

明滅から逃れながら瞬間的に見える少女と棒を回避しつつ、退路を探す久重の耳に開けっ放しのドアの外から警察よろしくパトカーのサイレンが聞こえ始める。

「く、警察にだってまだアンタ達の息が掛かってない場所くらいあるんだから!!」

「何か大事になってくれてるようでまったく嬉しくない予感だチクシヨオオオ!!」

涙目で回避行動を取りつつ久重が何とか少女を取り押さえようとした時だった。

銃声が響く。

「あうッッ!？」

弾かれたように少女が倒れた。

「何の騒ぎかと思えば、貴女でしたか。ソラ・スクリプトウーラ」
突如、電源が回復し当たりに明かりが戻る。

「ッ、おい!!」

久重の目の前で少女の金髪が血に塗れていた。

「ター・・・ポーリ・・・ン」

少女はどう考えても致命傷だった。

出血する胸元から後から後から血が溢れていく。

「気をしっかり持て!! すぐ救急車を呼んでやる!!」

少女の傍に膝を付いて久重が胸の傷を押さえながら声を掛ける。

「どうやら逃避行も此処までのようで。D1は回収させて頂きます」
舞台袖から白いスーツの青年が降りてくる。

普通の日本人然とした顔とは不釣り合いな白いスーツが薄暗い中で浮かび上がり、底知れぬ何かを連想させる。

「おい!? テメェか!! この子を撃ったのは!!」

「え・・・?」

「ソラ。彼はどういったお知り合いでしょうか？」

「ま・・さ・・か・・」

少女が死の間際に目を見開く。

「おや？ まさか、貴女の知り合いではない。という事は部外者？ はは、貴女も最後まで笑える人生ですねえ。関係ない人間と戦ってる最中に隙を見せてズドン。く、くく、いや、傑作にも程があるでしょう」

笑いを堪え切れないように青年が口元を押さえる。

「あ・・・ご・・め・・ッ」

少女が久重を見上げて喋ろうとして吐血した。

「いい！？ もう喋るな！！ すぐに助けが来る！！」

「で・・・ごめ・・な・・かん・・け・・」

「いい！！ 気にしてない！！」

「あ・・・」

少女は微かに久重の言葉に微笑んで、手から棒が零れ落ちた。

「さて、掃除も済んだ事ですし、貴方にも死んで頂きましょうか」

「おい」

「はい？」

薄ら笑いを浮かべていた青年が銃を久重の頭に付けて撃つたと同時に。

青年の顔が見事に歪み、体が数メートル吹き飛んだ。

「デメエは、クズだ」

白く握り締められた拳から血が滴り落ちる。

「はは、これは・・・どういう冗談で・・・私が傷を？」

何か酷く驚いている青年が見上げる。

「貴方は何なんですか？」

「オレか？ オレはただの通りすがりの何でも屋だ」

近づいてくる久重に対し、青年は構わず銃を連続で撃ち放つ。

計十五発。

しかし、弾丸が久重に当たっている様子は無かった。

弾丸は全て外れていた。

「銃弾が効かない？　いえ、これは、ッ?!」

立ち上がった青年の顔に渾身のストレートがめり込み舞台下へと激突した。

「これはいけない。さすがに未知数の存在との交戦は骨が折れる」鼻がねじ折れ、歯が欠けた青年が己の状態を意に介した風も無く立ち上がる。

久重が疾走する。

まるでトラックが激突したような衝撃音。

最後の一撃を見舞われた青年が何とかその拳を両腕でガードして、舞台へと吹き飛ばされる。

ゴトリと立ち止まった久重の足元に何かが落ちた。

閃光。

「彼方のような得体の知れないモノと戦うのはご遠慮します。もしもまた会う事があれば、その時はお相手しましょう。では」

舞台からすでに消えている青年の足音が遠ざかっていく。

追いかけようとした久重だったが、その時異様な臭いに気付いた。

「ガソリン！」

ハッと顔を上げた久重に雨のようなガソリンが降り注ぐ。

「くそ!?!　証拠隠滅は万全とか!?!」

舞台袖で震えていた子供達の事を思い出し、久重が走る。

数人の子供達を見つけた時にはスプリンクラーで撒かれたガソリンに部屋の一角から火が回り始めていた。

久重が透明な箱の鍵を次々に破り、売り物にされていた誰もを走らせる。

避難させる途中。

客達の椅子の最中に倒れ臥した少女を見つけたが、完全に炎に巻かれていた。

「————悪い」

久重は歯を食い縛って、未だに逃げ遅れている者の誘導を行う。見る限り最後の一人を外に出した時点で扉の外に出た久重は扉を閉

めた。

すでにビル周辺には紅いパトカーのサイレンが屯していた。
大勢の足音が駆けつけてくる。

「この子達を非難させてくれ!!」

銀色の衣服を身に纏う消防隊数人が駆け寄ってくると久重の言葉に
頷いた。

そのまま隊員に先導されてビルの外に出た久重が上を見上げるとビ
ルの一角から煙が立ち上っていた。

「くそ!!」

助けられなかった少女の事を思い、久重が歯を噛み締める。

「君!!　その君!!　今、ビルから子供達と一緒に出てきたね
!!」

警官の声に振り向いた久重は自分が多くの警官に囲まれている事に
気付いた。

「ちょっと事情を聞かせてもらいたい。署の方までご同行願うよ」

完全に密室となった店内。

炎がうねり、全てを呑み込んでいく。

血に塗れた少女の死体もまた燃えていた。

しかし、燃えているにも関わらず、少女の体には焦げ目一つ付いて
はいない。

少女の前髪が炎の熱で炙られて揺らいだ。

髪に今まで隠れていた額付近に僅かな輝きが灯る。

少女の額に文字が浮かび上がった。

【I T E】A u t o m a t i c C o n t r o l。
L o s t P a r t A c t i v a t e。

【I T E N D】R e . . S t a r t。

周囲の炎が急激に静まり始める。

その熱量はただ一点へと吸収されていく。

少女の負った傷へと。

GI NET Connecting
Channel Police Radio。

【あーこちら233。本件の重要参考人と思われる青年一名を確保。これより移送する。名前は本人によると外字久重。二十四歳。來邦大学大学院一年生。尚、現場での――】

「・・・・ひさ・・・・しげ」

その日、商業ビル群の一角で起こった小火騒ぎは比較的小規模で収束した。

火の手は何故か急激に弱まり、二時間後には鎮火。

火事における犠牲者は零だった。

ただ、不思議な事に店内の一角だけが不自然に焼け残っていた為、現場検証が引き続き行われている。そこにはもう少女の姿は無かった。

第二話 謀略の読み手

第二話 謀略の読み手

物語には小道具が必要だと知る者ならば、その光景をこう表したかもしれない。

舞台装置としての神。

全てを終着させる【造られた神々】（デウス・エクス・マキナ）の墓場。

古びた劇場の最中、地に落ちた面と衣装が散乱している。

雄々しく優雅に人間臭い愛と欲望に満ち溢れた神々の衣装は安っぽく、生地も飾りもおざなりな出来だった。

『ターポリン』

舞台の上で一人。

頭を下げている青年がやっと散乱した塵の上で頭を上げた。

「はい。ここにあります」

白いスーツ姿の青年は何処からともなく響く合成音声に畏まった。

『首尾は？』

「ソラ・スクリプトウーラの処分を完了し、現在は警察に【D1】の回収を急がせています」

「そうですか。無能の烙印は避けられませんか」

「それはどういう事でしようか？」

『【D1】が稼動しています』

「まさか？ 確かにこの手で胸部に致命傷を負わせましたが」

『どうやらソラ・スクリプトウーラは【D1】を完全に取り込んだようですね』

「そんな事が可能なのですか？ 生体融合実験は未だに成功しては……」

『ジオネット上で【D1】の活動再開と同時に探査プログラムから

の発信が途絶えました。変異した【D1】はバックアップが起動したと考えられます』

「では、ブラックボックスが開いたと？」

『ええ、完全な形でプログラムが甦れば、我々が施したロックは消失するでしょう』

「【D1】の機能が完全に戻る事になれば・・・」

『その事態だけは避けなければなりません。ターポーリン』

「はい」

『二個中隊を貸し与えます。ソラ・スク립トゥーラの処分を最優先に』

「アレは如何しますか？」

『アレと【D1】は諦めて構いません』

「よろしいのですか？」

『他のオリジナルロットの解析が遅延するのは避けられませんが、致し方ありません』

「了解しました」

青年はその場に背を向けて劇場の外へと歩き出した。

『・・・・・・・・悪魔が笑っていますね・・・・・・・・これは・・・・・・・・・・』

声が途切れた劇場にはもう何の気配も残っていないなかった。

警察署を後にするクーペの後部座席で久重は空ろな瞳で虚空を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「随分とご傷心のようにけど、どうかしたのかい？」

アズの声に答えは返らない。

「もしかして、行ったら悪徳の限りアンアン喘がされる可哀想な子が一杯いたとか？」

楽しげなその無神経極まる発言に久重の手がすっと伸びた。

胸倉が今にも事故を起こしそうな程に強く掴まれる。

「知ってたな」

質問ではなく確認。

「知ってたとしたら？」

「オレはデメエを・・・」

「許さないなんて言葉だったらガッカリするよ。久重」

「何？」

「君には何が出来た？ 君はただの便利屋だ。警察でも無ければNGOでもない。精神科医でも無ければ、消防士でもない。君が出来る事は潜入して探って場を引っ掻き回す事だけだ」

「――？！」

「君が怒るべきは世の悪徳であって僕じゃない。でも、世の悪徳に君は無力だ。怒るだけなら誰でも出来る。いや、殆どの人間はそれしか出来ない。君がどんなに強くても、君はただ強いだけだ」

久重の手の力が緩む。

「今日だって世界の何処かじゃ大勢が不幸な目にあってる。親に売られ、兵隊に浚われ、乱暴され、薬漬けにされ、兵隊にされ、同じ民族を殺し、病気になれば棄てられ、ボロボロになって死んでいく。貧困と格差と差別と宗教と憎悪と多くの悪徳が今日も誰かを呑み込んでいく。だろう？」

久重の手がダラリと下げられた。

「それでも君は怒るんだろうさ。君の心は真っ直ぐで、折れても折れても真っ直ぐで、君を傷つけてばかりなのに」

「解ったような口を利くな・・・」

「久重。君は一人の少女を救えなかったらしい。だから、君は悔やんでいるんだろう。心で泣いているんだろう。けれど、それは無意味な感傷だ。少女の人生で君はたった一欠けらの最後に過ぎない。悲しみも苦しみも痛みも君は癒してやる事が出来ない。少女の命すら助けられない。それが君だ」

「オレは・・・！？」

久重の手がゆっくりと白く白く握り締められた。

「君には出来ないことがある。君には助けられない人がいる。偶然、君は出会ってしまったただだよ。自分の手の届かない人に。忘れるといい。殆どの人間はそうやって生きてるんだから」

「オレを勝手に決め付けるな」
力なく項垂れる久重が吐き棄てるように呟く。

「着いたよ」

久重が顔を上げるともう安アパートの前でクーパーは止まっていた。車を降りた久重が少しだけ躊躇してから窓を叩く。

ウィンドウが下り、怪訝そうな顔のアズに対して久重は一言だけ告げた。

「・・・・・・送ってくれて・・・・・・ありがとう」

少しだけ驚いた顔をしてアズが小さく首を振る。

「警察から釈放させた分は付けておくよ」

「金、取るのかよ」

「ああ、それが僕のやり方さ」

僅かに微笑んでアズはクーパーを発進させた。

僅かに軽くなった心を引きずりながら、久重は階段を上る。

自分には他に何が出来たのだろうか。

自室のドアを開ける。

そのまま靴を脱ぎ散らかして畳みの上に倒れこんだ久重は天井を見上げる。

「・・・・・・オレには出来ない事がある・・・・・・か」

どんなに怒っても少女を生き返らせる事はできない。

どんなに怒っても少女を救う事はできない。

「格好悪くて死にたくなる。まったく・・・・・・」

独り言の余韻すら消えて、静寂に耳を傷めながら、久重は瞳を閉じた。

そうして、やがて眠りへと誘われていく。

（オレには誰も救えないのか・・・・・・）

答えはもう出ていた。

明確な回答が映像となって久重の脳裏を巡っていく。

『泣かないで』

不意に響く声に夢現を漂う久重の意識が反応した。

ゆっくりと瞼を開ければ、滲む世界は紅。

いつの間にか夕方になっていると気付く。

起き出そうとして、紅の世界に金色が紛れ込んでいる事に気付く。

ぼやけた視界がゆっくりと焦点を結び始めて、久重は初めて、自分が心に大きな傷を負ったのだと知った。

見下ろす瞳。

緩められた口元。

ほっそりとした手。

久重自身、そんなものを見てしまえば、認めざるを得ない。
自分は少女を救えず、傷つき、幻想に逃げてしまいうらい、疲弊しているのだと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

紅の静寂に温もりが入り込んだ。

頭を撫でる手。

「!!!!」

完全に目が覚めて久重が起き上がり、振り向く。

「あ・・・・・・・・」

金色の髪をした少女。

何故か、命のやり取りをして、何故か、殺されてしまった、守れなかったはずの少女。

「・・・・・・・・・・ひさ・・・・・・・・しげ？」

そんな少女を前にして久重はただ呆然とするしかなかった。

「戒かいと十じゅうささんん。ちょっとはこっちにもネタ回してくださいよ」

警察署の一角。

資料の山に埋もれるようにして存在するデスクに近づいた三十代の

女が画面に齧り付いて文書を作成している男にベツタリと甘えた調子でしな垂れかかった。

「うっせえ。ちょっと黙ってろ」

「そんなどうでもいい報告書なんて書いてないであたしとお話しましょ？」

「手口が記者クラブ時代より悪辣になってねえか？ 了子^{りょうこ}」

「今はフリーですから」

今年で定年を迎える佐武^{さたけ・かいと}戒十六十五歳にとって女はハイエナより達の悪い友だった。

了子と呼ばれた女は佐武にとってみれば、自分の子供の世代で、どうしても何処か甘くなってしまう部分がある。

記者クラブ時代の女はまだ本当に佐武にとって子供と思える程に若かった。

それが今では長年連れ添った伴侶以上に色々ややこしい関係になりつつある。

ネタをくれとせがまれたり、ネタをくれとせがまれたり、ネタをくれとせがまれたり。

友人だからとお歳暮を毎年毎年贈ってくるわ、色仕掛けが似合う歳になるわ、ピンポイントで佐武自身の情報が筒抜けになっているわ。化粧が若い時より濃くなった以外はまだ二十代でも通用しそうな美貌が懐いた猫みたいに擦り寄ってくる光景は警察署内でも見過ごされてしまう程に常態化している。

「不祥^{はた・りようこ}、羽田了子^{はた・りようこ}。上司のセクハラに耐えられず辞職して、今はフリーですから」

「そこんとこだけ強調すんな。セクハラに対してビンタ一発お見舞いして慰謝料ふんだくった奴が言う事じゃない」

「このお仕事、お金の為でもあるけれど、自分の為でもあるんですよ？ ネタを追う。良い記事が書ける。世間が少しだけ、ほんの0.000000一パーセントくらい良くなる。私、超満足。良い事づくめじゃないですか！」

「真実を探求するとかフリージャーナリストみたいな事を言い出さるところは買ってやる」

「それでネタありませんか？」

溜息を吐いて佐武はデスクを発った。

お供にしてはありがたくない良子を子機よろしく引き連れ、近くの公園まで散歩を始める。

警察署に出入りする老若男女の署員達が微笑ましそうな顔で二人を見送った。

「で、で、ネタはあるんですか!!」

「あゝどうだったかな。この頃物忘れが激しくてよお」

「そうなんですかDHAがいいらしいですよDHA」

「ホント、そういう旧過ぎるネタだけは持ってるのな。お前」

「社の書庫で時々昔の記事漁って読んでますから!!」

「何してるんだよ？」

「○○年目の真実的なネタが無いかと暇潰ししてるだけですけど？」

「………もういいわ」

「そうですか。それではさっそくネタを頂戴します」

「マグロでも食ってろ」

「絶滅危惧種で今じゃ一皿二千元。奢ってくれるなら頂きます」

「解った。お前と話していると頭痛がしてくらあ。ネタやるからとつと今日は帰れ」

キラキラと子供のように瞳を輝かせる三十代のフリージャーナリストに頭痛を通り越したものを覚えつつ、佐武はタバコを取り出して啜えた。

無論、火は付けない。

「昨日のビル火災あんだろ。あれの出火の原因は人為的なもんだ」

「ネタキタ——!!」

突っ込みも入れずに無視して今では一箱四千元するタバコを噛みながら佐武が続ける。

「ちなみに放火とかそんなじゃない。証拠隠滅ってやつだ」

「証拠隠滅キター――!!」

「あそこは人身売買の拠点だった」

「――それって近頃話題になってる華と韓の非合法風俗に関係あります?」

「いや、裏ルートで入国させた連中を働かせてるとか、そういうのじゃない。移民政策であぶれた連中が報告してない未戸籍の人間をターゲットにした専門店だったらしい」

「らしいってまた戒十さんにしては曖昧ですね」

「しょうがねえよ。本庁から来た奴らが主軸で捜査が進んでやがるからな」

「それでそれで!!」

「こっからはオフレコにしとけよ」

「イエスシーキャン」

「その場所で商品にされてた連中を保護した際に怪しいのを引っ張ってきたんだが、あっさり釈放された」

「はい? それって重要参考人って事ですよ?」

「ああ、だが、上の連中はバツサリ捜査線上からそいつを切り捨てやがった」

「どういう裏が?」

怪訝そうな子に佐武が解らないと首を振る。

「ただ、問題はそれだけじゃねえ。あいつらが何故か執拗に現場を漁っててな。とにかく虱潰しに何かを探してるみてえなんだよ」

「何かを探している?」

「他にも不可解な点が幾つもある。さっきの重要参考人だが、店にいたのは確かだが、別に店を利用してたわけじゃねえらしい。それどころか保護した連中の話だと助けようとしてくれたとか。そいつの証言だと女の子が一人死んでるはずだとか」

「死体って事は殺人も絡んでますか。だとすれば、何故釈放されたんですか?」

「死体が出なかったからさ」

「は？」

「証言が丸っきりの嘘だったのか。あるいは死体が消えたのか・・・」

「これはまさかのミステリー路線!？」

「って事で、オレは帰る。お前もお前の巣に帰れ」

佐武が後ろを振り返った時にはもう了子の姿は影も形もありはしなかった。

「お前の方がよっぽどミステリーだったの」

佐武の声は暮れ始めた空に虚しく吸い込まれていった。

夕飯の匂いが家々から立ち上り、まるで平和という名を表したかのような黄昏時。

八畳一間で机と本棚しかない場所で、久重はジットリとした汗を浮かべていた。

その前には少女が何処か済まなそうに正座して久重を真っ直ぐな視線で見上げている。

「その・・・」

ゴクリと唾を呑み込んで、その行為があまりにも周囲から誤解されそうであるという認識の下、久重は混沌とした内心とは裏腹に、明るい声でソラ・スクリプトウーラと呼ばれていた少女に声を掛ける。

「君は・・・どうして？」

冴えない一言はあまりにも多くの質問を含んでいる。

「どうして此処にいるのか。」

「どうして死んでいないのか。」

「どうして自分の名を知っているのか。」

「どうしてどうしてどうして。」

「謝り・・・たくて・・・」

会った時とはまったく正反対に大人しい少女が真摯な瞳で久重に向かい合う。

「私・・・勘違いして・・・それなのに・・・助けてくれよ」

うとしてくれて……だから」

「オレは別に……ただ、当たり前前の事を」

少女ソラが久重の手を両手で掴んだ。

「ごめんなさい。ありがとう」

ソラが頭を下げた。

そして、頭を上げると立ち上がり、ドアの方へと歩いていく。

「さようなら……」

久重の勘は言っている。

その少女ソラに関われば大事になる。

問題が多発する。

関わるべきではない。

関われば、命にすら危険が及ぶ。

長年アズに使われている久重にとって、危機に対する防衛本能は絶対の信頼を置けるもの。

そうなる为核心したならば、それはもう現実には完全な危機と代わらない。

だから、久重は己の本能に従った。

「え……」

ソラの手を掴んだ久重は一言。

「命の取り合いをした仲だ。夕飯ぐらい食べてけ」

「あ……」

久重の手に籠る力にソラは俯けていた顔を上げる。

「でも……私……」

「それとオレはこう見えて危ない仕事も引き請ける何でも屋なんてのをやってる」

ソラが呆然として、慌てて首を振る。

「もし、何かに巻き込むと思ってるならもう遅い」

「ど、どうして？」

「あの白スーツ野郎にオレとお前の分はぶち込んでおいた」
「な!？」

ソラの手を離して、久重が台所へと向かう。

「わ、私……!?」

慌てて止めようとするソラに久重がそっと人差し指で口を閉ざす。

「人の厚意は素直に受け取っておけ。それが世渡りの基本だ」

クシヤクシヤと金髪を撫ぜて、久重が台所に立つ。

「ちやぶ台が横にあるから出しておいてくれるか？」

「……」

ソラが泣いているような笑っているような、そんな顔で久重の背中を見つめ、

「……はい」

玄関から部屋の中へと戻る。

黄昏時、どこからかチャルメラが響いた。

「あ」

久重が固まる。

「？」

「……ちょっと一人増やしてもいいか？」

「??」

久重は冷蔵庫を背にケータイを取る。

その中身は言わずとも空っぽだった。

「で、正体不明の死んだと思ってた命の取り合い（ガチ）をした謎少女が部屋に来て、優しくも夕食をご馳走すると言い張った愚かで可哀想な外字久重君は、夕飯にする食材すら買えない有様でありながらも見栄を張る為に更なる借金をこの僕に申し込み、尚且つ食材の調達まで任せてくれたわけなんだね？」

胃酸で今にも解けそうな内心をグツと呑み込んで久重はアズのジツトリとした視線を背中に受けながら答えた。

「イエス」

「へえ、君にこんな冗談の才能があったなんて僕もまだまだ君に対する研究が必要だと心底に感じているよ」

「H A H A H A H A」

食材を調理しながら白々しい会話が展開される。

「君にもロリコンなんて高尚な日本の精神が根付いてたとは。気付かなかった僕の負けだよ。今日の分は僕が支払っておくから」

アズの機嫌を損ねている要因が主に自分の女性関係だと理解している久重にとって、「支払っておく」との文句は「君は命を大切に出来ないの?」という死刑宣告に等しい。

一頻り久重にプレッシャーを掛けたアズはちゃぶ台を挟んで座っているソラへと視線を向ける。

「【ただ聖書のみ】（ソラ・スクリプトウーラ）・・・か」

ボソリと名を呼ばれて、縮こまっているソラが更に身を縮こまらせた。

「久重の話を要約すると君は狙われている。狙われるに足る何かを持っている。そして、殺された。殺されたにも関わらず生き返った。あるいは死亡できなかった。更には【僕の】久重に会いに来てしまった」

「いつ、オレがテメエのもんになったんだよ!？」

「何か問題でもあるのかな。久重」

思わず突っ込んだ久重にアズの眼光が飛んだ。

怖気すら走らない、見られれば諦観しか持てなくなる視線に晒されて、久重が脂汗全開で調理に戻る。

「その容姿からしてゲルマン系かな。アングロサクソンの中でも血統書付きなレベルだ。所作に美しさがある。上流階級だね。その歳で日本語がペラペラって事は頭は優秀だ。男の部屋で羞恥心丸出しだからまだ男性経験は無しかな。キョロキョロ視線が動くのはこういう室内が珍しいから。つまり、少なくともこの国でもそれなりの場所に住んでいたわけだ。眉間の筋肉の動きからして近頃は怒ってばかりいたんじゃない? 服装のデフォルトが某有名ブランドのワンピースだけど、それは近頃発売した奴だ。その状態からして買ってきたばかりだろう。キャッシュの持ち合わせが外国人に多くある

とは考えにくいから支払いはカードだ。更に言うと君はどうしてそんな事が僕に解るのだと不安に思ってる。ただの推理にしか過ぎないけれど、当たってる？」

「それくらいにしておけ」

ペチンと久重がアズの頭を叩く。

「君が知りたい事を教えてあげただけなんだけどな」

「人に知られたくない事まで晒すのは卑怯者のやる事だ」

「それじゃあ、一番重要な事だけ教えておこう」

「なに？」

料理がちゃぶ台に置かれる。

カレーだった。

「久重。この子は間違いなく君に思慕の情を抱いているよ」

「ぼ?!」

「し・・・ぼ・・・?」

ソラが首を傾げ、久重が顔を紅くした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?!!」

意味に気付いたソラも顔を急激に紅くした。

「ついでに言うとな猫も被ってる。ちょっと考えられないくらいの優良物件だけど、手を出したりしないように」

「テメェはどうしてそう場をカオスにぶち込む天才なんだ!？」

「ふふ、こんな事言ってるけど、内心少しだけ嬉しいのさ」

「え？」

「そこ!?! 無駄話をしない!!」

そ知らぬ顔でカレーを突き始めるアズにそれ以上何も言えなくなっ

て久重が自分の分をちゃぶ台において座る。

「こいつの話は真に受けなくていい。とりあえず飯にしよう」

「頂きます」

久重が手を合わせる。

「いただきます」

ソラもそれに習った。

静かに始まる食卓にカチャカチャと音が響く。

「それで久重。これからどうするつもりなんだい？」

「Cコースってのはどれくらい掛かるのか聞きたい」

アズと久重のやり取りにソラが疑問符を浮かべる。

「ざっと四千万」

「!？」

ソラがアズの語る金額にビクリと体を震わせる。

「……………付けておけ」

「君は優し過ぎるよ。久重」

アズが溜息を吐いた。

「あ、あの、何を話して……………」

「良かったね。ソラ・スクリプトウーラ嬢。君の身の安全の値段を久重が僕に払ってくれるってさ」

ソラが目を見張る。

「な、何でそんな?！」

「それは君に死なれたのがよっぽど堪えたからじゃないかな」

久重がアズを睨み付ける。

口元を押さえてアズが話題を変える。

「ちなみにこのコースはジオネットからの完全遮断と戸籍の抹消その他の個人特定情報の完全秘匿を目的にして僕が開発した代物で、捜査機関や公安が全力でも追跡は不可能。要するに君は目視以外の情報を完全に失う事になる。その上で生活していく為の環境の全てを整えるからお値段的にも馬鹿高い」

ソラが久重を見上げる。

久重は頭を掻いて、目を逸らした。

「あー、袖振り合うのも他生の縁ってな」

「君が気に入ったから助けたいらしいね」

翻訳したアズの言葉に信じられないといった面持ちでソラが首を振る。

「そ、そんなのダメ!! 私、他の人にこれ以上迷惑なんて掛けら

れない!!」

思わず立ち上がったソラの手からスプーンが零れる。

そのまま立ち去ろうとするソラの手が大きな手で掴まれる。

「オレは君を助けられなかった。その代償だと思ってくれればいい」

「そんな?」　だって、全部私の勘違いで!!　私は彼方を殺そうとして!!　それで勝手に巻き込んで!!　なのに!」

手を振り払おうとしたソラの肩を掴んで久重が視線を合わせる。

「オレは、君を助きたい。だから、助ける。これは君の為じゃない。オレの為なんだ」

「オレの為・・・?」

「ああ、オレのただの我侭だ。君を救えなかったオレが、自分が救われないから願いだだけの事。君がもしもそれを本当に嫌だと思うなら断ってくれていい。でも、その場合はオレがオレの責任でオレの力でオレの都合で君を勝手に助ける」

「私、そんな、そんな価値なんて!!」

うろたえるソラにアズがお茶を啜りながらニヤリとした。

「ご愁傷様。こうなったらこの年中金欠男はテコでも動かないよ。」

犬に噛まれたとも思っただけで諦めるといい」

「・・・私・・・私・・・私・・・」

ポロポロと零れ始める雫が頬を濡らした。

「まずは夕食を済ませてからこれからの事を話そう」

久重の優しい声にアズがやれやれと肩を竦める。

「まるで【できちゃったの】とか言われた男のいいそうな台詞だ」

「――」

ソラが涙を零しながら紅くなった顔を伏せた。

すっかりと夜が更けた八畳間からアズが立ち上がる。

「とりあえず、この子の身柄は此処に置いておくよ。今説明したように必要な偽装と戸籍、書類は三日で何とかする。ちなみに此処に居候する【聖空】（ひじり・そら）のストーリーはこうだ。君は口

ンドン留学の経験がある久重がお世話になった日系の大学教授の娘で夏休みを利用して遊びに来ていて、日本での保護者である久重の自宅にホームステイしている」

「ああ、解った」

久重が頷く。

アズがソラへと視線を向ける。

その視線は今までの遊び半分のものではなかった。

「ソラ・スクリプトウーラ嬢。僕は君の過去に付いて一切の調査を行わない。君が何処の出身で、どうして追われていて、何を秘めているのか。依頼を受けた以上、追求する事は無い。ただ、それは久重の身に何も無かった場合の話だ。僕は君を信じていないし、君の何かしらの事情も斟酌しない。僕の債権者である久重が死ぬという事は君と久重に関する全ての負債を償還できないという事だからだ。もしも、久重に何かあった場合、君がそれでものうのと生きている場合、僕は君が負債を償還し切るまであらゆる方法を使って稼がせる。君が『潜伏先』として使ったあのクラブで行われていたような事を含めてだ」

アズの念押しにソラが真っ直ぐな瞳で頷き返す。

「後、僕の久重にちよっかいを出したら僕も本気を出すからそのつもりで」

「だから、テメエのもんじゃないって」

頭痛を抑えるように久重が片手で頭を押さえる。

「それじゃあ、また明日」

ドアが閉まる。

まるで嵐の後。

静けさが戻ってきた部屋に互いの呼吸音だけを認めて、久重がオロオロし始める。

「そ、そろそろ寝るか？」

「ひゃ、ひゃい！！？」

完全に意識してしまっているソラが頷く。

まるで沈黙を嫌うかのように久重はパパッと布団を敷き終えた。

「悪いがオレの布団しかないんだ。これでいいか？」

「は、はい。で、でも、その、ひさ……しげ……さんは？」

ソラの問いに久重が首を振る。

「オレは別に何処でも寝られるからな。布団は使っている」

「で、でも!？」

「それと口調も……昨日のが地だろ？　これからしばらくは一緒に暮らす事になるんだ。遠慮とかしなくていい」

「で、でも!！」

「でも、は無しだ。オレも君の事をソラって呼ぶ。だから、君もオレの事は呼び捨てでいい」

ソラはしばらく迷っていたがコクリと頷いて、躊躇いがちに名前を呼ぶ。

「ひさ……しげ……これでいい？」

「ああ、十分だ。ソラ」

「うん」

ソラの天真爛漫を絵に描いたような笑みに久重も思わず笑みが零れた。

明かりが消える。

もぞもぞと布団の中で動いていたソラが壁に寄りかかって瞳を閉じた久重の方を向く。

「ひさしげ」

「何だ？」

瞳を閉じたまま、久重が答える。

「ひさしげは優しいわ」

「そんな事ない」

「嘘。だって、普通はこんな事してくれる人なんていないもの」

「言っただろ？　オレの為だ」

「人を助けるのが？」

「ああ、そうだ」

「日本人ってもっと慎ましい人達だって思ってた」

「難しい単語知ってるな。慎ましい・・・か」

「私の日本語。何処か変かな？」

「いや、今の日本に慎ましいなんて使う奴はいないと思ってな」

「そうなの？」

「オレもアズもソラよりは慎ましくない」

「そ、そんな事・・・」

照れた声のソラがもぞもぞと布団を口元まで上げる。

「いや？ 一応、慎ましくないところもあるか。勘違いで戦ったし」

「あ、あれは！？ ちょっと、その・・・ひさしげが強くて・・・」

・絶対追跡者だって思ってた・・・」

「オレ、強いかな？」

「普通の人には銃を持ってるプロを倒せたりしないわ・・・」

「武術ってのは肉体労働じゃなくて思考作業だったのがオレの持論なんだがな」

「どうして？」

「自分の体なんだから自分の思うように動かせて当然。自律神経や副交感神経だってある程度は恣意的に操作できるのが普通だ」

「それって普通？」

「銃だって射線上にいないけばどうって事ない。人間が引き金を引く時間は狙いが定まった時こそ早いが、狙いも定まってない時は躊躇するのが大半だ。ちなみに真正面の至近距離でもなければ狙いも定まってない銃で負傷するなんて有り得ない。そもそも拳銃じゃ致命傷を負わずには一発二発じゃ殺傷能力が足りない。頭や心臓を狙い撃たれない限り」

「ひさしげが玄人なのは理解したわ」

「難しい漢字知ってるな」

「ひさしげって危ない仕事をしてる人？」

「オレは大学院生だ。何でも屋は借金返済の為の副業だ」

「ダイガクインセイ？」

「簡単に言うとGraduate Student」

「博士になりたい？」

「オレの場合は色々と事情があるんだ」

「事情……」

「そろそろ寝ないと明日起きられないぞ。今日はここまでにして寝た方がいい」

「うん……オヤスミナサイ。ひさしげ」

誰かにそんな言葉を掛けられて眠るのは久しぶりだろうか、そんな感慨を覚えながら久重の意識は落ちていった。

第三話 証左無き仕掛け

第三話 証左無き仕掛け

【明日を夢見て集え!!】

海外留学のポスターが張り出される構内。

ストローを咥えてミルクティーを吸い上げている金髪少女ソラは外国人が多数往来する廊下を見つめながら目立たないようにラウンジの端で約束の時間を待っていた。

（ひさしげ。まだかな？）

今はソラの保護者と化している久重が学業を休学する旨をソラに持ちかけたが、ソラはそれを断固拒否し、自分の為に何かを犠牲にしないで欲しいと久重に懇願したからだった。

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

朝食後、一人で部屋に置いておく事に不安を感じた久重が多数の留学生を受け入れている自分の大学ならば目立たないはずだとソラを連れ出していた。

「う〜〜〜〜」

久重の通う大学構内の風景にウズウズと体が好奇心に負けそうなソラが立ち上がりとした時だった。

「これはこれは。学生の妹さんかな？」

「!？」

ビックリと体を震わせたソラが振り向くと大柄で小麦色の肌をした男が金髪を掻き揚げたところだった。

「・・・・・・・・・・」

警戒心マックスとなったソラが視線を険しくする。

男は四十代で大学の講師をしているのか白衣を着込んでいた。

「子猫ちゃん。君の飼い主は誰だい？」

嫌味の無い口調で爽やかに聞いてくる無礼者にソラが口を開く。

「彼方、ステーツの人？」

ノリで看破したソラに男が頷く。

「如何にも。そういう君はクイーンズの人だ」

僅かに日本語に残る訛りを感じ取られたのかとソラが口を引き結んだ。

「警戒させちゃったかな？」

「初対面の年下を子猫ちゃん呼ばわりするなんて命知らずだわ」

「俺の母国ならな。此処はそういうのに寛容な国さ」

ソラが男の瞳に気圧されて、反射的に後ろに下っていた。

男の持つ雰囲気。

覇気のようなものがソラにジリジリと焦りを生む。

「彼方、ライオンみたい」

「俺がライオン？　はは、冗談は止してくれ。これでも大学一の平和主義者で通ってるんだ」

寧猛な獣に睨まれたような圧迫感を感じてソラがラウンジから逃げ出そうとした時だった。

ポフツとソラの頭が何かに当たる。

「どうかしたか。ソラ？」

「ひさしげ！！」

思わぬ救い主の登場にソラが猫よろしく久重の背中に隠れた。

「ひさしげ。そこにライオンがいるわ」

久重がソラの指差した先にいる男を見つけ、頭を掻いた。

「んん、確かにライオンって言えばライオンか？　全体的な輪郭が・

・・・」

「お前のお友達か久重！？　それはそれはとりあえず赤飯でも奢るか！？」

男が大げさに喜びH A H A H Aと笑う。

「ひさしげ。このライオンと知り合いなの？！」

驚くソラに久重が首を振る。

「知り合いになりたくない知り合いのナンバーツー。簡単に言うと

オレの大学での上司だ」

「ふえ?!」

ソラが素っ頓狂な声を上げる。

「そういう事だ。子猫ちゃん」

男が豪快に笑った。

「冶金学の博士。ステイブ・ライオネル・ジュニアとは俺の事だZ E♪」

無駄なポーズを取りながら変人はソラにキラリ☆と白い歯を見せた。

変態チックな動きでポーズを決めたステイブの研究室をソラは久重の背中に隠れながらも尋ねざるを得なくなっていた。

「それで久重。今回のプロジェクトから外れたっていうのはどういう事なんだ？」

「やる事が出来た。それだけだ」

ソファアに座りながら、出されたコーヒーにミルクを大量に投下してフーフー冷ましていたソラは二人の会話に耳を澄ます。

「いつもの借金返済か？　だが、利息くらいは返してるんじゃないか？」

「ざっと四千万程追加になった」

「ほう？　使い道は？」

ソラがコーヒーを掻き回すスプーンを止める。

「アンタに教える事じゃない」

ステイブが「ふむ」とコーヒーを啜る。

「大学院を休学するわけじゃないってのはいい。論文はもう大学時代に出してなかったやつを三つ提出済みで審査を待ってるだけだから問題も無い。だが、俺の研究にはお前が必要だ」

「オレは別にアンタの研究室から出たわけじゃないし、あくまで研究への参加は自由って事になってたはずだ」

「そんな事は解ってるさ」

「なら、何が問題だ？」

「解析結果が出た。ほら、これだ」

手渡された紙を見つめて久重が溜息を吐く。

「お前がこのプロジェクトから抜ければ、これからの研究に十年は掛かる。研究が此処で減速すれば、プロジェクトの規模は縮小されるだろう」

「だが、アンタと研究室の連中だけでも出来ないわけじゃない」

「研究が完成すれば各方面からの資金提供と特許の使用料も入ってくる。特許の二つ三つに関してはお前の名前で登録しても構わない」
「随分と豪気だな？」

「それがお前を引き止めるに足る材料なら、その程度の利権ぐらい手放すさ」

それからの沈黙が長かったのか短かったのか。

ソラが久重の顔を見上げた時にはもう答えが返されていた。

「悪いが降りる。オレは別に金持ちになりたいわけじゃない」

「世の中にはそんな台詞を吐けない人間が五万という」

「アンタがオレを特別視してくれるのは光栄だと思ってる。今までの恩もある。でも、それはオレの人生じゃない。アンタの人生だ。

オレの人生じゃなくてアンタの人生を賭けるべき問題だ」

「天才と秀才の違いが解らないわけじゃあるまい？」

「スポーツの才能があったからってオリンピックに行くかどうかはそいつ次第なはずだ」

「この我侭小僧め」

ステイブが仕方なさそうに笑う。

「ああ、アンタに扱かれて育ったからな」

「なら、行け。お前の進む道がオレの研究より凄かったら、その時は祝福してやる」

その言葉に頭を下げて久重はソラを伴い研究室を後にした。

大学の廊下を歩きながら、ソラが久重の袖をクイクイと引っ張る。

「ねえ、ひさしげ」

「何だ？」

「断って良かったの？」

「ソラが気にする事じゃない」

「気にするわ。気にならないわけない……だって、協力してれば借金返せたかもしれない。私の事なんか放って置いてもだい——」

それ以上ソラに久重は言わせなかった。

唇の上に人差し指がそつと乗せられる。

「今現在、オレの人生を賭けるべき問題は此处にある」

コツコツと人差し指がソラの額を突いた。

「ひ、ひさしげ……」

照れくさそうにソラが視線を逸らす。

「とりあえず、これからアズと合流する」

「うん」

二人の足音は講義の時間となった誰もいない廊下に重なり合った。

久重とソラが大学の正門を出るとクーペが一台止まっていた。

運転席からヒラヒラと手を振るアズが二人の様子を見てニヤリとする。

「おい。何だその笑み？」

久重が助手席にソラが後部座席に乗り込むとクーペが発進した。

「いや、仲睦まじいとは良き事かな、とね」

バックミラーに移ったソラのそわそわした様子にアズが目を光らせる。

「で、そっちの首尾は？」

「上々だよ。色々と生活に関するマニュアルも組んでおいたから。」

ソラ・スク립トゥーラ嬢。君の足元にあるバッグを開けてくれないかな？」

「は、はい」

ゴソゴソと足元のバッグを開けたソラが？マークを頭に浮かべた。

「出して着てみてくれるかな」

アズに言われるままソラがバッグから取り出した灰色の外套を着込んだ。

袖が余り手先が隠れるくらいの大きさにソラが戸惑う。

「あ……」

着込まれた外套の表面に自動で不規則な文様が浮かんだ。

「夏にそれは無いだろ?!」

突っ込みを入れた久重にソラが驚いたように首を振った。

「ひさしげ。これ凄く涼しいわ」

「涼しい? それが?」

「ふふん。久重。君は僕を侮り過ぎだよ」

「何なんだ。あのコート?」

「都市迷彩仕様の軍用品」

「ぐ?! おい。何か物凄い犯罪のニオイが……」

アズがダッシュボードから書類を取り出すよう久重に促した。

数枚の紙の束を取り出した久重がTOP SECRETと書かれた一枚目に顔を引き攣らせる。

更にはその紙に描かれている何処かの米印な国の軍事機関のマークに汗を浮かべた。

「……おい」

「ちなみに正規品じゃないから大丈夫」

アズが物品の入手方法を得意げに話し出す。

「いや、僕に逃がしてくれて頼んできた米軍帰属の元特殊部隊隊員がいてね。金が無いって言うから何か金になるもん持ってないのか聞いたらソレをね。こうポンと」

「で、ただ夏場に着てて涼しいコートなんてのがどうして軍事機密なのか聞いていいか?」

「簡単さ。都市部で着てたらまず見つからない」

「は?」

「ひさしげ!!!」

「うお?!」

響き渡った大音量に久重が驚く。

「ソ、ソラ。どうかしたか!？」

「さっきから話しかけてるのにどうして無視するの?!」

機嫌を損ねた様子でソラがコートを脱いだ。

「いや、話しかけてた・・・か？」

「話しかけてたわ。ちよっと声小さかったかもしれないけど、なに・・・」

「わ、悪い。気付かなかった」

「そんなにその人とお話するのが好きなんだ。ひさしげ
何故か半眼で睨まれ、久重が慌てる。

そんな久重とソラの様子にクツクツとアズが笑った。

「効果あるだろう？」

「な・・・そのコートの？」

「簡単に言うと簡易のパワードスーツみたいなものさ。内部温度の調節と防弾性、耐火性、帯電性。それはデフォで付いてるおまけ機能。一番の売りは臨床心理学の研究で出来た人の意識に視覚で干渉する心理的迷彩ってのを真面目に付け加えたところかな。更には最近になって実用化した光学迷彩も装備。超薄型のバッテリーと表面に仕込まれた太陽光と熱から発電するシステムで充電も経済的」

「それに話すアズの言葉にソラも久重もマジマジと外套を見つめた。
「それを着て全迷彩機能を使う限り、監視カメラにも違和感程度しか映らない『怪奇、真夏にコートを着る少女』となれるって寸法さ」
アズの得意げな顔に久重がげっそりした。

「おい。得意げになってるとこ悪いがそのコートのまま行き倒れたらどうする？」

「ずうううううとコートが壊れるまでそのままかもね」

微笑むアズが良い事を思いついたとばかりに手を打つ。

「そんなに心配ならコートを着ている間は手でも繋いだら？」

「な!？」

「ふえ?!」

二人同時に動揺する様子にアズがジツトリとした視線で久重を見る。

「ロリコン」

「ぐふ?!」

思わぬダメージに久重が呻いた。

それに構わずアズが続ける。

「ちなみに心理的な迷彩って言っても大した能力じゃない。そのコートの文様を見た人間が次ぎに見たモノを強く印象付けられ、コートを着た人間を見たって記憶が薄れるとかそういう話だったはずだから。記憶自体はあるけど大した記憶として残らないって言うのが正しい効果かな」

「だが、ずっと透明人間になってるわけにはいかないだろう? 監視カメラだって都市中にある」

何とか心理的ダメージから回復した久重が訊く。

「光学迷彩機能を使わない場合に監視カメラなんかには映ると隠しようはない。けど、都市中の監視カメラに関してはジオネット経由で細工し始めたから、こちらが指定した、あるいは君達が指定した区域での活動なら特定の時間帯は問題無く外出OKだよ」

「凄い……」

アズの説明に正直に感心するソラがアズの横顔をマジマジと見つめた。

「で、今日はこれだけか?」

「君が昨日僕に借金した額を言ってみてくれるかな久重」

「とっっても一杯ですはい」

久重が額に汗を浮かべて笑った。

「君にプライベートな時間なんてあると思ってる? きっちりと体で払ってもらう予定立てておいたから。ちなみに借金の完済までざっと単純計算で五十年。これからも末永く君には働いてもらうよ」

「お、お手柔らかに」

ソラが二人のやり取りに暗い顔をする。

自分のせいで久重にどれだけの借金を背負わせてしまったのか。

そう考えるだけでソラの心は沈んだ。

「それじゃあ、まずは猫探しでもしてもらおうかな。君も手伝うかい？」

「え……」

ソラが驚いた顔をする。

「君の借金は確かに久重が肩代わりした。けれど、君が協力するなら二人分の働きを差し引きして構わない」

「おい。アズ」

「僕はソラ嬢に訊いてるんだ。久重」

アズが久重を訴えを退ける。

「どうする？」

「やらせてください」

「聞こえない。もっと大きな声で」

「やらせてください！！！」

久重がソラの出した出会った時以来の声に驚く。

「決まりだよ。久重」

「いいのか。ソラ？」

久重の問いにソラが決意を瞳に秘めて頷いた。

「私、久重に助けられてばかりだった。だから、今度は私が久重に何かしたいの」

「……解った。これからよろしく頼む。ソラ」

「ッ、うん！！」

ソラの溢れる笑顔に久重は思う。

それは救えなかった後悔より、強く久重の胸に響く思いだった。

この少女にずっとこれからもこういう顔をしてもらいたいと。

（これからが大変だよ。久重……）

アズが二人の様子にひっそりと目を細めた。

安アパートの一角。

外字との表札が出ている部屋の扉を前にして了子は溜息を吐いてい

た。

「いないのかあ。やっと見つけたのに……」

己の伝手と情報網を駆使して、ビル火災現場で確保された重要参考人である人間の名前と住所を突き止めた了子だったが、取材を申し込もうと意気込んでその男の住むアパートに突撃を掛けた結果は空振りだった。

生憎の留守。

居留守ではないかとしつこく扉を叩いたものの誰も出てこず。

アパートの管理人に話を聞こうとしたがそちらも留守だった。

トボトボと萎れた様子で了子はその場を後にする。

「外字久重。二十三歳。来邦^{らいほう}大学大学院一年生。大学での専攻は位置情報利益学。近頃流行りのジオプロフィールのスペシャリスト……か」

了子が調べ上げた経歴に「うゝゝゝん」と唸る。

経歴は平凡なものばかりだった。

別に何かに突出しているわけではない。

それ以前に何か犯罪に巻き込まれるような経歴でもない。

それなのにビル火災の現場にいた。

一部の人身売買被害者からは自分達を逃がしてくれたとの報告も警察にはある。

警察の取調べには淡々と応じていたらしいが、すぐに釈放された。

（経歴と行動がチグハグ過ぎる……）

了子は自分が見逃しているモノの大きさと調査不足を痛感した。

（本人に当たれないなら、友人や家族に当たるのが妥当だけど、この人『黒い隕石』騒動で家族失くしてるみたいなのよね。友人から探るにしても友人関係の把握がまだ出来てない。あああああ、もう！！ 後出来る事が何かないかな！？）

歯痒さに悶絶して、了子はガックリと項垂れた。

「一端帰って風呂でも入ろう」

トボトボと肩を落として帰ろうとした時だった。

ポチコーンとの音。

グルリと首が九十度は曲がったような振り返り方で了子がその光景を神に感謝した。

外字の表札が出ている扉の前、一人の青年がインターホンを連続で鳴らして諦めたのか帰ろうとしていた。

ゴキブリも驚く脅威の瞬発力を発揮した了子の足がハイヒールで百メートル十二秒を叩き出す。

「すいませ〜ん」

「はい？」

声に振り返った青年に人当たりの良い外面で了子が近づいていく。

「外字久重さんのお知り合いの方ですか〜？」

「……アンタ誰？」

「あ、私はこういう者です」

ササツと懷から名刺を取り出した了子が青年にそれを手渡す。

「へえ、ジャーナリスト」

「はい」

「……この間の件調べてる？」

「ビル火災の現場で外字さんを見たとの話がありまして、それで話を伺わせて頂くかと思ったのですが、どうやらご在宅ではなかったらしく、諦めかけていたところに彼方がいらしたので」

「つまり、僕に久重の事が訊きたいんだ？」

「はい。それはもう是非に！！ もし、これからよろしければ喫茶店なんて如何ですか？」

「悪いけど行き着けの店以外は行かない事にしてるもんだから」

「あ、そうなんですか。それなら乗せていきますよ？」

「言っとくけど、高いよ？」

「いえ、気になさらないで下さい」

「そう？」

「ええ」

近くの駐車場からセダンを回した了子が内心でガッツポーズ出来た

のは外字久重の親友永橋風御の行き着けの店の駐車場に行くまでだった。

聳えるホテルの最上階。

『これはこれは永橋様』との声に魂が抜けた了子はその日、自分の給料の半分を放棄するかネタを追い求めるかの二択を迫られた。

無論、ネタを追う者としての矜持がどちらを選んだかは言うまでもない話だった。

魂の抜けた了子が黙々とモグモグと行き着けの『喫茶店』自慢の料理を涙半分自棄で頬張る。

「凄いねジャーナリストさん。こんなところで涙流すくらい美味しいんだ？」

「い、いえ、あんまりの展開にこう涙が……うう……喫茶店じゃない」

「何か言った？　ちなみに此処は僕にとって喫茶店みたいなもんだけど？」

「な、何でもありません！？」

「で、僕に久重の何を訊きたいわけ？」

ゴクリと水でしっかり料理を平らげた了子が本題に入る。

「そのお友達の外字さんはどうしてあんなビル火災現場に居たんだと思われませんか？」

「仕事でしょ」

「仕事？」

「あいつ何でも屋だから」

「何でも屋？」

「ま、何でも屋って言っても仕事そのものはあいつが取ってるわけじゃないけど」

「それはどういう事でしょうか？」

「つまり、あいつは特定の人間から仕事を下請けしてるわけ。内容は言わずもがな」

「……では、あそこで外字さんは仕事をしていたと？」

「そうなんじゃない？」

「そう、ですか。では、その今度は外字さんの人柄についてお聞きしてもいいですか？」

「人柄？ あいつの人柄なんて一つでしょ」

「一つとは？」

「お人よし」

「お人よし？」

「昔っからあいつは何かと厄介事に首を突っ込んで貧乏籤引いてたし」

「外字さんとは昔からの付き合いなんですか？」

「中学生くらいからの付き合いだけど」

「外字さんは昔から人が良かったんですか？」

「根っからの善人。しかも偽善で付く方の」

「え……その、お人よしなのでは？」

「だから、お人よしで偽善者。更には貧乏人。そんなだからかな。僕といつまでも縁が切れないのは……」

何処か遠い目で言う風御に了子は目を細めた。

嘘を言っている様子ではなかった。

仕事柄、人を見る目と嘘を吐いているかどうかを見分けられた。

了子にとって自然と身に付いたスキルであり、そのスキルは風御の発言が嘘ではないと言っていた。

「その、貧乏人というのは……？」

「文字通り。金が無い。いつも金が無い。そういう事」

「外字さんはお仕事なんかはされてなかったんですか？ アルバイトでもいいですけど」

「言ったでしょ。あいつの仕事は何でも屋。それで食ってる。全うな仕事も出来ないわけじゃないだろうけど、長続きしないだろうね」
「長続きしない？」

風御が皮肉げに頷く。

「世の中ってさ。妥協とか必要悪とか、悪い事やそれに近い事でも強要されたりするじゃない？ 理不尽な事やどうしようもないと目を背けられるような事とかもある。あいつはそういうのが我慢できないタイプだね。例えば、並ばない客。例えば、不当な借金の取立て。例えば、見知らぬ死に掛けのホームレス。例えば、ヤクザに殺されそうなサラリーマン。例えば、花壇を荒らす高校生。例えば、落とした財布を盗む馬鹿。例えば、猫を轢き殺したチャラ男。例えば、男に食い物にされてる女。例えば、年寄りから騙し取る詐欺師。例えば、悪事を働く国家権力。例えば、売り物にされた無戸籍外人の子供」

「――！？」

了子が息を呑む。

風御が常のへらへらした顔のまま瞳だけは真っ直ぐに了子を見つめる。

「そういうのが許せないから、あいつに他の仕事は無理でしょ。報われるわけでもない。理不尽や悪が消えるわけでもない。それでも許せないから拳を握れるだけの自分で在り続ける。タフでなければ生きられない。優しくなければ生きる価値がない。なんてのはあいつの為にあるような言葉だよ」

「褒めてるんですか？」

「いや、貶してるんだよ」

「そうは聞こえません」

「偽善者って言ったでしょ？ あいつはいつだって自分がそういう人間で在りたいから戦う人間だ。そこに自分の感情は差し挟むけど、あいつの芯の部分は他人ではなく自分の為に戦ってる」

「誰かの為じゃなくて自分の為にそういう事をしていて？」

「そ。だから、あいつは聖人君子や正義漢って奴とは根本が違う」

「でも、それは……」

「ま、だからこそ付き合いは長いんだろうけど」

「え？」

「考えてもみなよ。本気で誰かの為だけに何かをするなんて傲慢じゃない？　僕は聖人君子的に正義や愛なんかを信じて戦うヒーローに助けられるなんて御免被る。誰の為でもなく自分の為にお前を助けるなんて『綺麗事』を真顔で言える馬鹿にならちよつとは助けられたいと思うけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

風御がワインを空にしたグラス置いて立ち上がる。

「これが僕が知る外字久重という男だよ。少しは参考になったジャーナリストさん？」

「はい・・・・・・・・」

「そ。それは何より。じゃ、僕は帰るから。あ、送ってくれなくても結構。此処のマネージャーにタクシー呼ばせてるし」

「あの！？」

スタスタと歩いていく風御の背中に思わず了子が声を掛けていた。

「ん？」

「何で・・・・・・・・彼の事を教えてくれたんですか？」

了子は直感的に風御が外字久重の側にいる人間だと感じていた。

どんなに貶しても外字を語る風御は愉快げで楽しげだった。

親友と呼ぶからには外字久重を擁護する、あるいは何も話すべきではないと判断してもおかしくは無い。

「ジャーナリストさん。あなたがどれだけ調べても解らない事が世の中には沢山ある。そして、その解らないカテゴリーの中にあの貧乏人はいる」

「私は・・・・・・・・ただ・・・・・・・・」

真実が知りたい。

そんな言葉を了子は呑み込んだ。

「手を引くなら今の内だよ。世界なんてのは謎に満ちていて不可解で理解できないまま過ごした方がいい。下手に理解して人生台無しにはしたくないでしょ？」

もう言う事は無いと支払いをカードで済ませた風御が店を出て行く。

「それでも私は……」
一人残された了子はポツリと呟いた。

闇の中に白いスーツの青年が立っていた。

その後ろには多くの紅い光が闇に浮かんでいる。

光の源は顔を完全にマスクで覆った人間の群れだった。

マスクの目元はまるで目隠しをするように硬質な物体で覆われていた。

複眼にも見えるフラクタルな眼球部分に小さな紅い明かりが点いている。

「では、目標を再確認します」

闇の中、真上に巨大なビジョンが浮かび上がる。

まったくテレビやAV機器やコードが見当たらない虚空に映し出されたビジョンの中には少女が一人笑っていた。

「これが我々の殲滅するべき目標Aです。最後に反応があった地点からサテライトを使って探査中ですが、微弱な反応があったと報告がありました。数分で場所が特定できるでしょう」

ビジョン内の画像が差し替えられる。

次に出てきたのは白衣の人の手に乗った小さな黒いボールだった。

「これが我々の殲滅目標Bです。現在は殲滅目標Aとの融合を果たしているはずですが、目標A死亡後にどうなるか未知数な為、ここで見せておきます。尚、これは初期状態のものであり、この状態で現れるとは限りません」

ビジョンが更に刺し替えられる。

最後に出てきた画像は一番最初に映されていた金髪の少女が白い部屋で黒いボールを掴んでいる画像だった。

「では、これから目標の性能をお見せします。これは目標が実験で出した値ですが、あくまで目安としてください」

画像が動き出す。

その動画の中で少女以外の声が記録の為か実験の詳細を述べていく。

「0020時。これより【情報熱機関】（インフォメーション・サ
ーマル・エンジン）の起動を開始する」

白い部屋の各場所で小さな炎が立ち上り始める。

「被験者名ソラ・スクリプトウーラ。実験名【ITEND】集積制
御装置【Devil】の人制御による全力稼働実験」

炎が少女を取り囲み始めるが、少女はまったく動じずに瞳を閉じて
黒いボールを持ったままだった。

「尚、本実験において博士によるNDの仕様変更が行われている。
現在稼働しているのは熱量閉鎖系の作業構築タイプではなく、熱量
開放系の集中特化タイプである」

炎が正に白い部屋を完全に埋め尽くし業火とばかりに少女を包んだ。
「設定焦点温度は放射線発生危険を考慮して一万度以下とする」
炎が緩やかに少女を取り巻いた。

にも拘らず、少女の髪は一本たりとも焼け焦げていない。

「破壊対象は全方位の十四層耐火防壁を使用」
少女の周囲の壁から炎が完全に消え、少女を取り巻いた炎が意思を
持っているかのように蠢き出す。

「使用プログラム。NO.3“fire bag”今実験用の特殊
プログラムである。このプログラムは作業構築タイプNDを複数織
維状にして一点に貼り付け対象へ瞬間的な熱量の伝達を行い仕様変
更されたNDを通して放出、温度を急激に上げるものである」
少女を取り囲む全ての壁が中央を瞬時に発光させ、融解した。

「このプログラムは通常では不可能な溶接作業を行える可能性があ
り、本実験後最終調整を経てオリジナルロットに登録される予定と
なっている」

「え………何？」

少女が不意に声を上げた。

「どうかしたか？」

「どうして?! 熱量が急激に増大して!?!」

動画の中で少女の周りの炎が膨れ上がる。

「ッ、実験を中止!! 全熱量を緊急に放出!!」

「だ、ダメ?! 【D1】の制御が、あう?!」

少女が持っていた黒いボールを落とした瞬間だった。動画が全て白く染まり途切れた。

「では、予習を済んだところで出かけるとしましょうか。どうやら目標の位置も特定できたようです」

白いスーツの青年ターポリンがマスク達に号令を掛ける。

「全隊、行動開始。目標を完全に殲滅せよ」

マスク達がターポリンの言葉に闇の中走り出していく。

やがて、足音が途絶えるとターポリンが溜息を吐いて上を見上げる。

ビジョンが再び現れる。

ビジョンの中には紅い大地と白い建物が映し出されている。

それが、瞬時に、中心から融解した。

融解した建物を中心にグズグズに大地が蕩けていく。

やがて、巨大なクレーターの中央。

その解けた大地の中心からせり上がるように黒いドーム型の物体が現れる。

「・・・・・・博士。彼方はアレも【Dシリーズ】も造るべきではなかった」

ターポリンが顔を伏せるとビジョンが消えた。

「さて、今度こそ死んでもらいましょうか。ソラ」

闇の中を歩き去る男の背中は何故か悲しみを湛えていた。

第四話 グレムリン

第四話 グレムリン

「にゃーにゃー」

細く鈴のような声が可愛らしく響く。

「にゃーにゃー」

野太い声がげんなりした様子で響く。

「ひさしげ。そんな声じゃ逃げちゃうわ」

「勘弁してくださいマジで」

そろそろ夜も更けてきた時間帯。

都市の路地裏で迷い猫を探す地道過ぎる作業も終盤に差し掛かって
いた。

鳴き真似作戦と称して近寄ってきた猫を片っ端から照合するという
作業に久重の心は折れそうになっていた。

路地裏を覗く輩から悉く哀れみの視線（お大事に……）を受け
るのは苦行以外の何物でもなく。

久重はげっそりとやつれた顔で相棒の少女ソラを見る。

路地裏を覗く輩から悉く微笑ましいものを見てしまった笑み（が、
頑張って！！）を受けて闘志を燃やすソラが近寄ってきた猫を怒涛

の如く掻き分けていく。

「あ、この子みたい」

「ビンゴ?!」

久重が懷から写真を取り出す。

夜のピンク色のネオンに照らされた写真の猫とソラが持っている三
毛猫は正しく瓜二つ。

間違いないと探していた猫だった。

「でかした!?!」

人間に慣れているのか。

ブラインとソラに抱かれている猫は大人しい。

久重がソラに近寄ろうとした時だった。

ソラの額に瞬く紅い点に気付いて走る。

久重の行動に驚いた猫が「ふぎゃ?!」とソラの手から逃げ出した。

「ひ、ひさし――?!」

久重がソラを庇い路地へと転がった瞬間、久重の肩を熱いモノがすり抜け、地面が爆ぜる。

「?!」

庇われたソラが久重の先、遙か先の高層ビルからのレーザーサイトを確認した。

「【ITE】起動!!」

次撃の弾丸が久重の背中に殺到する。

更に路地裏へと複数の方向から弾丸が奔る。

一連の流れで放たれた弾丸の銃声はほぼ一発。

それも常人の僅かに耳に聞こえる程度。

最新式の静穏ライフルによる高精度遠距離の同時狙撃。

初弾は測量の為。

次弾こそが必殺。

しかし、その並の要人なら即死の状況でソラは慌てなかった。

ソラの周囲数メートル四方に薄く黒いカーテン状の幕のようなものがそそり立つ。

（【CNT Defender】展開!!）

ソラの思考を読み取ったように展開された薄いカーテンが数箇所ソラに殺到するように槍の如く迫る。

弾丸を受け止めたカーテンが変形して勢いを殺していた。

様々な方向からカーテンがソラの頭部に向けて幾度も槍の如く伸びるものの、全てが頭部に届く事なく元の形状に戻って地面に弾丸を零していく。

「大丈夫か!？」

「ひさしげ!!　ここから離れないと!!　たぶん部隊が展開され

てる！！ このままじゃ囲まれて蜂の巣にされるわよ！？」

「部隊！？ 追手ってあの白スーツだけじゃないのか？！」

「あいつはエージェントなの！！ 部隊を動かす権利があるから、指揮官として何処かにいるはずよ！？」

立ち上がった久重が次々に勢いを殺されて落ちていく弾丸の音に顔を引き攣らせた。

「おいおい？！ くそ、ここじゃ狙い撃ちかッ。ソラ！！ このカーテンみたいな動かせるか！？」

「大丈夫！！ 走れば一緒に付いてくるからッ」

「なら、行くぞ！？ こくら辺の地理なら詳しい！」

ソラの手を取って久重が走り始める。

それと同時に弾丸の雨が止んだ。

表通りに出た久重が何やら五月蠅そうな住人達の怪訝そうな顔を横目に地下道へと降りていく。

「この地下道は東西南北に出入り口がある！ 今は北口から入った。南口は駅の構内。西口はアーケード。東口は国道に出る」

「駅とアーケードはダメ！？ あいつら絶対に他人を巻き込むわ！？」

「国道か？！ 障害物が看板ぐらいしかないぞ！！」

「いえ、その前にたぶん」

二人が曲がった直後。

銃撃の雨が降り注ぐ。

薄いカーテンのような幕に突き刺さり次々に落ちていく弾丸が小山程になるまで数秒も掛からなかった。

「ちょ？！」

奇妙なマスクを被る黒いスーツ姿の一団から銃撃は止まない。慌てて戻ろうとした久重をソラが止める。

「大丈夫。あいつらはただの足止めのはずよ。問題は」

「そう、問題は私に追いつかれてしまう事です。ソラ」

交差路の中央で立ち往生する二人へと西から歩いてくるのは白いス

ーツの青年ターポリンだった。

「こんな銃撃の音響かせてどういうつもり?!」

ソラが久重を後ろに庇うように前に出て、歩いてくるターポリンを睨みつける。

「おお、怖い怖い。簡単に言いますが、今の彼方達は正体不明のテロリスト。こちらは警察の特殊部隊。付近はさっきから警察の誘導で避難中です」

薄く笑うターポリンに空が苦々しい顔をした。

「もう、そこまで治安当局に侵出してるなんて……」

「いえいえ、こちらの作戦時間も情報漏洩の可能性を考えると十分程度で切り上げなければならぬので」

「どうやって私達を見つけたのよ?」

「企業秘密です」

「サテライトでも使ったわけ?」

「企業秘密です」

「その様子だと【ITE】のサスペンドモードを嗅ぎ付けたってところでしょう?」

「企業秘密ですから教えて差し上げるわけにはいきません。さて、と」

話を切り上げたターポリンが大声を張り上げる。

「皆さん。仕上げといきましょう!!」

ターポリンが懷から巨大な銃を取り出す。

「デザートイーグルなんて格好付けすぎ!! 馬鹿じゃない!!」

「ちょっと弾が特別製です」

軽い調子で向けられた銃口が火を噴く。

「【ITEND】EAT Mode!!」

ターポリンからの銃撃が安々と黒いカーテンを貫いた。

しかし、ソラの叫びに反応したようにソラと久重を周囲を覆うように黒い霧のようなものが発生する。

弾丸が黒い霧に飲まれ消失した。

「どうなって?!」

久重が目を白黒させ後ろを振り向くと今まで銃撃してきていたマスキ達が巨大な砲身を担いでいるところだった。

(RPG?!)

未だ現代において現役を貫く『兵器』に久重は其処が日本の地下道であるという事を忘れそうになった。

「ソラ!!」

「解ってる!!」

弾体が着弾し周囲に爆風と炎が吹き上げる。

それでも黒いカーテンと霧に覆われている二人の場所まで爆風は届かなかった。

「さすがにEAT Modeまでは届きませんか。ですが、どれだけ耐えられますか?」

ソラが唇を噛み締めた。

「大丈夫なのかソラ?!」

「大丈夫……久重だけはちゃんと守るから」

「そういう事を聞いているわけじゃ?!」

「ひさしげ」

久重の言葉を途中でソラが遮る。

「ごめんね。こんな事に巻き込んで。一杯苦労掛けて。大学の事も借金の事も」

「ソラ?!」

銃撃が再開される。

言葉の端々の不吉な響きに久重の体温が下る。

「日本のカレー美味しかった。お布団温かった。私の為に一杯頑張ってくれて……嬉しかったわ」

「おい!? 何一人で完結しようとして、オレはま——」

振り向いたソラが久重の唇を塞ぎ、すぐに離れる。

「これで我侭最後だから。お礼♪」

「……ソラ」

そつと久重を突き放し、ソラが背を向ける。

「今から全力で【ITE】を駆動するわ。瞬間的に百メートル圏内で気温が数十度下る。今、久重には防護用の【ITE】を渡したから五分ぐらいは大丈夫。あいつらもターポリン以外は動けないはずだから逃げ切れるはずよ」

「何勝手な事言って!？」

「これしか!!」

久重の声にソラが大声を上げる。

「これしか……私、ひさしげにしてあげられないの……私、もう誰も目の前で大切な人に死んで欲しくない……」

何も言えないまま、呆然とする久重にソラが再び明るい声で語りかける。

「後、少し。大丈夫……絶対にひさしげは守ってみせる」

「お涙頂戴は結構。そろそろお終いにしましょう」

銃をその場に棄ててターポリンが二人へと近づいていく。

「あんただって全力での【ITE】を食らえば少しは痛いでしょ!!」

「それで死ねない身なればこそ、私は貴女の殺し手に選ばれた」

「可哀想な人。【死体袋】（ターポリン）に入れられてもまだ使われるなんて」

「博士のお人形に言われる筋合いはありません。これでもこちらは世界平和の為に働いています」

黒いカーテンをターポリンが引き裂いた。

「増殖終了。撒布完了」

「それでは倒せないと言っています!!」

黒い霧へと拳を振りかざしてターポリンが叫ぶ。

「なら、喰らってみなさいよ!! 全てを鎖す氷獄を!! NO.

00“closed jail”!!!!!!」

「無駄です!!」

黒い霧を抜けた腕が衣服を消失させながらソラの首を掴み取り、久

重がもう一方の手で邪魔とばかりに払われ吹き飛ばされる。
地下道を照らしていた全ての電灯が消え、久重は絶望する間もなく、壁へと激突した。

高級レストランの食事を味わっておけば良かったと微妙に後悔しながら帰途に着こうとしていた了子は途中、警察の封鎖により帰り道を寄り道に変更していた。

都市の地図が頭に入っている了子にとって警察の封鎖の網を潜り抜けるのは至極簡単な仕事だった。

時には裏の世界を覗いて危ない目に会う事もある記者。

蛇の道は蛇の言葉通り、執拗にネタに迫る気魄は了子を狩人よろしくカメラという銃とペンというナイフを装備した【兵隊】（ジャーナリスト）へと変えていた。

（ネタ！！ ネタ！！）

レコーダーを片手に路地裏から外の様子を伺う了子に気付かず警察官達が素通りしていく。

『いきなりテロリストとか本気なのか？ 本庁の特殊部隊と公安が来てるらしいが』

『何でも国際テロ組織の一員らしいぜ。半径三百メートルの封鎖をいきなりヤレとか頭ごなしに命令されてもな。実現可能かどうかよく考えろってんだ。本庁の連中も困ったもんだよ本当』

すっかり録音した了子はササササと何処かの蛇的な兵も真っ青な足取りで現場へと裏道から接近していく。

現場周辺では警察官に促された市民が混乱しながらも遠ざかっていく。

「これは？！ 確かこの先は地下道と駅だったはず・・・・・・・・・・」
駅側からの封鎖があるとすれば、むむ」

現場へと急いだ了子が地下道付近の路地裏に付いた時だった。

（静か過ぎる・・・・？）

そっと顔を路地裏から半分出して見回した了子が不自然な周囲の状

況に顔を潜める。

（封鎖しているはずの警察官の姿が見当たらない？　これはどういう……）

突然だった。

地下道を中心とした周囲百メートルに霜が降り始めた。

「へ？……さ、さぶううううううううううッ
！？」

混乱しながら了子が路地裏から顔出して辺りを確認する。

「な、ななな、何！？　異常気象！？　エルニーニョ？！　ラニーニョ！？　ま、まさか、クリスマス！？」

スカートにパンストしか履いていない了子が震えながら路地裏から道へと出た。

ゴオツと寒風が了子を直撃する。

「な、なな、何が起こってるって言うのよおおおお！！！」
ダンと地面を踏み締めた瞬間、了子の足がツルリと滑った。

「うおっととととおおおおおおおお？！！」
バランスを取ろうした結果、了子のブーツが滑り出す。

「ひゃう？！」

サーファーも驚く氷捌きで十メートル以上滑った了子が何とか止まった時には、もう其処は地下道の出入り口付近だった。

——そして、了子を見た。

「Fire Bag ですか」

ターポリンが呟く。

電灯の消えた地下道で未だに明かりは失われていない。

その理由は簡単だった。

衣服が消失しているターポリンの全身が炎に包まれていた。

「良い格好じゃない」

焼ける様子もなく無傷のまま炎に包まれる男に首を掴まれた少女は吐き捨てる。

「ええ、さすがにこの格好で警察と応対するわけにもいかないでしょうね」

「殺すなら殺しなさいよ」

「ここで殺すのは簡単です。いえ、此処で殺さない方がこちらにとつては簡単ではない」

「何が言いたいのか？」

「もう一度戻ってくる気はありませんか？ ソラ」

「私を一度は殺した癖に！！」

「生体融合の被検体としてなら生かして差し上げるのも吝かではありません」

「モルモットなんてお断りよ！！」

ソラがターポリンの顔へと唾を吐き掛ける。

しかし、その行為に激昂するでもなくターポリンは続ける。

「貴女を殺してやるのが貴女にとっても最良だと思っていました。

しかし、【D1】がもう覚醒しているにも関わらず貴女的能力はこの程度だ。死の間際だというのに強力になる気配もない。これならば上層部にも掛け合うだけの価値はある。【D1】がああ悲劇を起こさずアレを貴女が大人しくこちらに渡すと言うならば、命を取る必要も無い」

「……………本気なの？」

「ええ、この上なく」

「博士は……………あんたを信じてた……………信じてたの……………
……………なのに、何よ……………今更！！」

「悪役に何を期待しているのですか？ これは取引です。博士亡き今、貴女を直接知っているのは私しかいない。これは過去の私が、今の私に送る最後のケジメだと思ってください」

「何がケジメよ！！」

「地べたに這い蹲れと言っているわけではありませんよ？」

「あんたに命を救ってもらうくらいなら死んだ方がマシよ！！」

「く、くく、そうですか？ 仕方ない……………博士、あなたの

愛した人形を今そちらに送ります。どうか、安らかに」
何処か寂しげに笑いながらターポリンの手が力を入れ始めた。

金色の髪を持つ少女の口から唾液が流されていく。

炎の魔人に少女は縊り殺されようとしている。

なのに、体は動かなかった。

外字久重は所詮、誰も守れない、誰も救えない、そんな人間だった。
そう思えば、幾分楽になれる気がして、久重は己の無力を、嗤う。

はは。

ははは。

はははは。

そう、嗤う。

【君は何を憎む？】

そんな声が聞こえた気がした。

（人一人助けられなくて、何が男だ）

【君は何を憎む？】

（頼ってくれる女一人救えなくて、何が何でも屋だ）

【君は何を憎む？】

「オレは……オレが憎い」

ギチギチと体が悲鳴を上げる。

間に合わないと言性が囁く。

それでも前に向かわねば、手を握ってやる事も、殴ってやる事もできないと知っている。

「オレは、オレの無力を憎む……」

掠れた声に対して、幻聴はもはや無く。

『君は良い奴そうだ。助力しよう』

「「!？」」

死に掛けていた少女と炎の魔人が同時に驚愕した。

キュアン。

そんな甲高い弓を引くような音がして、魔人が吹き飛んだ。

「な?! 馬鹿な?! 博士!? ぐア、がああああああッッッ!!!」

今まで一度として久重の前ですら気丈に振舞っていた少女が、何の躊躇いもなく、ボロボロと。

その胸に光の源があった。

地下道に響く声が続ける。

『見知らぬ君よ。さあ、剣を取れ。そして、どうか……この子を救ってやってくれ!!』

「ああ、見知らぬおっさんに言われるまでもない!!」

久重は重い体を押してソラの前に立ち、その胸元の光を掴んだ。

「ははは、はははははは、博士ええええええええ!!!! さすが博士です!!!! 正に貴方らしい遺書でした!!!! ですが、ただの素人に【D1】が使いこなせるはずもないでしょう!!!!!!」壁にめり込んでいたターポリンが全てをかなぐり捨てて、久重の背中に襲い掛かった。

『反応を確認。敵は君か。厘西^{りんざい}』

ギクリとターポリンの動きが止まった瞬間、地下道を風が吹き抜けた。

ターポリンの体があまりの風速に飛ばされ東口の出入り口の虚空で縫い止められたように止まる。

『そうだな。敵が君だと言うならば、最後の講義をしてやろう』

久重が立ち上がり、掴んだ光を握り潰した。

潰された光が零れ落ち、ソラの額に微かな光の文字が連なる。

【I T E N D】Annihilation Mode。

Energy Source 【SE】。

Full Drive。

零れ落ちた光が久重の右腕を覆った。

『そもそも情報熱機関内臓のナノデバイスを有効に使う為には膨大なフィードバック制御情報が必要だ。その為に我々は量子コンピュータを小型化するか、他の選択肢を考える必要があったわけだ』

「ええ、だからこそ、あなたは人間の脳を使う事を考えた。その試作品を愛でる程に研究にのめり込んだ」

者はこの星のエネルギーを自在に抽出する存在となる』

「そう……か……このエネルギーの源はS——グッツツ
?!」

ゴポリと込み上げてきた血にターポリンの肺が溺れ始める。

『ちなみに君達の有する【ITEND】の永久停止信号を見知らぬ君には与えておいた。君達が最先端の科学を有する存在だと言うのなら、見知らぬ君は科学を食い物にする悪魔グレムリンといったところかな。君がまだ人間らしい体である事を祈っている。厘西』
それを最後に声が途切れる。

「もう……遅いです。博士……今……あなた
の……ここに……に……あなた……
……」

途切れた声に続くようにターポリンと呼ばれた男は静かに目を閉じた。

何故か、その顔は安らかに笑みを浮かべていた。

「どうなって、え？ 人が！？ ちょ、ちょっと貴方大丈夫ですか
！！」

了子は闇の中に瞬いた光に打ち出されたかのような全裸の男に駆け寄った。

そのまま何度か頬を叩き、呼吸を確認し、脈を取り、救命措置を取ろうとして、気付く。

闇の中、薄ぼんやりとした光が消えていく。

その最中に今日出会うはずだった男の顔を刹那見た。

「誰かいるの！！」
「!?」

『こっち！！』

闇の中から聞こえた声に了子が目を見張る。

少女の声だった。

綺麗な鈴を鳴らしたような声。

足音が駆け足で遠ざかっていく。

「ちょっと!! 救急車!!」

もう片手でスマホをコールしながら了子は地下道へと続く闇を見つめる。

（あれは確かに外字久重だった……どういふ事？ テロリストと何か関係があるっていうの?!）

『その女ああああああああ!! 君は何者だあああああああああ』

突然の大音量に了子が顔を上げる。

道を百メートル以上離れて警察官の群れがジリジリと迫りつつあった。

「あ……やば……」

『もしかしてお前了子かあああああああああああああ』

「え……まさか戒十さん？ 戒十さあああああああああ
あああああん」

『とにかく其処の男と一緒に事情を訊かせろおおおおおおお』

「救急車あああああああああああ用意してくださいさあ
ああああああああああい。この人心臓止まってるううう
ううううううううううううううう」

現場によく解らない微妙な空気が立ち込める。

変なやり取りをする正体不明の女と現場のトップ。

その間柄がどんなものなのか。

大事が発生したにしては呆気ない、あまりにも不可解な事件の終結だった。

封鎖された駅構内に警察官の姿が無い事を確認してから地下の線路に出た二人は全速力で走っていた。

「大丈夫か？ ソラ」

「うん。ひさしげはケガしてない？」

「ああ、こっちも大丈夫だ」

「そっか。良かった……」

何をどう切り出せばいいのか解らない。

両者とも同じような顔で只管に走る。

「ソラ」

「うん」

「此処から逃げ出せたら後で訊きたい話がある」

「うん。私もひさしげに話したい事沢山ある」

「なら、一緒だな？」

「うん。一緒」

命の危機を迎えていたからか、走っているからか。

その二つの胸には多くの感情が過ぎる。

「オレ、人殺しになっちまったみたいだ」

久重が少しだけ苦く笑った。

「違うわ。ターポリンはそもそも死人だった」

ソラが首を振る。

「どういう事だ？」

「【I T E N D】で体の各場所の機能を誤魔化してたの。融合体とは程遠い設計だったはずだから、寿命そのものは後一、二年も無かった。ひさしげは死んでいる人間を元の死体に戻しただけ」

「ずっと気になってたんだが【I T E】とか【I T E N D】って何なんだ？」

「【I T E】正式名称インフォメーション・サーマル・エンジン。

N Dはナノデバイス」

「まさか……」

久重がS Fでよくある設定を思い出す。

「うん。ひさしげが思い浮かべてるモノで正しい。簡単に言うとなノマシン」

「ちょっと待て！？」 確か、ナノマシンってのは」

「ひさしげが言いたいのはナノマシンはあくまで『出来ただけ』って事でしょ？ でも、私達の体はそれに守られてる」

「どういう事だ？」

驚く久重にソラが自分の額をコンコンと叩く。

「【I T E N D】はね。完成してるの。それもS Fに出てくるような高性能な代物として。私もひさしげも今全然息を切らしてないで走れてるわ。それはこの【I T E N D】にサポートされてるから」
「・・・信じるしかないんだろうな」

「さっきのターポリンは【I T E N D】で肉体を修復する検体としてあいつらに体を弄繰り回された。でも、技術不足で修復ではなく『不完全な固定』しか出来なかった」

「それは・・・ソラが生きてる事とその・・・関係あるのか？」

「うん。私の【I T E N D】は肉体だけなら細胞の残骸とエネルギーで完全な修復が出来る。エネルギーが溜まったら自動で肉体の破損を修復してくれるらしいわ。細胞の活性化支援プログラムとN Dの細胞再構築O Sが完全なものだから・・・」

「S F・・・だな」

「うん。でも、S Fみたいに無限のパワーや無限に復活なんて都合主義じゃないの。この力を創造した人は言ってた『無から有を創造する事は今の科学では出来ない。これは神の力ではないんだ』って」

「なら、ちゃんと守らないとな」

「え？」

「ソラ。オレは君を二度も死なせない」

「――あ、ありがと・・・ひさしげ」

二人は不意に夜の風を感じた。

長いトンネルから抜ける。

「帰るか。まずはそれからだ」

いつの間にか繋がれていた手をしっかりと握り返して、ソラは頷いた。

第五話 風車と狂気

第五話 風車と狂気

「ふんふんふふ〜ん♪」

何処にでも在る高校の何処にでも居る女子高生『布深朱憐』（ふみ・しゅれん）は上機嫌に未だ朝早い道を急いでいた。

亜麻色の完全な縦ロールが左右に三つずつ燦然と輝く髪は正にチョココロネを思わせる。

スレンダー『過ぎる』体型を覗けば、顔の美醜は近隣の高校の中でも群を抜いている。

しかし、決定的に今時の洒落た高校生と違うのはそのチョココロネでも顔でもない。

化粧っ気や洒落っ気の無さだった。

最低限の手入れはされているが、まったくのノーメイク。

最低限の身嗜みはあるが、まったくの装飾品絶無状態。

高校の制服を正しく着こなし、鞆も新品を絵に書いたように綺麗で小物も付いていない。

高校一年生という事を除いてもまったく過ぎる様態はある種の人間達にすると「自分色」に染めたくなる程の無垢さで、夏の朝日に照らされた朱憐はキラキラと何らかの粒子でも放射していそうな笑みで道を急ぐ。

その嬉しそうな笑みには理由があった。

朱憐の運命の出会いを回想する。

中学三年生冬の陣。

最初から推薦を貰っていた朱憐は高校受験とは無縁な暢気さで冬の夜道をホクホク顔で帰っていた。

無論、焼き芋屋さんから大量の焼き芋をゲットしたからだ。

そこに悪者がやってきた。

『おうおうおう。その焼き芋旨そうだな。ちよつと寄越せ。何？寄越せない？　なら、お前の体で払って貰おうか！！　げへへへへへへ、げははははははは（主観と客観の相違が含まれています。ご了承ください）』

『待てええええええい。貴様ら！！　そのかわゆいおぜうさんをどうするつもりだ。オレが相手になってやる。キラン（主観と客観の以下略）』

ぐああああああああ。
どかーん。

『そこのおぜうさん。大丈夫でしたか？　あの悪い連中に何かされやしませんでしたか？』

『大丈夫ですわ！！　わたくし、これでも合気道六段ですよ♪　それにしても遅しい方・・・・わたくしと恋人になってくださいませんか？』

『そいつはいけねえや。そういうのは結婚できる歳になってからにしてください。おぜうさん』

『何て謙虚な方・・・・ぼ』

『それではまた何処かで』

『ああ、行ってしまわれるのですか！？　せめて、せめて！！　お名前だけでも！！』

『あっしの名前はガジ・ヒサシゲ。けちな遊び人でさあ』

『ひさしげ様・・・・あの方がわたくしの運命の人・・・・』

』

半年後。

『お、おぜうさん！？』

『ひさしげ様！？』

『こんなところで会うとは偶然で』

『まさか、こんなに早く・・・・出会うなんて・・・・高校の登校途中の道で会うなんて・・・・運命を感じますわ・・・・』

『そうかもしれやせん。オレの家は此処の近くなんでさあ。もし、

良ければ今度は家に来てくだせえ』

『はい。喜んで……ひさしげ様』

そんな事があって以来朱憐は三日に一度必ず朝から運命の人の家へと通っていた。

清貧を旨とした運命の人はいつもお腹を空かせているので朝から朝食を作る。

少し新婚さんチックで朱憐にとっては何よりも優先するべき高校生活の一部としてその行為は組み込まれている。

朱憐にとってはまるで一世紀以上昔のような住宅が見えてくる。

その009号室。

外字の表札があるドアのベルを鳴らした。

「もう、ひさしげ様ったらお寝坊さんなんですから。わたくしが起こして差し上げなければなりませんわね」

そっと朱憐はドアを開ける。

鍵は掛かっていない。

それが自分の来るのを待っている合図なのだ。と朱憐には解っていた。靴を脱いで上がると小さな小屋のような場所で愛しい人の入った布団の膨らみを見つけ、朱憐の胸がキュウウウンと高鳴った。

「ひさしげ様。ひさしげ様」

優しく優しく声を掛け、それでもやはり布団の中から顔が出てこず、朱憐が少しハシタナイと思いつつも頬を染めて、そっと布団を剥いだ。

「ひさしげ様。朝ですわ。わたくしの方にお顔を向けてくださいませ」

背中を向けている久重の背中をそっと引き寄せて顔を拝もうとした朱憐が久重の顔とは別の顔を見つけた。

「？」

バッチリとその久重ではない視線と目が合った朱憐がしばしの沈黙の後、倒れた。

「……………」

久重の腕の中でぼんやりとしていたソラが頭に？マークを浮かべて数秒。

「ひさしげ。誰か倒れてるわ」

「………んあ？」

起こされた久重はまだ寝ぼけている内から自分の布団を朱憐に譲渡する事となった。

「………ん………ん………？」

目が覚めた朱憐は目元を少し擦った後、体を起こした。ぼんやりとする頭の中に響く包丁の音。その音の大本を見つめて、胸が高鳴る。

（ひさしげ様。わたくしの代わりに朝食を作ってくださいますの？ ああ、そんな、わたくし嬉しくて涙が出そうに……）

少しだけ伸びをして出た涙をそっと拭い、朱憐が出されたちゃぶ台に気付く。

「？」

更にちゃぶ台の上に肘を乗せてジイイイツと自分を見ている少女に気付く。

外国人の少女。

流れるような金髪でほっそりした手足がお人形のように。

更に朱憐の興味を引いたのは少女の仕草だった。

ほんの少しだけ首を傾げて朱憐を見つめているだけなのに、その所作は洗練されていた。

「あの、何方かしら？」

「私？ 私は………ひさしげの大切な人」

「お、おい。ソラ！？」

「ひさしげ。昨日、大切な人って言ってくれたの嘘？」

少女の少しだけ不安そうな顔で背中を見つめる瞳に自分と同じものを認めて、朱憐が驚く。

「そ、それは言った。言ったが、それを人前で公言するのは日本人

としてどうかと思う。そういうのは秘めてこそ華って日本では言うんだ。OK?」

「うん。おーけー」

クスクスと慌てた背中を悪戯っ子のような笑みで見る少女は朱憐にも解るくらい、自分と同じだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？」

再び氣を失った朱憐にソラが首を傾げる。

「ねえ、ひさしげ。また、この子氣を失ったわ」

「おい!？」

一行に事態が進展しないまま進んでいく何かが久重の背中にズッシリと重く圧し掛かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙を打ち破ったのは朱憐の方からだった。

「ひさしげ様」

黙々と鮭の切り身と白米と味噌汁を口内に消していた久重が白米を喉に詰まらせそうになってお茶を啜る。

「わたくし一つだけお聞きしたい事がありますわ」

「何だ？」

「この外国人の子は何方ですか？」

「オレが昔世話になった外国人の教授の娘で夏休みを利用して今はホームステイに来てる。止まる場所をオレが提供する形で今は居候の同居人だ」

「いつからですか？」

「二日前」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうして一緒のお布団で寝ていましたの？」

「どうしてだ？」

「そこで私に話を振るなんて、ひさしげって女性心理に疎いわ」

「いつの間にかオレが悪い事になってないか？」

「ひさしげ様？」

朱憐の問いかける眼差しに久重が重い口を開く。

「う、昨日二人で疲れてたからな。急に眠気が襲ってきて、記憶が曖昧な感じだが、そのまま寝たらしい」

「ひさしげ様。日本は男女七歳にして同衾せずとか。そのような格言があつたりなかったりする国ですわ」

「以後、気をつける」

頭痛を抑えるように頭に手を当てて久重が頷いた。

「その……貴女お名前は何といいますの？」

「ソラ。ソラ・スク……ひじり・そら聖空。片親が日本人なの」

「空さん？」

「うん」

「わたくしは朱憐。布深朱憐ですわ」

「シュレン？」

「はい」

「シュレンはひさしげの恋人？」

「な?!」

うろたえる久重だったが、以外にも朱憐は動じなかった。

「ひさしげ様はわたくしの運命の方ですわ」

「ちょ?!　ぐ?!」

サラリと答えられて久重が喉に飯を詰まらせ、グビグビとお茶を呷る。

「……シュレンは高校生？」

「はい。近頃進級しまして。今は來邦高等女学校の一年となります」

「（大和撫子って慎ましかで御淑やかな人だって聞いてたけど、随分積極的だわ）」

「あの、何か？」

ボソボソと呟いてソラが朱憐に何でもないと答えて食事を再開した。それから食事を終えて洗いのまで済ませた朱憐が正座でちゃぶ台の前にジッと座っている久重の前に戻ってくる。

「ひさしげ様」

「何だ？」

「今日からお夕飯も時折作りに来ますわ」

「あゝ夕方は基本的に仕事でいない事も」

「はい。ですから、これを」

鞆を手繰り寄せて朱憐が中からゴトリとちゃぶ台に一台のスマホを置く。

「—————」

その意味に戦慄した久重は作り笑顔のまま絶句した。

「必要な時は学校が終わる三時以降にお掛けくださいまし。そろそろ夏季休業に入りますから、その時はお電話差し上げます。わたくしもいつも空けておけるわけではありませんが、出来る限りの夕食を用意させて頂きますわ」

「いや、さすがに悪————」

「何も、悪くありません。ひさしげ様は信頼に足るお方ですから。ちなみに料金はわたくしのポケットマネーですからご安心を」

「いや、そういうもんだ————」

「ひさしげ様がわたくしを必要としてくださる時にわたくしが出来る限り応える。何処にも問題なんてありませんわ」

「はい……」

朱憐が「それでは」と丁寧な頭を下げてそのままドアを開けて駆けていく。

高校の一時限目は迫っている。

しかし、久重は知っている。

何事にも丁寧な朱憐は必ずドアはゆっくり閉め、どんな時も決して走るような事はない。

「ひさしげってプレイボーイなの？」

その様子を畳んだ布団の上に座り込んで見ていたソラが半眼で訊く。
「その表現の断固とした変更をオレは要求する」

ちゃぶ台の上のスマホを凝視しながら脂汗を滴らせる久重が溜息を吐いた。

「あんな可愛い子に言い寄られて本当はちょっと気分いい？」

「人間は愛だけじゃ生きられない。そこを的確に突いてくるからな。朱憐は……」

「それって久重に生活能力が無いだけじゃ……」

ジットリとダメなモノを見る視線を送ってくるソラに久重はもうグウの音も出ない有様でバツタリと畳みに倒れ臥した。

「それを言われるともうオレには返す言葉もない」

「でも、あの子の気持ち。少しだけ解るわ」
「？」

「ひさしげは寄る辺無き小鳥にとって止まり木みたいに見えるんだと思うの」

「止まり木？」

「ひさしげ。あの子助けてあげた口でしょ？」

「半年くらい前にチャライ男のグループに囲まれてて、ほんの少し捻って追いついただけだ」

「ひさしげ……」

呆れた様子でソラが溜息を吐く。

「それって運命の出会いとか、馬に乗った王子様って言うわ」

「いや、本当にその時だけしか助けてないぞ？ それ以前に再会したのが四週間前。不定期で朝食を作りに来てくれるようになった。何処に王様様フラグがあるのかとオレは聞きたい」

「ひさしげって女性の機微が解らない人？」

「オレは運命だからあいつを助けたわけじゃない」

「他の人が同じような目にあっても助けてた？」

「当然だ」

「でも、今は大切に思ってるでしょ」

「だが、今の関係を数年は続けるべきだとオレは判断した」

「シュレンの事好き？」

「恋愛感情に関しては……まだ先延ばしにしておきたいと思ってる」

「ちゃんとシュレンが大人になったらって事？」

「見て話せば解るが、朱憐はお嬢様だ。本来ならオレが普通に話す事も難しい家の一人娘。ちなみにいつも朱憐が来る日は朝から周囲に複数の気配がある。窓から見える風景の何処かから双眼鏡で見られてるぞ」

「それホント」

驚いた様子で窓の外をソラが見つめた。

「ああ、あくまで来る日だけってのがポイントだ。たぶんこっちのプライバシーも一応は考慮してるんだろう。さすがに集音マイクや盗聴器なんか怖かったからアズに頼んで調べてもらったがそういうのは来る日でも無いらしい」

ソラが布団の上から降りる。

「ひさしげ。ずるい……」

指摘されて何も言い返せない久重は「そうだな」と一言だけを口にした。

やがて、沈黙を割るようにソラが今までの『日常の確認』を終えて本題へと入る。

昨日は結局精神的な疲れからまったく話せていなかった『事情』が二人の上に押し掛かっていた。

「ひさしげ。まだ、戻れる……」

「そういうのは大人の方から言わせてくれるとありがたい」

「子ども扱いする気？」

「違う。ソラはオレが一方的に巻き込まれてると思ってるだろうが、そうとは限らないって事だ」

「どういう事？」

何を言われたのかと混乱したソラが訊き返す。

「オレを見てきたなら解るはずだ。オレは一般人じゃない。いや、一般人に見えても普通じゃない」

「何でも屋の事？」

久重が頷く。

「オレが普通だと思うか？」

「久重は私みたいな暗い世界よりは普通の世界で生きてるもの」

「普通の日本人は君の事情が透けて見えれば冗談と笑うか警察に行く。少し暗闇に踏み入れた人間なら利用しようとするか、全力で逃げようとする。でも、オレはそのどれでもない」

「そう・・・かも」

「アズの本名というか通り名というか正式な名称は『アズ・トゥー・アズ』、昔に聞いた話だと国籍も人種も年齢も住所も性別以外は何もかも未定なんだそうだ。そんな奴の下で働いてるオレはその手の一部の人間からは正体不明なアズの手下らしい」

久重がまだちゃぶ台の上に残っていたお茶で口を湿らせる。

「オレはあいつと一緒に色々やってきた。時には非合法、時には合法、やり方は問わなかった。日本のマフィア。ヤクザの連合と話付いたり、お米の国の情報機関に付け狙われてみたり、日本の国家権力にちょっかい出してみたり、そういうのがオレとアズの仕事上何度もあった。外国に連れていかれて仕事させられた時はトカレフどころかサブマシンガンだの機関銃だのよく向けられたし、工作員がまとめて三ダース程攻めて来た事もあった」

ソラがあまりの内容にポカンとした。

「どっかのアニメとか漫画の話どころじゃない。オレはそういうところで生きてる。アズがオレを使う理由は単純にオレの頭のデキとオレの精神的な耐久値を見込んでとの事だ」

「漫画みたい・・・」

「本当な。だが、それがオレの、外字久重の日常だ。だから、オレは昨日の襲撃の時も銃を向けられて動く事ができた」

「久重ってやっぱり玄人なんだ」

「オレはソラの事情に一方的に巻き込まれたわけじゃない。まだ、そういう事態になってないだけでソラがオレの周囲の事情に巻き込まれる可能性だってある」

「シュレンみたいなの？」

久重がお茶を噴出しそうになった。

「そ、それとは別にして」

お茶が喉の奥に強引に流し込まれる。

「オレにとって、ソラの事情はたぶん『凄い技術』が関わってる以外はいつもの事だ。だから、言うなら『まだ、戻れる』なんて水臭い事じゃなくて『助けてくれる？』の方がオレは嬉しい」
ソラが顔を伏せる。

「久重。絶対後悔するわ」

「見知らぬおっさんに頼まれたからな。たまにはそういうのもいいさ」

少しずつソラの声がブレていく。

「後悔しないって言わないんだ」

「オレが後悔するのはソラを死なせた後だろう」

その視界が滲んでいく。

「私、凄く凄く迷惑かけると思う」

「今更だな。朱憐の今後の行動にオレの胃は現在ジクジクしてる真っ最中だ」

鼻が吸られる。

「世界の運命とか、悪の組織なんて馬鹿なものと戦わないといけなくなるかもしれない」

「オレがどうにかできるのはオレの手が届く範囲にいる奴だけだ。」

世界も悪の組織も知った事じゃない」

ポタポタと音がして畳に染みが出る。

「命掛けじゃない。命を掛けてもどうにもならない。きっと、久重死んじやう……」

目を瞑って、ソラという少女は震える。

「ソラより先には死なない。約束する」

決壊した少女の顔は涙と鼻水でグシャグシャだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 助けてくれる
？」

やっと、それだけを搾り出した少女の肩を掴み上向けて、そのグシャグシャな顔に、久重は頷いた。

「オレに出来る限り。こんな君より弱いオレで良ければ」

「う・ん・ん・ん」

少女は思う。

自分がもう救われているのだと。

抱きしめてくれる人の温かさを失いたくないと。

事情が話された後、二人はやってきたアズに言われるまま仕事へと向かった。

二千年代初頭。

日本において二つの研究成果が発表された。

一つはマックスウェルの悪魔を実験装置において再現した事。

一つは量子テレポーテーション技術における基礎の確立。

この二つによりナノデバイスと量子通信、更には量子コンピュータの基礎研究が出来上がった。

二つの研究成果は多くの諸技術を発展させ、百年に満たない内にその成果を民間が享受するまでに至った。

光量子通信網による大容量超高速通信の実用化。

量子コンピュータによる予測演算結果を元にした研究速度の飛躍的向上。

SFの世界にしか存在しなかったナノマシンの開発成功。

どれもこれもが世界を驚かせるに足るものだった。

しかし、ナノデバイス研究はナノマシン開発の成功と共に影が落ち始めた。

ナノマシンそのものを造り出した事は賞賛に値したが、そのナノマシンの限界と実用性が当初の予測を下回ったからだ。

ナノマシン一つを作る為に掛かる莫大なコスト。

ナノマシンの性能限界。

ナノマシン量産の困難さ。

様々な問題が山積した後、ナノデバイス研究はナノマシンそのものから離れて、ナノマシン開発過程で発生したナノテクノロジー応用研究へと移行していった。

しかし、一人の男はその多くの困難を解消した。
博士。

そう呼ばれた存在はナノマシンの研究において画期的な多くの発明を行った。

複数のナノマシンによる自己複製能力の開発。

ナノマシンの複雑な動きを可能にする新OSの開発。

ナノマシン制御を簡易に行えるデバイスの開発。

その他無数の改善がナノマシンの能力をSFの域にまで引き上げた。どれもこれもがノーベル賞どころか歴史に名を残すに足る所業だった。

その行いが一つの組織の下で行われたものでなければ。

その後、彼らは【ITEND】（インフォメーション・サーマル・エンジン・ナノ・デバイス）研究において一つの成果を望んだ。

それは一人の科学者が考え出した無限機関の創造。

人類の歴史を左右する力。

【シラード・エンジン】

不可能とされていたソレに足る、その名を冠するに足るだけのモノを彼らは博士に望んだ。

昼も過ぎた頃。

ソラと久重はアズに導かれるまま都市の外れの廃工場跡に辿り着いていた。

「で、今日の仕事は？」

「逃げ出した脱走犯の捕獲」

クーペから降りたばかりの久重が思わずコケそうになった。

山が近く緑豊かな廃工場跡。

一面が草で覆われたアスファルトと鉄筋コンクリート製の建物。

どう見ても夏場の怪談スポット。

どんよりと垂れ込め始めている雲で薄暗さが増した周囲には虫の声。

「おい?! 何で警察が動いてない!？」

「公安の人的にそれは不味いらしいね。監禁場所から逃げられたらしいし」

笑顔で言われてグツタリしたい気分に加えられた久重は後ろでジツと待っているソラに声を掛ける。

「手伝ってくれるか？」

「どうすればいいの」

何もかも吐き出してスッキリしたのか。

何の気負いもない笑顔で言われて、訊いた久重の方がうろたえそうになった。

「へえ……昨日の仕事を失敗して何をしてたのか知らないけど、随分と仲が良くなったんだね？」

笑みと怒りを同等に混ぜ込んだアズの皮肉に久重の胃がシクシクと胃薬を要求し始めた。

「それについては謝る」

「いいよ。何か依頼人が勝手に帰ってきたとか言ってたから」

「帰ってきた？」

「何でも酷く怯えた様子で外に出たがらなかったみたいだよ」

「……………」

内心、二人が猫に謝った。

「ちなみに今回の目標の顔写真はこれ」

差し出された顔写真を二人が覗き込む。

「おっさんだな」

「うん」

「しかも、アロハを着てる」

「うん」

「グラサン掛けてるな」

「うん」

「何か釣り番組でクルーザーに乗りながらカジキ釣ってそうだな」
「？」

よく解らないという顔をしたソラが首を傾げる。

「で、このファンキーなおっさん誰だ？」

「GIOの幹部候補生。名前は『田木宗観』（たぎ・そうかん）三十九歳」

「ちよっと待て！？ GIOって言ったか？」

「言ったね」

「ゼネラル・インターナショナル・オルガン？」

恐る恐る久重がアズに訊く。

「そう。現在世界一の超巨大多国籍企業。世界各国のジオプロフィール
ットプロデュースを手掛けるジオネット時代の雄。君の仕事の八割
を占めてるお得意様」

「おいおい……何でそんな大物が公安に捕まってる？」

キナ臭さ全開の仕事に久重が愚痴る。

「テロリストとの関わりを指摘されて逃げ出そうとした。確保した
はいいが結局逃げられてしまいましたとさ」

「表の事情なんぞいい。本当のところは？」

「内閣官房長官をブチ切れさせたみたいだよ」

「は？」

「日本政府、経済界とGIOとのデカイ取引をぶっ潰されて、どち
らの幹部もお冠なのさ」

「待て待て。どうして幹部候補生がそんな事をする？」

「さあ？ 取引内容はトップシークレット扱いだから知らないけど。
拳銃持って経済界の大物達の傍にいたって証言が出たから、そこか

らテロリスト扱いされたみたいだね」

「ちなみに訊くが、今回の公安からの依頼か？ それともお前自身の私用か？」

「どっちだと思う？」

「どっちにしる断れないのは分かってる」

「なら、悩む事なんてない。はい。捕獲用のスタンガンと催涙スプレーと警棒」

「要るか?!」

後ろの席から取り出された黒いバックを久重が速攻で拒否する。

「要らないの？」

ソラの不思議そうな顔に久重が頷く。

「とりあえず先行する。ソラはオレの合図でオレの後を追うようにしてくれ」

「うん」

久重が歩き出す。

「ふふ、久重は相変わらずだなあ」

「………それ中身無いわ」

ソラがボソリと呟く。

「おや？ バレてたかい？」

「ちょっと気になったから調べただけ」

ナノデバイスでは言わず、ソラがアズを見上げる。

「久重はああ見えて熱血漢の博愛主義者だから、人間は死傷させないようにしてる。まあ、熱血漢だから悪い奴は死ぬぐらいボコボコにしたりするけどね」

「そういう道に誘ったのは貴方だって久重が言ってた」

「それでも付き合いは長いから。色々久重には儲けさせてもらってるよ」

「……………」

「一つ誤解が無いように行っておくけど、久重は僕がいなければ、いつか、どこかで、理不尽を許せず理不尽に殺されてただろう。小

悪党、巨悪、それが例え国家であろうと自分の許せないものには容赦なく立ち向かっていく。それは所謂アロンソ・キハーナの生き方だ。基本的に現代の生き方として賢くない。自分の物語を現実として置き換えた者の末路は愉快な騒動じゃなく無様な死に様となる。だから、僕はこれでも久重の保護者を自負してる」

「風車に立ち向かっていく勇氣があるから、久重は私を助けてくれた。不器用かもしれないけど、私はそんな久重だから一緒にいたいって思う。そんな久重だから……」

「人はそれを狂気と呼ぶよ？」

「私の知ってる人が言ってたわ。狂気の無い人間にどれだけの事が出来るのかって」

「確かに……そうかもしれないね。狂気無くして偉人は何も生み出せないのかもしれない」
ソラが病院の方に顔を向ける。

久重は手を上げ、もう合図していた。

「アレが偉人かどうかは後世の歴史家にでも評価を任せるとしようか」

駆けていく背中をアズは笑いながら見送った。

未だ雲は晴れていなかった。

第六話 善悪の彼岸

第六話 善悪の彼岸

「本はいい」

曇天。

「実に素晴らしい」

廃屋の屋上にて、彼はアロハを着込み、ビーチチェアに腰掛けて本を読む。

「そうは思わないかね？」

傍らにある台には骨董品クラスの機械であるラジカセ。

「人類が他の種に唯一自慢できる文化だろう」

サングラス越しで文字が見えているのかも怪しい。

「君達はどう思うかね？」

ひょいとグラサンを外して尋ねる男に久重は本能的に関わり合いになりたくはない人間だと察した。

「フーガか。随分と趣味がいいな」

ラジカセから流れる旋律に男が微笑む。

「そうか。これが解るか・・・」

パイプオルガンの音色にソラが興味深そうな顔でラジカセを見つめる。

「今時の若者にしては見識が深い」

「それはどうも」

男が片手に持っていた缶ビールを煽る。

「傘はどうした？」

「生憎と仕事は迅速が信条だ」

「ふむ。感心な事だ」

「あんたを捕獲にしに来た」

「雨に一緒に打たれてみないか？」

胡散臭い男の提案に久重は首を横に振る。

「お友達を募集中なら会社に帰ってからにしてくれ」

「会社には嫌われたらしくてね」

「ついでに政府と経済界からもか？」

「雨に打たれた事の無い連中が考える事はどうにも合わない」

「致死性トラップを百以上仕掛けた人間の言うこっちゃない」

呆れながらもまったく油断していない久重は男を睨む。

久重とソラが通ってきた道には巧妙に隠されたトラップが幾重にも張り巡らされ、ソラの【ITEND】のサポートが無ければ建物ごと二人は爆死していたかもしれない。二人は爆死してはなかった。

「結構、真面目に組んだんだがなあ。自衛隊仕込だよ？」

「訊いてない」

「それにしても驚いた。こんなに可愛いお嬢さんが一緒とは」
頭に載せた麦藁帽子を取って、男がソラに一礼する。

「お嬢さん。『田木宗観』（たぎ・そうかん）と言います。どうぞよろしく」

「ふえ！？ ひ、ひさしげ」

『どう接すればいい?!』とオロオロするソラの気持ち解って、久重は苦い顔をした。

目の前の男が柔和どころか、見たままの男である事が二人を困惑させていた。

「あんたは国からも組織からも追われる立場だ。言ってる意味解るな？」

「人生最後は笑って前のめりで死にたいものだ」

「あんたの持つてる情報を欲しがってる奴がいる。オレはそいつからの使いだ」

「お嬢さんや未来ある若者を巻き込む程の秘密じゃない」

「後、数時間もすれば此処も嗅ぎ付けられる。此処で拘束を待つか死を待つか」

「君達と共に行くか？」

言葉尻を捉えられて久重が頷いた。

「そうだ」

「……………曇天に掛かる虹を期待して此处で待ってたんだが、どうやら一緒に見る時間も無いらしい」

「おい。少しは真面目に」

久重が男に声を荒げようとしてソラが久重の前に出る。

「ソラ？」

ソラが男の前に立つ。

「おじさんは悪い事をしたわ」

「ん？ 何かな？」

「あんなに罠があつたら誰も虹と一緒に見てはくれない」

「……………そうか……………いや、その通りだ」

男が一瞬、我に帰ったような顔をして、まるで悪戯を叱られる子供のように頭を掻いた。

「お嬢さんに言われてしまうとは我ながらみっともないな」

男がズボンの横をゴソゴソと漁り、久重に投げた。

久重がそれを受け取ると男が歩き出す。

扉の方ではなく、屋上の淵へと。

「持っておきたまえ。それが答えだ」

「おい！？」

久重が慌てて男を追おうとすると、ソラがそれを止めた。

「ソラ？！」

「ダメ！！ 足元よく見て！！」

言われて初めて久重が気付く。

足元に薄く光輝く線が僅かに見えた。

「ちなみに連動している爆薬は全てこの場所の支柱に仕掛けられている」

男の声に久重が呻く。

「あの罠は罠か……………」

「最後に君達のような若者に会えて良かった。たまには偶然も良い

仕事をする」

「おじさん」

「お嬢さん悪い。こんなおじさんの我俣に付き合わせて。目を閉じていなさい」

男が手すりを越え、呆気なく、落ちた。

「アディオス」

最後の声が遠のいていく。

久重がソラの視界を手で覆う。

「ひさしげ」

「悪い。やっぱり待ってて貰えば良かったな……」

久重の苦渋の声にソラが首を振る。

「生きてるわ。おじさん」

「は？」

「さっき話してる間に【CNT Defender】張っておいたから。降りよう」

ソラが下来た道を急ぎ足でも戻っていく。

それに久重も続いた。

二人が建物の外に出る。

「この間の黒いカーテンか？」

上を見上げた久重が気を失い薄く黒いカーテンに受け止められ宙吊りで気を失っている男を見つけた。

「ターポリンにやられたのが修復終わったから。おじさん一人くらいなら大丈夫」

「……ソラには頭が下るといとか何というか」

安堵の息を吐いて久重はゆっくりと降りてくるカーテンから男を受け取ると背負う。

「行こう。厄介な連中が来る前に」

「うん」

二人を迎えたアズは男を後部座席に座らせ、その場を後にした。車が出発して数分後。

巨大な爆光を後ろに確認したアズは目を白黒させている二人を楽しそうに見つめ、クーペのスピードを上げた。

寂れた商店街の一角。

シャッターばかりが下りた店舗の一つ。

細い路地を抜けた裏側から一つの階段が続いている。

錆びた鉄を軋ませながら大きい荷物を運び込んだ久重は遮光カーテンが下りている部屋のソファ一横でグッタリと椅子に座り込んだ。店舗の一角を改装してある事務所にはデスク用品が並び、クーラーがガンガンと冷風を吐き出している。

部屋の中央。

巨大な黒檀の机が鎮座していた。

無闇に大きな牛革の椅子がその主を向かえて沈む。

「ご苦勞様。久重」

アズの労いに久重は更なる疲労に襲われたように溜息を吐く。

「ここ……事務所なの？」

久重の横の椅子に座って内部をキョロキョロと見回していたソラがアズに訊く。

「ようこそ。我が居城へ」

アズがにこやかに告げる。

「本当に城だから達が悪いけどな」
ボソッと久重が呟いた。

ソラが首を傾げる。

「さて、今回の仕事の報酬だけど。これくらいでいいかな」
机からゴソゴソと茶封筒を取り出したアズが久重の方へと押しやる。
立ち上がった久重がそれを受け取って中身を確認した。

「……………これで何日生活しろと？」

「ああ、そうだ。忘れてた」

アズが更にもう一つ茶封筒を差し出す。

「布団一組分。必要経費として出しておくよ」

「一応、感謝しておくべきなんだろうな」

「勿論。君の借金の利息は年利で0・00002パーセント。それすら返せない君に、それでも儲けを考えて出してる金額だ。借金が今日も一万円程減った事を僕に感謝するんだね」

ソラが利息の低さに驚きを隠せない様子で目を丸くする。

「それでこいつはどうするつもりなんだ？」

ソファーに“大きな荷物” 田木宗観三十九歳が目覚める気配もなく眠っている。

「とりあえずは事情を訊いて。金目のものを吐き出してもらって世界の果てにでも送っておこうかな」

「世界の果て？」

ソラの呟きにアズがニツコリと微笑む。

「北は北極から南は南極まで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソラが驚いて久重を見る。

「本当だ」

久重が悪い冗談でも口にしたのかのように呆れながら頷いた。

「近頃は衛星技術も発達してるからな。そういうのから逃げたい連中を一年中空が曇ってたり吹雪いていたり雨降ってる場所に何度もそいつは送ってる」

「君に褒められるなんて何年振りかな？」

「主要各国が独自の宇宙開発とGPSネットワークの構築に躍起になってるからか、そういう情報も結構そいつのところに入ってくる。そういうのから抜け穴を見つけて、こいつは逃亡者に高額プランで売付けてきた」

「地獄の沙汰も金次第ってわけさ♪」

人差し指を立ててフフフと妖艶に微笑んだアズだったが、不意に上を見上げて懷から拳銃を取り出す。

「おい！？ 何懷から出して?!」

「久重、お客さんが来るよ」

「な!?! どうやってだ!?!」

「ああ、どうやら其処の眠り王子に衛星からの監視が付いてたらしい」

「お得意の抜け穴の話はどうした!?!」

思わず喚いた久重にアズが首を振る。

「さすがに抜け穴を全部網羅してるわけじゃないよ。と、言っても日本が上げてる衛星に関しては殆どの情報を網羅してるはずだけど……。たぶん、あの金に五月蝍い政府肝入りでわざわざ特別予算まで組んだ【上弦一号】かな。アレにはG I Oも出資してて打ち上げが先月だ。TV見なかったかい?」

「家にTVなんて時代遅れなものはない」

「女からは端末を買ってもらえるのに君ときたら」
「やれやれと言いたげなアズが肩を竦める。」

「何で知ってるんだよ!?!」

「君の事で僕が知らないのはその心の内ぐらいだよ」

「言ってる。で、数は?」

「二十人。米軍上がりのゴロツキにヤクザ屋さん。それとG I O警備部の特務外部班。この構成から言って国民の選んだ政治家とG I Oの御偉いさんがそれぞれの人脈に声を掛けたってところかな」

「特務が? 洒落にならない冗談だ」

久重が頭痛を抑えるように頭を押さえた。

「ひさしげ?」

ソラが不安そうに久重の袖を引っ張る。

「あ、ああ、悪い。少し嫌な思い出が……」

「思い出?」

「話に出てたのはG I Oの掃除屋だ。表向きは現金輸送車の護衛とか、G I O要人の警護なんかを担当してるんだが、裏の顔は簡単に言うとは諜報機関さながらのエージェントが蔓延る魔窟だ」

「殺し屋……とか?」

「かなり荒っぽいG I A、公安の類と思って構わない」

「外はもう固められてるっぽいなあ。ついでにジオネット上で半径三キロのマップがジオプロフィールトから除外されてる。しかも、五キロ以上先の地域でスーパ―やら百貨店のプロフィールトセールがオンパレード・・・あからさま過ぎだね」

「その、どうして解るの？」

ソラは虚空を見ているようにしか見えないアズが次々にライブ情報を口にする不思議にマジマジ顔を見つめた。

「昔、左の眼球をやってね」

アズが片目でウィンクすると、虹彩の色が変色し、薄く輝く紺碧に染まる。

「それ以来、楽をさせてもらってる」

ソラが目を見開く。

「【B M I S i g h t】・・・」

「ご明察。よく知ってるね？」

「日本が近頃今までの視力装置より高性能なものを開発したってニュースで聞いたから。でも、確か・・・」

「僕のはちょっと高性能なんだ。色々と繋げてあるから」

「言ってる場合か。ルートは？」

「地下から二百メートル先の倉庫下」

「了解。で、このおっさんはどうする？」

「もう起きてるよ」

久重が後ろを振り向くとボリボリ頭を搔いて田木が起き上がるところだった。

「・・・どうやら君達を巻き込んでしまったようだ」

ばつの悪そうな顔で田木が三人を見渡す。

「こちらで何とかしよう。それがケジメだ」

「違う」

「お嬢さん？」

ソラが田木の前に立ち、真っ直ぐに瞳を見上げた。

「死ぬのは責任を取るとは言わない」

「どうやったかは知らないが命を助けられた。こちらに出来るのは君達にこれ以上迷惑を掛けない事だけだ」

言い聞かせるように笑みを浮かべる田木にソラが首を横に振る。

「人生に疲れたからって言い訳にしないでほしい。それはケジメじゃない」

辛辣な言葉に田木は初めて少女の瞳を見た。

その瞳の奥にある光が田木の全身を射抜く。

「――まったくもってその通りだ。私も焼きが回ったかな。一日に二度も年下のお嬢さんに教えられるとは」

田木がアズに視線を向けた。

「あなたの高額プランとやらを利用させてもらいたい」

「お支払いは？」

軽い調子でアズが営業スマイルを浮かべる。

「今の私はカードもキャッシュも持ち合わせていない。資産の大半はG I Oに押さえられていて引き出す事も出来ない。隠し口座もたぶんバレているだろう」

「返済プランも一緒にどうです？」

「臓器と良心を売り渡す以外なら何でもしよう」

アズが胸に手を当て一礼した。

その顔が久重には悪魔のように天使に見えた。

「ご利用ありがとうございます。お客様♪」

「話はまとまったな。行くぞ」

久重がソファアを退かした。

「隠し通路・・・」

ソラが呆れたように呟く。

下にポツカリと口を明けた黒い穴には梯子が掛かっていた。

「元々、私は防衛大卒でね。陸自で働いていた。一身上の都合で退職した後、あの会社に声を掛けられたのが全ての始まりだった」

暗い通路を懐中電灯で照らし歩く中で田木は事の発端を語り始めて

いた。

「私はエリートコースを自分から外れた人間だ。古巣には未練も無かった。だが、彼らは最初から私のコネを当てにしていたのだろう」

「コネ？」

「コネクション。つまりは自衛隊との繋がり」

ソラの疑問を久重が補足する。

「私は提示された金額にそう興味が無かった。ただ、新しい仕事場としてあの会社は魅力的に映った」

「そこまではよくある話だね」

アズに田木が頷く。

「そうだ。私も企業側の意図は何となく察してはいたが、別に職業倫理上問題があるとは思えなかった。役人が天下りしているように、私もそういう枠組みの中に組み込まただけだったからだ」

田木が一拍の間を置いた。

「政府高官や経済界と元々太いパイプを持っていたGIOにとって、私の取り込みはコネの強化の一環。その程度の認識だった。しかし、とある計画が私のいたセクションで持ち上がったから、私は自分の仕事に疑問を持つようになった」

未だ追手に追いつかれる気配もない通路で田木の声が反響する。

「自衛隊へのジオプロフィール導入。それはそもそも私がいた時代にも一部で噂されていた。それを行うのが自分の仕事になると思わなかったが、時代の流れだとは思っていた」

「試験的な導入こそあるが本格的なテコ入れはまだ政府で審議中じゃないなかったのか？」

久重の言葉に田木が首を振る。

「いや、問題だったのは表向きの平和利用ではない」

「表向き？」

ソラの疑問に久重が答える。

「今現在でも日本は米軍の力で国の防衛費を削減してる。日米安保が未だに生きてるから日本は本来巨額の負担になるはずの防衛費を

安く済ませてる面がある。だが、近頃は米国の凋落が激しい。米軍の再編で基地なんかもどんどん自衛隊側に引き渡されてる。そこで問題になったのが自衛隊の頭数だ。超少子高齢化＋自衛隊員確保の困難さ。更に移民の受け入れ失敗で懲りた日本は多くの職業に国籍条項を取り入れた。差別だなんて言われたが世論は支持してな。そういう経緯から今の日本は自衛機能が停滞してる」

「GIOがそこにジオプロフィットを持ち込んだ……？」
ソラの言葉に久重が頷く。

「簡単に言うと法整備を行って民間人なんか危険地帯で『特定の行動』を起こすと給料が出る仕組みだ」

「……………それって」

「所謂、戦時特例法。ジオネット法の拡大で民間人なんか国土の防衛を自発的に行ってもらおうって訳だな」

「それ本当に？」

日本の平和憲法を知っているソラからすれば、まるで信じられない話だった。

「昔の日本なら絶対に潰されてそんな法律だが、今の人口の高齢化比率を考えたらやむを得ないんだろう。何せ自衛隊員の平均年齢が四十四歳。七十六パーセントが六十五歳以上、どうしようもなく疲弊してる」

田木が声を硬くして久重の説明を引き継ぐ。

「国土の防衛は綺麗事では済まされない。実際に現環境では人口の増大した大国と渡り合うのは自衛隊では不可能だ。どんなに兵器を効率化しても、どんなに兵士達の練度を上げてても、数の前には敗北するだろう。だから、自衛隊はその信念というべきものを曲げざるを得なかった。守るべき国民に自衛という名の戦闘行為を容認する政府の暴挙を留める事は出来なかった」

田木の言葉に滲むのは力無き自らへの悔恨だった。

「審議は続いてるが数年の内には成立するだろう。法案が成立すれば『誰であろうとも』その地域において国土防衛の為の戦闘行為は

合法となる。その高額なジオプロフィット目当てに人は集まるだろう。民間人への武器の供給はG I Oの軍事部門が自衛隊協力下で行う事になっている。それによってG I Oも利益が上がる仕組みだ」

「そんなの・・・」

何と言っているのか解らず顔を曇らせるソラが黙り込む。

「昔の日本なら完全に馬鹿にされただろう」

アズがその会話で初めて口を挟んだ。

「でも、日本の国民はそれを受け入れた。五十年続く不況、続く超少子高齢化、移民に労働人口を奪われた悲哀、それらは目を曇らせて余りある。それにジオプロフィットを求めて戦場に行く日本人は事実上存在しないと言っている。だから、国民からは大きな反対意見が出ない」

「え・・・でも、それじゃあ・・・」

ソラの言いたい事を先取りしてアズが皮肉げに笑った。

「移民政策の失敗で難民化したような外人が今の日本には三百万人もいる。生活保護も受けられない彼らは日本という国ではスラムすら作れない。徹底した治安対策、テロ対策、労働政策が移民を下層労働者として固定してる。更に『日本人』じゃない彼らに『敬意』を表して、政府は法案が通った後、彼らに対してのジオプロフィット設定金額を高くする予定さ」

ソラが完全に沈黙した。

「それと同時に何故かコスト削減の名目で経済界が賃金を引き下げればアラ不思議。日本の為に命を掛けて戦ってくれる移民達が出来上がり。ちなみに指定される一定地域で自衛隊や日本人への攻撃が確認されれば、マスコミはこぞって放送するだろう。ああ、やはり移民なんて受け入れるべきじゃなかったと。その差別利権に乗っかるのは移民排斥運動で国民から圧倒的支持を得るだろう与党なのさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソラが泣きそうな顔を俯けた。

久重が隣を歩く小さな手を握る。

「だが、それだけならまだ私は会社の歯車として今も職にあっただろう。少しでも人々へ働きかける術があるなら、それに越した事はない。同じ国に住んでいる以上、私は彼らも守るべき国民だと思っている。しかし……」

今までの『前置き』を挟んで尚、田木の口は重かった。

「GIOは政府と密約を交わした」

「それが狙われる理由か？」

久重に田木が視線を合わせた。

「もし、自衛隊へのジオプロフィット導入やジオネット法の拡大が全て茶番だったとしたらどうする？」

「茶番だと？」

「現代の戦争は経済活動の一部だ。利権が生まれるのは当然だろう。そこに漬け込むのは死の商人だけではないのだよ」

「一般論だな」

「GIOは政府に戦争が起こった場合、その危険区域に指定される場所の統治を『委託される』事を約束した」

「一種の特区ってわけか？」

「違う。地方の疲弊著しい日本で企業が主体となって地域を立て直すというのは昔から言われていた事だ。GIOはそれを戦争で実現しようとしている」

「……嫌な想像しか出来ないんだが、あんたの言うてるのはまさか」

「戦時ジオプロフィットの指定区域がGIOの統治下に移行する。」

法、政治、軍事、経済、全てが『委託』という形で譲渡されるはずだ」

久重が空も見えない地下道で天を仰いだ。

「いつから企業が国を欲しがる世の中になったんだ？」

「一応の形は戦時ジオプロフィットの明確な指定と管理を行う為、自治体から自治権を一時的に借り上げる事になっている。事実上の国土分割に等しい」

「国土を守る為に国土を企業に売るか。確かに知ればG I Oはこの国から追われるだろうな。矛盾してるところの話じゃないだろソレ」

「一部勢力の政府高官が調印した契約書と詳細な資料は全て手に入れた。政府は私の裏切りがあるとは思ってなかったからか契約を闇に葬りたくなったらしい」

「そりゃそうだろうな。今の官房長官は元々クリーンなイメージで売ってきた。企業経営手腕を大物から買われた起業家からの転身組みだ。こんな大スキャンダル喰らったら速攻アウトだろ」

「どうして解った？」

「そこの雇い主が激怒してる奴の話をしてたからな」

「そろそろ出るよ。久重」

「解った」

今まで先頭を行っていたアズの声に久重が前に出る。

一分もしない内に道の先、鋼鉄製のドアが現れた。

「殿は僕が勤めるよ。ソラ嬢と田木さんは彼の後ろから離れないように」

「私がお嬢さんの前になろう」

田木がソラの前に出る。

「おじさん……」

「叱ってもらったからな。少しは格好を付けさせてくれ」

「出るぞ。オレが出て合図をしたら出てきてくれ」

ドアに手を掛けた久重の耳元で声が囁く。

「（ひさしげ。ひさしげの周りに【CNT Defender】張っておくから）」

（ソラか?!）

思わず後ろを振り返った久重の耳にまた声が飛び込んでくる。

「（こっちは私が守るから。気を付けて）」

【I T E N D】を使った何らかの通信手段なのだと気付いて、久重がジッとソラを見つめる。

「（私は大丈夫だよ。ひさしげ）」

ソラが微笑んだ。

その笑みに何も言えずに久重は頷く。

「恋人みたいに分かり合うのは僕達がない時だけにしてくれないかな？ 久重」

「まさか君達はそういう関係……近頃の若者は進んでいると聞いてはいたが、まさかロリコンだったとは。避妊と認知はしっかりとな」

「ひにん？」

ソラが何の事か分からず疑問符を頭に浮かべる。

「お前ら大人なんだから少し空気読め！！」

ツツコミを入れてから久重が扉を開け素早く駆け出していく。

光の差し込む扉の先で久重が周囲を警戒した。

確認を終えた久重が手を上げた瞬間。

バスツと音がして久重の周囲の床に硬い金属音が響く。

合図するのと撃たれたのは同時だった。

G I O警備部特務外部班。

その肩書きは場所によってはそれなりの価値を持つ。

表向きは現場担当者クラスの高い地位であり、裏向きには各国の諜報機関に蛇蝎の如く嫌われる地位である。

一国の諜報機関よりも相当に高い給料。

各種の保険や危険手当。

更には様々な融通をG I Oの他セクションに利かせる事も出来る。

そんな場所に生きている彼らの基礎能力は正規の諜報機関を超えるものだと言われている。

兵隊としても諜報員としても優秀な者達の集まり。

ある者は米軍からの離脱者であり。

ある者はC I Aからの離脱者であり。

ある者はモサドからの離脱者であり。

ある者はM I 6からの離脱者であり。

各国の組織からあぶれてしまった能力だけは無駄に高いアウトローをこった煮にしたような部署なのだ。

故に彼らは己を正しく評価し、自負もなく淡々と仕事をする。

出来て当たり前。

やれて当然。

それが彼らの身上であり、無能なものはいない。

「目標1を確認」

「風が東南から三メートル」

「了解」

スポッターからの適切な情報を元に僅かにライフルの銃口を調整した男が淡々と引き金を引いた。

「命中。いや、待て。足元に弾丸有り。当たっていないぞ」

「何だ・・・何か目標の周りに薄くて黒いものが見える。そちらで確認できるか？」

「確認した。何かしらの防弾装置だと思われる」

「このライフルの銃弾を受け止めるだと・・・？」

「周囲の部隊に通達する。『ブラボー。目標に対して至近距離の銃撃を敢行せよ。尚、目標は徒手空拳であるが何らかの防弾装置を使用している可能性有り。銃撃で倒しきれないと判断した時は接近戦に持ち込め』」

『了解』

テナント募集中の窓から見える倉庫一階の駐車場。

敷地内立ち入り禁止の札を振り切ってマスクを被った男達が潜んでいた場所からと飛び出した。

サイレンサー付きの拳銃が幾度も火を噴く。

集中砲火で釘付けになった男の周囲にバラバラと弾丸が落ちていく不思議を目の前にしても男達は動じずにナイフを取り出して襲い掛かっていく。

「『目標1に続き目標2、目標3、目標4を地下通路側から挟撃』・

・・・これで今日の仕事は終われそうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい？」

スポッターが横の相棒を振り向いた瞬間だった。

頭のあった場所から熱く間欠泉のように紅い温かな液体が噴出し、顔を染めた。

「へ？」

それが男の最後の呟き。

一秒後、男の頭部は綺麗に宙を舞った。

最後に男が見たのは遠い場所で部隊が目標1に叩き伏せられていく光景だった。

「ああ、ターポリン先輩。後はこちらに任せておいください。ええ、今確認しました。それにしても彼強いですね。素手なのに特殊部隊上がりがポンポン投げられますよ。ええ、ええ、それでは療養頑張ってください。では」

声の主がボールでも投げるような動作でソレを投げる。

紅い血飛沫を振りまきながら、ソレは狙い変わらず部隊を全て叩き伏せ終えた男へと突き進み【CNT Defender】に止められた。

「卑怯臭い装備だよなあアレ。幾らカーボンナノチューブ繊維を保存しておいて組み上げてるだけと言っても戦車砲とか自走砲レベルじゃないとどうしようもないとか。チート過ぎ」

声の主がスマホの電源を落とし、握り潰す。

降ってきたソレにうろたえた男の後ろ。

扉から出てくる人間の中に顔見知りを見つけて、声の主はその場から空へと飛び出した。

「ソラ・・・今、行くよ・・・【ITEND】 Multiplication Rate10. Increase Level 7. Assist!!!!」

声の主が瞬時に久重の至近に到達した。

久重が気付いた時には黒いカーテンは引き裂かれていた。

「こんにちわ。そして、さようなら。見知らぬ君」

「!？」

そして、呆気なく、久重の片腕が宙に舞う。

「ひさ・・・しげ？」

続く少女の絶叫が戦いの幕が上がった事をその場の誰にも告げていた。

第七話 その腕に掴むもの

第七話 その腕に掴むもの

「戒十さ〜〜ん（涙）」
警察署の一角で任意の事情聴取を終えた了子は涙目で佐武に泣き付いていた。

「ええい！？ 鬱陶しい！！」

羽田了子的に言うとは佐武戒十は厳しい父親や歳の離れた兄のような存在と言えるかえもしれない。

「お前少しは反省しろ！？」

了子の取材手帳を没収した佐武が泣き付いてくる了子を振り払いつつ自分のデスクへと収まった。

寝ていない目元には黒いクマが浮いている。

「これ一つで拘留を免除してやってる俺の身にもなってみろ。本庁の連中が引き下がったのは以外だったが、本当なら取調べでずっとは留置場だぞ」

「だって、テロリストなんてネタが！！ ネタが悪いんですよ〜〜〜！！！」

「ああ、お前のその頭の出来だけは褒めてやりたいよ……………」

「え、本当ですか！？」

「少しも堪えてねえ……………」

げんなりした顔でデスクの上に手帳を広げた佐武がページを捲ろうとした。

「きゃ☆えっち♪ 佐武さんがそんなセクハラする人だとは思いませんでした」

署員達が一斉に佐武のデスクを振り向く。

「お・ま・え・はあああああああ！！！！」

ついにキレた佐武に首根っこを掴まれた良子は署の玄関から摘み出

された。

「一週間出入り禁止だ！！　コピーを取り終わったら郵送してやる！！」

肩を怒らせて署の中に戻っていく佐武を見送って、了子は懲りる事なく事件に付いての思考を巡らせていた。

「とりあえず駅に行かなきゃ」

車も押収された為、徒歩で駅へと向かう。

道すがら了子は昨日得た情報を脳裏で整理していく。

人身売買が関わったビル火災と現場で確保された青年外字久重。

留守の外字宅で出会った親友と称する青年永橋風御。

海外からのテロリストを緊急で包囲した警察。

封鎖された地域で起こった不可解な異常気象。

地下道の闇から突如として出現した死に掛けの全裸男。

地下道の微かな光に見た外字久重。

親友と言っていた風御の話を総合した場合の外字の性格と何でも屋という職業。

（外字久重はテロリストと何らかの因果関係にあった。それは外字の何でも屋という職業に通じている？）

憶測は了子が最も嫌うものだ。

しかし、事実を元にした推測ならば出来る。

了子の中での外字久重は大学院という博識者達が集まる場所へ所属するインテリであり、同時に親友に言われる程のお人よしで、その性格故に何でも屋等という怪しい職業に就いている変わり者というものだ。

それが事実かどうかはともかく、情報を総合すると難儀な性格と仕事をしている貧乏インテリという事になる。

「事実は小説より奇なり・・・か」

駅の改札を潜ろうとして了子は電光掲示板に映る電車時刻が遅れている事に気付く。

『え〜〜〜現在、復旧作業により一部区間に五分から十分の遅れが

出てい——』

（昨日の事件のせい？）

駅員に詳しい事情を訊き、了子はホームで電車を待つ。

（テロリストには結局逃げられたって戒十さんは言ってた。設備の不具合が起きたのは昨日の騒ぎの後。なら、テロリストは駅の設備の故障と何らかの関係があってもおかしくない。逃走に地下鉄の線路が使われたなんて漫画か映画の見すぎかもしれないけど……・）

了子が歯噛みする。

情報が圧倒的に足りなかった。

詳細な情報は手帳に書かれてある。

事実関係を整理するのにはやはり手帳を眺めるのが一番だと思っている了子にとって、手帳の没収は痛いペナルティーだった。

（でも、戒十さんには感謝しなきゃ。テロリストに間違われて射殺されるところだったみたいだしね）

心臓の止まった全裸の男を抱きかかえながら無数の光源に照らされて歩く。

そんな非常識な体験から現実的な感覚が麻痺していた了子だったが、今更に自分が実は死の淵に立っていたのかもしれないと内心で震えた。

（とりあえず調べなきゃならない事は四つ。外字久重の昨日午後十時から事件終結午前二時までのアリバイ。全裸男の身元と現在の安置所。外字久重が行っている何でも屋の実態。それからあの声の主について）

了子が今も耳に残る声を脳裏で反芻する。

綺麗な鈴を鳴らしたような声。

たった一言の声を自分の知識を動因して分析する。

（一瞬だからかもしれないけど訛りは殆ど感じ取れなかった。でも、発音に若干の拙さがあった。女の子としてもまだ中学かそれ以下くらい？　だとしても、あの状況で凜とした声が出せるならメンタル

面が強いはず)

ようやく来た快速に乗車して満員とは程遠い座席に座り揺られる。

(まずは情報。全部それからね。連絡取ってみよう)

端末は没収されていたが財布とその中のカードは無事だった。

未だに滅んでいない公衆電話のある駅に降り立った了子はさっそく

テレホンカード(死語)を差し込む。

馴染みの情報屋が出るまでの数秒。

了子は何か言い知れぬ不安が己の内に蟠っている事を自覚して・・・

・・・気合を入れ直した。

警察に渡さなかった頭の中のネタを頼りに良子は行動を開始する。

佐武が溜息を吐きながらデスクに戻ってくるとデスク前に数人の男達が待っていた。

「これは宮田さん。こんな所にどうしてまた？」

内心、苦虫を噛み潰しながらも、佐武は嫌な顔一つせず、男に挨拶する。

「いえ、捜査本部を立ち上げたはいんですが、あなたがまだ重要参考人から取り上げた証拠をこちらに提出していないというので。

こうしてわざわざ出向いてきたわけです。佐武警部補」

嫌味な顔一つせずにこやかに嫌味を言ったのは男達の統率者だった。

『宮田坂敏』(みやた・さかとし)五十二歳。

本庁からテロリスト捜査本部を任された実質的なリーダー。

幹部クラスのエリートだった。

警察官僚の見本のような男でもある。

その情報に脳裏で毒づきながら佐武がデスクをチラリと見た。

「コレ、有効に使わせて頂きます」

宮田がスーツから手帳を取り出す。

(この優眼鏡が・・・)

佐武が長身で細い宮田の容姿にそんな綽名を付けて一日。

その鼻に付く態度に佐武は苛立ちながらも顔には出さない。

「どうぞどうぞ。こちらでも早く提出しに行こうと思ってたところだったのだ」

「そうですか？ では、遠慮なく」

クソ高いテラー製のスーツを颯爽と翻し部下を連れて巢へと戻っていく背中に佐武が小さく舌打ちした。

（全部取り上げていきやがる。捜査本部はどうなってんだ）

テロリストを確認したから包囲せよと本庁からやってきた宮田は佐武にとっていきなり家に入ってきた強盗もいいところだった。

混乱する現場を仕切り、訳も解らぬまま働かせられて、その上情報の一つも寄越さない。

何が起きているのか。

何一つとして署の人間は知らされていなかった。

ただ、捜査本部の要請に出来る限り協力するようにとの通達があった以外は他に何も無く。

テロリストの逃走という非常事態にも関わらず、マスコミは協定で黙らせて、捜査は粛々と水面下で進行している。

「こりゃ、そろそろ槍か電でも降ってくるか」

ボソリと愚痴った佐武がデスクに戻ろうとすると、佐武の背中に声が掛かる。

「佐武さん。ちょっと」

同僚の一人がこっそりと呼ぶ声に佐武は去っていく宮田に気付かれぬよう静かに近寄った。

「何だ？」

「さっき通報があったんだ。何か銃声がしたと」

「何？」

「あの連中、本当は通報の内容を確認しに来たんだよ」

「どういう事だ？」

「テロリスト警戒してる時に銃声がしたなんて通報があったら報告しないわけには行かないだろう？ それで上に報告を上げたら、今から本部で人員を派遣して真偽を確かめるから余計な事をしないよ

うになんて釘を刺された」

「ついでに俺のデスクで手帳を見つけたと」

「そういう事。ちなみに通報があったのは東のシャッター街近くにある住宅地だ」

「住宅地っておい！？ 連中、真偽の確認なんてしてる場合か！？」

「こっちもそう言ったが聞く耳無しだった。連中の言い分だと真偽が解るまでは関わるなだと」

「殆どが売り物件とはいえ、あそこらにはまだそれなりに人が住んでるはずだぞ！？」

「テロリストはもうこの都市から逃げ出してるってのが公式見解なんだとよ」

「クソがッ、何が公式見解だ！！」

壁に思い切り拳を打ち付けて、佐武が拳を振るわせた。

「ほら」

「？」

「こんな事もあるうかとコピーしておいた。時間が無かったから重要そうな部分だけだが」

同僚が数枚のコピーを佐武に渡す。

「・・・・・・解ってんじゃねえか。行ってくる」

佐武が同僚と拳を合わせ、その場を早足で後にする。

その背中を見ていた他の同僚達が同時に顔を見合わせる。

「さてと。全員解ってると思うが準備だけはしておけ。戒十さんが『お前ら早く来い』なんて言ってくるかもしれない」

頷いた誰もが仕事をこなしながら、その同僚の言葉に頷いた。

それから一時間後、準備は無駄にならず、数人の捜査員が事件現場へと応援に向かった。事件現場へ最後に駆けつけたのがテロリスト捜査本部だったという皮肉は署員達の溜飲を大きく下げる事となった。

咄嗟に脇を締めた久重は後方に跳んでいた。

叫びが響く。

それも束の間、瞬間的な大量失血が久重の意識を明滅させ奪った。倒れこむ久重を田木が咄嗟に支えた。

追撃を掛けようとした者の前に黒い嵐のような霧が吹きつけ、背後へと後退を余儀なくさせる。

「いきなりイートモードとか酷いなあ。それが久しぶりにあった友人に対する態度。ソラ」

軽い調子で笑ったのはやや猫背の少年だった。

水色のパーカーに半ズボン。

外見上目立ったものはない。

十二歳かそこの少年がふわりと着地する。

「メリッサ……」

激情に駆られながらもソラはそのまま久重と田木の前に不動となつて己を盾とし、その少年の名前を呼んだ。

睨み付ける視線の苛烈さに少年が辟易したように肩を竦める。

「そんな怒らなくても。君の未練を断ち切ってあげようって言う友人としての善意なのに」

「どうして此処にいるの？」

ソラが横目で駐車場の横に転がっている人間の一部を確認し、齒を噛み締めた。

「愚問だよ。ターポリン先輩が上と掛け合ったおかげで君にもまだ生き残る芽があるって事を伝えに来た」

「ターポリンが!？」

「ああ、蘇生が間に合って助かったんだ。新しいNDを運んだの僕だから感謝してくれたよ?」

まるで天気の話でもするように少年が笑う。

「……今すぐ帰って」

「今の君に僕が退けられるとは思えないけど」

「帰らないなら死ぬ事になるわ」

「おお、怖い怖い。でも、死ぬのは僕より彼の方が先じゃないかな

あ

「絶対に死なせたりしない」

「咄嗟にNDで血管の縫合と傷口からの出血を抑えたのは凄いけど、僕と戦いながら維持出来る？」

「あなたを倒せばいい」

「言っておくけど連中はもうオリジナルロットの解析を始めてる。オリジナルそのものは使えなくても、その解析情報は十分に活用されてる。言ってる意味解るよね？」

黒い霧に周囲を覆われつつありながらもメリッサと呼ばれた少年は動じない。

「どんなに情報を解析しても【Dシリーズ】以上のものは造れない。である以上、あなたが勝てる要素は無い」

「嘘吐かなくてもいいのに。確かに君の【D1】の能力は最高だ。でも、それはあくまでオリジナルロットの超近似レプリカの増殖能力と博士の制御OSを搭載してるからに過ぎない」

「何が言いたいの？」

「つまり、劣化版だって目的特化で運用すれば」
ソラが硬直する。

『君の戦闘能力は超えられる』

耳元で声が囁き、ソラは脇腹からの衝撃に一階駐車場から屋のように吹き飛んだ。

「ターポリン先輩みたいに」

周囲のコンクリート壁にぶち当たって土煙が上がる。

「最高の性能じゃなくても一芸特化で君の防御は抜けられる。ちなみに展開速度が遅過ぎるよ。ソラ」

「それが……どうかした？」

ガラガラとコンクリ片の中からソラが起き上がる。

「へえ……でも、その場所から彼を助けられる？」

死に掛けている久重に意識を向けようとして、メリッサの顔が変形し、体が吹き飛んだ。

「大人を舐め過ぎだ。クソガキ!!」

駆け寄ったソラが久重の横に立つ。

「田木さん。あんたはアズと一緒に逃げてくれ」

「何が何やら解らないが大丈夫なのか!？」

「腕は回収しておくよ。後で繋げたかったら早めに切り上げてくるように」

田木とアズが今まで閉じていた口を開く。

通常では考えられない事態にも平静を失わないのは裏を歩いてきた人間故だった。

「とりあえず、あいつが復活する前に此処から退避してくれ」

田木とアズが顔を見合わせ、頷き合った。

「死なせるな。まだ、私はお嬢さんに恩を返していない」

「解ってる」

「いつものとこで待ってる。久重」

アズがブラブラと久重の腕を持って走り出す。

二人の背中がコンクリート製の壁を越えていった。

「ふ……ふふ……まさか、死に掛けの一般人に殴られるとは思わなかった。これもNDの能力？」

ズルズルと駐車場を滑っていたメリッサがゆっくりと立ち上がる。その目に久重へ寄り添うソラの姿が映った。

「ソラ……君は間違ってる」

「博士は私に自由をくれた。久重が人の温かさを思い出させてくれた。私はもう戻らない」

「世界の全てを敵に回しても？」

ハッキリと頷くソラに今までの軽かった調子が嘘のようにメリッサが深く溜息を吐く。

ソラはその濁った瞳を真っ直ぐに見返した。

「僕にも勝てない君が？」

「もう解析は終わってる。あなたは【ITEND】で造った糸を周囲に張って、身体の動作を制御してるだけ。出力が小さくてもそれ

なら超人的な動きができる」

動きの速さを看破されたメリッサが嗤う。

「まあ、それが連中の限界でもある。でも、それだけじゃない」
横にあった駐車場の柱の一つにメリッサが裏拳を叩き込む。

柱がそのたった一動作で中央から吹き飛んだ。

「!？」

「元々の肉体強度と筋力があってこそ、僕のNDは威力を発揮する」
「まさか、『開発』で体を・・・？」

衝撃を受けたようにソラが目を見開く。

「君は僕が宛がわれただけの友達に過ぎないとも思ってたの？」

「それは・・・」

「おめでたいなあ。薬物にDNAドーピング。骨格強化手術にホルモン操作。君の友達は全員が君とは別系統の基礎改造の被検体だった。君も知ってるかと思ってたんだけど」

ソラの顔が何かに気付いて歪む。

「メリッサ。止めて・・・」

ソラの言葉にメリッサが愉快げに笑う。

「く、くく、止められないよ」

「博士はこんな事望んでなかった!」

「泣き言なんて聞きたくない。僕が聞きたいのは帰ってくるの一言だけだ」

「昔のあなたはあんな事しなかった! 人殺しなんて絶対したりしなかった!」

ソラは視界の端に転がっている誰とも知れぬ首の残骸に唇を噛む。

「裏の人間が何人死んだところで痛む良心なんて持ち合わせてない。何なら転がってる奴らも同じようにしてみようかなあ」

「止めて!？」 昔のあなたは空が飛びたいって・・・そういう・・・」

ソラが声にならず拳を握る。

「博士なら本当に翼か羽をくれたのかもしれない。でも、博士がも

ういない以上これが僕だよ。ソラ」

「メリッサ……」

泣きそうなソラに向けてメリッサが嗤い告げる。

「僕は【蜜蜂】（メリッサ）。世界平和を約束する人殺しだ……」

「そんなのツツ?!」

「ターポリン先輩から聞いたよ。君が『開発』されていない事」
「!?!」

「あの博士が、あの馬鹿みたいに子供っぽい無慈悲で哀れなマッドサイエンティストが、君に手を出してなかったなんて笑ったよ」
メリッサの瞳に憎悪が宿り、揺らめき始める。

「僕達はいつも博士に構ってもらってる君を羨んでた。でも、そんな君を時には哀れんでもいた。自分の意思や思考をどれだけ弄られているのかと、それに比べれば自分達は何て恵まれている事かと」

「—————」

「だが、君は今も綺麗なまま、あの『開発』で頭の中にちょっと機械を据え付けただけで済んだ。偶には死体袋に入れられて、薬品付けにされてみたらどうだい？」

もうやり取りを見ていられなくなった久重が震えるソラの前に出る。

「おい。ガキ」

「僕が話してるのはソラだ。半死人は黙っててくれないか？ 黙って此処を去るなら追いはしない」

「テメエはクソだ」

「言葉には気を付けた方が——」

「女の気を引きたいなら、少しはマシな顔で泣かせてみるツツ!!」

「——調子に乗らない方がいい。殺すのに一秒」

完全に会話を打ち切ると構える素振りすら見せず、メリッサが消える。

打撃音。

『要らない』

人間の視界では追いきれない速度を持った恐るべきメリッサの打撃が片腕を失った久重の腹へとめり込んでいた。

「死ね」

「お前がなッ」

打撃に吹き飛ばされる刹那。

「!？」

メリッサの鉄筋コンクリートの柱を打ち砕く一撃を受けた久重が残った腕の肘と方膝で伸び切ったメリッサの手首を捉えていた。

メリキリと何かが割れる音と共にメリッサが久重の前から消える。

『ッ』

再び姿を現したのは久重達から数メートル前方だった。

吹き飛んでいく久重に対する追撃を掛けようと再度動作に移ろうとした直前。

「NO・00 “closed jail” ツッ!!」

駐車場全体の気温が一気に数十度下った。

「く!？」

一早く反応したソラの【ITEND】による周辺熱量吸収に出遅れ、メリッサの動きが鈍る。

（回避!？）

瞬時に判断を下し、駐車場から外へと転がり出たメリッサが今まで自分がいた場所に眩い光が現れるのを見た。

「Fire Bag」で友達を焼き殺そうとするなんて人の事を言えるの。ソラ」

「私はひさしげを守る。そう決めたのよ」

メリッサが久重の腹部に黒い液状の何かがベッタリと張り付いているのを見て瞳を細める。

（対衝撃防御？ NDを凝集させて、やっぱり基本性能が違い過ぎる・・・）

「最初から知ってたみたいに反撃かぁ。あなたソラが守ってなきゃ上半身と下半身が分かれてましたよ?」

「頭に血の上ったガキがどう攻めてくるかなんてお見通しだ。真正面から来る拳なら見えなくてもインパクトの瞬間にカウンターくらい取れる」

「漫画の読み過ぎって言われませんか？」

「ソラを信じてる。それだけで十分試すに値するだろう？」

軽口で返されてメリッサが閉口した。

「ひさしげ」

久重に駆け寄ったソラが残った片腕に自分の胸を押し付ける。

「ソラ?! な、何して!？」

「ひさしげが博士から貰った力があればNDは止められるわ」

「アレか!? だが、出し方とか解らな——」

ソラの額に微かな光の文字が連なり、久重の手に触れた胸から光が寄り集まっていく。

【I T E N D】Annihilation Mode。

Energy Source 【SE】。

Full Drive。

（これが先輩の言っていた【D1】の裏モード!? でも【SE】

の効果範囲圏外なら!!）

急激に周囲の温度が下っていくのを黙ってみているわけもなく。

メリッサが超高速でその場から離脱しようとした。

「——ッッッ?!」

久重が走り出す。

（体が動かない!? 何をされ!?!）

ハッとメリッサが気付く。

駐車場の中、一人でこちらを見つめているソラの額の文字が浮いていた。

Coupler Mord。

結合。

その意味にメリッサが思い当たる。

久重の腹部に集積されたNDへ大量接触していた事に。

「ソ、ソラアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！？」

他のNDを己のNDで抑制し、更には無理やりに結合するというデタラメさ。

NDの能力差が単純なミスを致命傷に変えていた。

もしも、拳ではなく手刀による切断だったならば、接触時間と面積故に起きなかったはずの隙だった。

(NDのパージが間に合わない！？)

駐車場周辺の光が急激に遮られていく。

「歯あ食い縛れッッ、ガキ!!!!」

ソラの額に紅い文字が浮かぶ。

NO.000“Exhaustion Crest”

接触の瞬間、久重の拳が白い籠手に覆われた。

『エグゾーション・クレスト』

「「!?!」」

拳に顔面を打ち抜かれた瞬間、メリッサはその声に驚愕する。

同様にソラも凍り付いた。

駐車場傍の民家の塀を突き破り、窓も樋も扉も何もかもを突き破って、メリッサの意識はそこで途切れた。

「博士？」

『二回目の発動おめでとう。これは言わば君達に与えた力の解説となる。遺言とは異なり事実のみを伝える為の音声だ。色々と疑問が尽きないだろうが、最後まで聞いてくれたまえ』

「博士……」

『見知らぬ君よ。君に与えられた力は私が生み出した【ITEND】を完全停止させる信号を直接ND使用者に打ち込む事で無力化するものだ。この能力は基本的にソラから【D1】の貸与という形で使う事ができる』

「ソラ。悪い……後は任せ……」

ドサリとその場で久重が崩れ落ちた。

「ひさしげ!!」

駆け寄ったソラが久重を抱えて歩き出す。

ソラが歯噛みした。

(どうすれば、このままじゃ!?)

『【D1】は正式な【Dシリーズ】の一号機。他のオリジナルロットの目的特化型とは違い汎用型だ。その能力は他ロットに先鋭的な部分でこそ劣るものの、総合的な値では最高の能力を有している』
NDによって現状を維持する事は出来るが、ソラに出来るのはそれだけだった。

基本的な治療がそもそも出来ない。

重大な症状が生じててもソラは根本的な治療など出来ない。

久重が先程まで動けたのは傷口の組織をNDで応急処置をしたからに過ぎないからだ。

それでも意志の力が強くなければ片腕が無い状態で立ち上がる事など不可能に違いなく、危険な状態であるのは今も変わっていないかった。

『今日も一人退けた君に感謝する。では、また次の機会に』

博士の声が途切れる。

久重を抱えたソラがジオネットに接続、周囲の地図を確認し、アズ達が逃げていった方角へと歩みを進める。

しかし、アズ達が見つからない。

人通りの多い方角へと向かっている事に気付いてソラの足が止まった。

出来れば公的な病院は避けたかった。

迷惑どころの話では無くなるかもしれないし、人死が出かねない。更にソラの内心を曇らせていたのは久重が危ない事に関わっていると誰かに知られる事だった。

久重の人間関係が裏のものばかりではない事は共に数日過ごしただけでソラには十分理解できていた。

ライオンのような大学の上司に健気な大和撫子。

きっと、他にも久重には大勢の友人がいて、そんな友人関係を壊すかもしれない噂や事実は他人の目から遠ざけておくべきものに違いない。

「ひさしげ。いつもの場所ってどこ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そっと聞いて、やはり目覚めない久重を前にソラが涙を堪えた。

（もし、本当に危なくなりそうだったら・・・・病院に行こう）

それでまた襲われるような事があれば、その時は自分の命を賭けて全てを守る。

それでいいとソラは己を納得させた。

ルルルルルル。

「!？」

ソラが久重のズボンの振動に気づき、それが朝朱憐に渡された端末だと気付いた。

「は、はい。こちらソ・・・・外字です」

慌てて取り出した端末に出て、ソラが久重の苗字に言い直す。

「朱憐ですわ。あなたはソラ・・・・さん？」

「あ、えと、ひ、ひさしげなら今少し出てるから、それで家に置いてあったコレ届けに行く最中なの」

「まあ、ひさしげ様ったら」

「い、今ちよつと立て込んでるから、ひさしげ見つけたら渡しておくから、その、ごめんなさい!!」

ブツリと通話を切って、ソラが道を急いだ。

再びの着信。

出ずにやり過ぎそうとしたソラが先の番号とは違う着信である事に気付いた。

「は、はい。外字」

「ソラ嬢？ ひさしげの様態は」

「あ、アズー!!」

「無理してたからそろそろ倒れてる頃じゃない？」

「い、今、ひさしげ倒れちゃって、それで!!!」

「状況は解ってる。今、そっちに向かつてるから端末の電源はそのまゝ。すぐ先の左側の路地で」

「はい！」

「それと僕をアズと呼び捨てにする場合はそれなりの覚悟をして
おいて欲しい」

「ア、アズさん？」

「ふ、ふふ、別にアズでいいよ。からかっただけさ。敬語も不要だ。君にはそれだけの資格がある。ソラ・スクリプトウーラ嬢」

こほんとアズの声が仕切り直しを告げる。

「これから医者のところに向かう。腕の保存状態は良好だから繋げるのに問題は無いだろう。君にも協力してもらおうよ。君の持つてるNDがあれば神経系の接続や骨の接合も十分に出来るだろうし」

「ツ」

ソラの手がギクリと強張る。

「とりあえず難しい話は全部後だ。今は久重の事を最優先に」

「う、うん」

やがて、ソラの待つ路地にクーペが走り込んできた。

アズと田木、ソラの三人は久重を連れてその場を後にした。

曇天の空に僅かな光の兆しが現れ、少しずつ晴れ上がっていった。

[illegible]

意識を取り戻したメリッサが動こうと手を持ち上げようとして、その手が内側から弾け飛んだ。

「――――僕もこれで終わるかあ」

穩やかに己の死期を受け入れ、メリッサは先に行ってしまった友人の姿を思い浮かべる。

（呆気ないなあ。でも、これで・・・・・・）

メリッサの肉体のあちこちで内側からの圧力に耐え切れず破裂が起き、血飛沫が上がる。

膨大な量の筋肉がメリッサの肉体を内側から圧壊させつつあった。無数の改造を受けた肉体の筋肉はその骨格や内臓を己の圧力だけで壊す程に肥大化していく。

メリッサのNDはそれを押さえ込み、それを精密制御する為のものだった。

ガシャンと音がして、瓦礫に埋もれていたメリッサの前に手が差し出される。

その手の上には黒い玉のようなNDの塊があった。

『随分と手加減したようで』

玉から発せられる声にメリッサが笑う。

「ああ、ターポリン先輩」

『そのまま死ぬつもりですか？』

「それもいいかなあって思いますけど」

『任務の完了は報告を持って行われるものだと教えたはずですが？』

「【D1】は能力の封印を解かれている。これは間違いないかと。」

でも、リミッターが掛かっているって先輩の推測は当たりです」

『根拠は？』

「ソラは未だにあのND無効化以外に二種類しかプログラムを使用していない。たぶん、使わないのではなく使えないからと考えるのが妥当でしょう」

『では、あなたには引き続き、情報収集の任を受け持って貰います』
「殺さなくてもいいんですか？」

『上には博士が独自にリミッターを設けている為、過去の力は余程の事が無い限り復活しないと言い添えておきました』

「瀕死の重傷でも負わせなければ？」

『ええ、しばらくは様子見をしながら、時折人員を当てて力を見る。それでも安定していれば安全に【D1】を回収する方法を探るという事で落ち着きました』

「・・・・・・・・この善人」

ボソッとメリッサが呟く。

『善人は人殺しをしたりしないでしよう。ましてや過去の仲間を本気で殺そうとも』

「【D1】が起こした悲劇だけは避けなければならぬと上を煽っていたのは先輩ですよ？」

『だからこそ、殺す以外の方法を模索するのも手の一つとしては切り捨てられないものとなる』

「了解しました。先輩」

メリッサが残った腕で黒い玉を掴み取り、

「――」

口に運んだ。

警察が駆けつけた時に見つけたのは凍りついた駐車場と瓦礫と化した売り家。

それから駐車場の地下に続く崩落した通路だけだった。

第八話 長椅子に寝子

第八話 長椅子に寝子

【黒い隕石】（ブラックメテオ）。

その当時、世界を滅ぼすとされた巨大隕石。

人類の科学技術では破壊不可能とされたソレが落ち、人類は滅びるはずだった。

しかし、人類は生存してしまった。

その矛盾に科学者達が挑んで結果を得るまでに十数年の時を要した。

「解った事はたった二つ」

教師のチョークが箇条書きで事実を羅列する。

「一つは【黒い隕石】が日本上空十五キロ地点で最後に観測された事」

学生達のやる気が底を尽いている為、その声に反応するものは一人もいなかった。

「一つは【黒い隕石】が日本上空で消失した事」

流れる汗を拭い教師が巨大な疑問符を描く。

「今現在も研究が続けられていますが【黒い隕石】の消失原因は未だに解っていません。そして、国連は【黒い隕石】事件当時の混乱時に出た被害がどれ程になるか未だに完全には把握してないと言われています。その当時、各国の混乱は凄まじいもので諸外国では暴動と治安悪化、紛争などが起こっていましたが、その殆どの記録が残っていません。これは警察の治安維持機能が完全に麻痺し、公務員やそれに順ずる人々、高額所得者などを狙った犯罪が莫大な数に上った為です。その当時の国が今は政府も無く無法地帯として放置されているところもあります。特に第三世界での混乱は各地で虐殺を誘発し、アフリカ大陸だけでも推定四千万人が死亡しました。滅んだ民族も多く、生き残った人々も民間からの支援でどうにか耐え

凌いでいるのが現状です。殆ど犯罪発生率が変わらず、大きな暴動や紛争が起こらず、他国からの侵略すら無かった日本は世界でも例外的な扱いと言っているでしょう。国連加盟国の半数以上が政府の機能不全に陥った後、全ての国にいち早く支援を行った日本が国連での指導力を発揮しているのは皆さんも周知の――」

布深朱憐にとって世界は謎に満ちている。
それは所謂世界が減びなかった理由とか今世紀最大の謎とか学校七不思議的なソレではない。

オカルトなど眼中にない。

あるのはいつの世も女と男の間に蟠る深く長い溝だ。

例えば、いきなり外字久重の前に現れた美少女とか。

朱憐の知らない間に家に泊まっているらしい美少女とか。

自分と同じ表情で外字久重を見る美少女とか。

朱憐にとって問題なのはソレだ。

どうしたらいいのかと混乱したままお昼を過ごし、混乱したまま体育を受け、混乱したまま渡したばかりの端末に電話してみる。

そして、何故か端末に出るのは朝方に紹介された少女で忘れ物として端末を届けに行くと一方的に告げられて通話が途絶えてしまう。

「・・・・・・・・・・うう」

パタリと朱憐の縦ロールがゆるふわカールのように萎びた。

「ひさしげ様・・・・・・・・」

昼休み。

年頃の女性が男性の部屋に寝泊りするという衝撃的な事実についてどう対応したらいいか朱憐は友達にアドバイスを受ける事にした。朱憐の友達の多くは快く相談を受け、顔を真っ赤にし、何やらヒソヒソと話し合った後、アドバイスをを行った。

曰く。

『家の方に調査を依頼してみても如何でしょう？』

『ここはその殿方が布深さんをどう思っているのか直接的に訊いてみては如何かしら？』

『それにしてもその殿方も殿方です！！ 布深さんがこんなにも心を痛めているというのに』

『布深さん。負けちゃダメですよ！！ 幾ら若い子が良いと殿方が言ってもきつと最後には戻ってきますから！！』

男女七歳にして同衾せず。

旧い話とは解っていてもそう教育されてきた朱憐にとって今朝の久重とのコミュニケーションは刺激的過ぎた。

友人達からのアドバイスを聞いても更に心が重くなった。

朱憐にとって久重に対する不安とは未だ強固な信頼関係を築けていない事を意味した。

お世話になった大学教授の娘さんが遊びに来ているというだけの話に衝撃を受けているのは久重と自分が未だ『そういう関係』とは程遠いからに他ならないと朱憐は自覚する。

恋は闘争。

奪われてしまえば帰って来ない。

友人達の話の総合して、朱憐にはそう聞こえた。

自分には誰かと争うなんて向いていないと思う。

(聖空さん・・・・・・・・・・)

しかし、諦められるものではない。

朱憐は自分がお嬢様であると自覚がある。

女性が運命という言葉に弱い生物であるとの知識もある。

それでも特別な人というものが家族以外にも存在するのだと朱憐は知った。

知ってしまった。

初めて久重と親しく話した日から胸に積み上がっていく感情と記憶を否定出来ない。

何かの本で読んだ知識では三年もすれば本能的な愛は醒めるとあった。

だが、胸に降り積もるものが三年で熱を失うとは朱憐には到底思えなかった。

『では、これでホームルームを終わります』

気付けば放課後。

朱憐は友人達に挨拶しながら学校を後にする。

傘を差して歩き、端末を見つめつつ、今一度電話するべきか悩む。

思い切り躊躇してから電話を掛けた。

『はい。お嬢様。何か御用でしょうか？』

(うう……わたくしの意気地なし……)

使用人への電話に変更してしまう自分の情けなさに肩を落としつつ用事を告げる。

「ひさしげ様のお家に寝具を一式配達しておいて頂戴」

『畏まりました。あの【小屋】に相応しいものを一式ご用意しておきます』

「お願い」

『帰りの車は如何しますか？』

「今日は歩いて帰りますわ」

『そうですか。では、湯女達を何人か見繕っておきますので』

「それと……」

言い掛けて止まり、己を恥じながらも朱憐は続ける。

「ひさしげ様のお家に女の子が一人泊まっていて……少し調べて欲しいの」

『畏まりました……』

「な、何か言いたそうですわね？」

『いえ、お嬢様も御家の力をそういう事に使われるようになったのかと。少し時間を感じてしまいました』

「よ、余計な事はいいですわ！？ と、とにかく家に帰るまでに調べておいてください！！」

『はッ、畏まりました。それでは』

通話を切った朱憐が溜息を喉の奥に吞み込んで空を見上げる。

「……ひさしげ様の馬鹿……」

己の嫉妬に微かに頬を染め、傘で顔を隠した朱憐は帰り道を急いだ。

「!？」

思い切り起き上がろうとして全身に激痛が奔り、久重は自分が黴臭い寝台に寝かされている事に気付いた。

視線だけで辺りを見回して、眠りこけている少女を見つめる。

「ソラ……」

「ようやく目覚めかい？」

頭上から掛かった声に驚きもせず、久重は内心の緊張が解けていくのを感じた。

「あれからどうなった？」

アズが久重の横の椅子に腰掛けた。

「ソラ嬢に担がれてクーペで回収。闇医者に見せてどうにかね」

「よく繋がったな」

片腕の感覚がある事に驚きつつ、久重はソラのおかげなのだろうと内心感謝で一杯になった。

眠りこけているソラの肩に掛けられたタオルケットが徹夜での看病を物語っていた。

「ソラ嬢に感謝するように。彼女のNDが無ければリハビリで元に戻るまで数年は掛かったかもしれない」

「……知ってたのか？」

「何も知らないよ。理解できるのはソラ嬢が使っている力の正体ぐらいいさ。それでも十分状況を想像するのは容易だけどね」

「なら、そういう事だ」

「あの域のNDなんて後三十年は出ないと思ってたんだけどなあ」

「そんなにソラのアレは進んでるのか？」

「凋落した大国を再び再興する程度には」

「そこまでの……」

「現在のNDは莫大なコスト問題を除けば夢の医療機器で工業機械で兵器だからね。その使い道は千差万別。特定部分の腫瘍を壊滅させるだとか、ナノレベルの精密作業でしか造れないものを容易く作

るとか、人体に致命的な損傷を与えるとか、色々と使い道がある。でも、転用分野が莫大な数に上ってもコストの問題で殆どの分野に導入できないってジレンマを抱えてる」

「コストに見合う利益が出ないわけか」

「そう。でも、もしそのコストを劇的に下げる事が出来たら・・・・。そういう意味でその子のNDに遣われている技術は数十兆ドル以上の価値がある」

「すー——」

久重が絶句する。

「SFチックな国と戦場が増えればそれくらいの価値は幾らでも湧くさ」

（いきなり話がでかくなったな）

久重がソラの寝顔を見る。

簡単に事情を説明されていたとはいえ、そこまでの大事と実感していなかった久重にとってアズの言葉は十分に自分の置かれている状況が悪いものなのだと感じさせた。

「アズ。シラードエンジンって知ってるか？」

アズが僅かに片眉を上げた。

「・・・久重。いつから人類の未来とか背負いたい人間になったんだい？」

「数十兆ドルに人類の未来とか。最後には宇宙でも救えばいいのか？」

アズが久重のぼやきに思い切り溜息を吐く。

「元々、NDは【マックスウェルの悪魔】を実験装置で実証した事から研究が飛躍的に進歩した。そして、その【マックスウェルの悪魔】を使って空想上の無限機関を想像したのがレイ・シラード。故に彼が考えたエンジンはシラードエンジンと呼ばれてる」

「そいつはどういう奴だったんだ？」

「現在の原子力研究の基礎を作り、確か原爆にも関わってたかな」
「物騒な奴だったのは理解した」

「とんでもない。彼は原子力の兵器的な運用には反対の立場だった。技術そのものには関わってたけど、その研究が無きゃ世界中の経済成長を支えた原子力エネルギー供給は不可能だったし、二十世紀中の飛躍的な工業発展も有り得なかったかもしれない。悪人と彼を謗る者もいるだろうけど、確実に人類の発展に貢献した一人だよ」

「ん・・・？」

薄らとソラの瞳が開き始める。

（話はここまでだ。とりあえず飯でも持ってきてくれ）

アズが仕方なさそうに頷いて古びた木製の扉から出て行った。

「ひさ・・・しげ・・・？」

「おはよう。ソラ」

「ひさしげ!？」

完全に目を覚ましたソラが慌てて立ち上がった。

「だ、大丈夫!？ ひさしげ!!」

「問題無い。今、アズに状態は聞いた」

「そ、そう」

ほっと肩を下ろしてソラがパイプ椅子にへたり込む。

「良かった・・・」

「心配掛けた。悪い」

「ううん。ひさしげが無事ならそれでいい」

微かに紅い目元に久重は何も言わなかった。

泣き腫らしたのだろう紅い目が全てを雄弁に語っていた。

「ありがとう。ソラ」

ソラが鼻を吸る。

「・・・うん」

突如、扉が開いた。

「「!？」」

「久重君。大丈夫——済まない。出直してくるとしよう」

二人の間に漂う空気を読んだ田木が一瞬で踵を返そうとして、慌てた二人に止められた。

酷く静かな画廊で白いスーツ姿の青年ターポリンが色鮮やかな絵画には目もくれず道を急いでいた。

その行く手には有名な絵画がズラリと並べられている。

ゴッホ。

ゴーギャン。

ルノワール。

無論、全てが贋作。

それでも照明に照らし出される絵画は人の目を楽しませるには十分かもしれない。

歩き続けるターポリンがようやく見えてきた道の先の扉に目を細める。

扉の前に立ち、ノックは二回。

どうぞ。

穏やか声にターポリンが無言で扉を開けて部屋へと入った。

内部には天井の照明、机とテーブルが一つずつ。

白い壁紙が照り返す光にターポリンは一瞬眩暈にも似た錯覚を覚えた。

革製の椅子に腰掛けているのはグレーのスーツを着た初老の白人。

ターポリンに視線を向けたその男が呆れたように口を開いた。

「せっかくの療養期間だ。少しは回廊で目を楽しませてきたらどうだね」

「すみません。生憎と芸術には疎いもので」

ターポリンの減らず口に肩を竦めて、男が机の上の封筒を手渡した。

「ご要望通り。ファイルは揃えてある」

「ありがとうございます」

ターポリンが受け取った封筒の蠟の印を確かめて脇に携える。

「それで今回は随分とやられたらしいが体の方は？」

「おかげさまで寿命が半年程縮みました」

「そうか。君の我々への忠誠には頭が下るな」

「それ程でも。死に損なって多少恨みこそしましたが、やるべき事が残っている事を思えば些細な話です。まだ、私の人生にはロスタイムが残っていた・・・この時間は幸運と言えるかもしれない」

「随分と前向きだ。ふむ」

男が机の引き出しから取り出したものをターポーリンの前に置いた。

「使ってみるといい。君にならば可能性が無いわけでもない」

ターポーリンが置かれたモノを見て体を強張らせる。

「オリジナルロットの解析は未だ順調に進んではいないと聞いていましたか？」

「これはオリジナルロットではない」

「まさか、超近似レプリカの？」

ターポーリンがマジマジとその机の上に置かれた白銀の玉を見つめる。

「いや、我々が持つ近似レプリカを十分の一注ぎ込んだ特注品だ」

「よくそんなものを造る許可が下りたのものです」

「増殖中に出た不良品を固めたものだ。工作精度は超近似レプリカと比較しても六十七パーセント以上。現在の我々に製造出来る物の中では最上位に近い性能を持っている」

「この死に掛けにコレを渡す理由は何です？」

「ただの餞別だ。死に往く君への」

「・・・・・・そういう事にしておきます」

ターポーリンが玉を掴んで、その場から立ち去ろうと背を向ける。

「また、会おう。今度は検死現場だろうか」

「そうなる事を願っています。では、これで」

ターポーリンが部屋を後にした。

しばらく、扉を見つめていた男が端末を取り出して電話を掛ける。

「ああ、私だ。今渡したよ。君の言う通りに」

電話越しの声が男に礼を言った。

「君は本当に容赦が無い。彼はあれでも我々の為に最も働いてくれ

た駒だ。少しは感謝するべき存在だと思うが」

電話越しに幾つかの言葉を聴いた男が瞳を伏せる。

「解っているさ。【SE】が消えた以上、彼にはまだやって貰わなければならぬ事が山ほどある」

男が眉間を揉み解した。

「だが、それでもだ。君だってまだ人間を止めたくはあるまい？」
相手が沈黙した事を肯定と受け止めて男は笑った。

「ではな。次の会議で会おう」

端末を床に落として男が思い切り踏み潰した。

「・・・・・・・・・・悪魔が笑っているか・・・・・・・・」

部屋の照明が落とされ、声は途切れた。

長い長い坂道を転がりながら消えていく石ころを見送って、了子は上がった息で上り続けていた。

街の端。

住宅地造成を急いだ都市計画の弊害は山間部近くのニュータウンを坂道の多い年寄りに優しくない世界へと変貌させている。

遠い昔、まだ都市がそれ程アスファルトに囲まれていなかった頃、山に近い場所では自然が溢れていた事を了子は未だに覚えている。しかし、その名残も見当たらない坂道を登るだけ記憶は薄れ曖昧さを帯びた。

（タレントのおっかけ連中も中々侮れないわよね。こういう事とか知ってたりするんだから）

了子が最前に行っている情報屋は元々タレントのおっかけを専門にしている。

情報機器の近代化や端末の手軽さ高性能化に伴い、情報を収集し発信するのはその筋専門の人間だけとは限らなくなっている。

人間が三人以上いる場所の情報なら大概は何処かの誰かが知っている。

了子が掴んだのは外字久重の居場所だった。

情報屋を名乗る素人も千人集まれば玄人と代わらない働きをする。
一見まったく関係なさそうな情報でも幾つも集まれば別の情報を浮き彫りにしてしまう事がある。

タレントの家の近くで起きた騒動の写真の画像や映像。

明らかに不審な車を思わず撮ってしまった一枚やネタとして提供される一枚が実は重要な情報を有している場合もある。

サーバーの大容量化と高性能化が進行した昨今、自分で取得したデータを全て特定のサーバーにUPしておく事はそう特異な事でもない。

クラウドコンピューティングの浸透によって、そういった特定の情報を端末で受け取るだけという人間も少なくないし、GPS位置を常時送信し、ジオネット上での利益を移動するだけで溜めていく輩も増えている。ログや保存されているゴミのような情報が本人さえも忘れてしまうような真実を教えてくれる事もある。

了子の掴んだ外字久重の情報もUPされたゴミ情報からピックアップされたものだった。

（ここから先の地域であのクーペが確認されていないなら、直前の目撃情報や位置情報から言って近辺で下ろされている可能性が高い）
了子が端末に画像を表示する。

それは一台のクーペだった。

不審車両として一般人に取られた一枚は確かに後部座席でグツタリとしている久重を捕らえていた。

問題はそれだけではない。

車を運転する如何にも胡散臭い笑みを浮かべる女や屈強そうな四十代前半くらいの男。

更には金色の髪で久重にしがみ付く様になっている少女。

（これが【あの子】なのだとしたら）

了子が脳裏でテロ事件の暗闇で聞いた声と少女を重ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

了子のジャーナリストとしての勘が言っていた。

大当たりだと。

（それにしても長過ぎだから、この坂）

下ろしたばかりのなけなしの万札でタクシーを拾って二時間。

最後にクーペが確認された場所まで辿り着いてから歩いて情報を収集している良子の脚はクタクタだった。

（これで・・・何も見つからなかったら・・・お笑い・・・よね・・・）

歯を食い縛って食い縛って坂の上に立った時、了子の視界が開ける。夕暮れの町並みが地平の彼方まで続き広がる景色。

「綺麗・・・」

思わず呟いて、背後からの影に気付き良子が振り返る。

「！」

それは教会だった。

密集する家に阻まれて見えなかった坂の上の聖堂。

フラフラと導かれるように良子の足がそのドアへと向く。

十数年前に造成されたばかりの場所だというのに木製の扉はまるで長年使われたかのような光沢を放っている。

「――」

無言で了子が扉を内側へと押し込んだ。

ギギギィィと軋んだ扉が内側に開く。

内部の薄暗い長椅子の列に夕暮れの日差しが当たっていた。

誰もいない内部へと入り込み、折れそうなヒールでコツコツ音を響かせながら、良子は不思議と疲れが和らいでいくのを感じていた。

「どなたか居ませんか？」

シンと静まり返った講堂の内側でパイプオルガンだけが夕暮れに輝いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらく休ませて貰おうと良子が長椅子にへたり込んだ。

ふうと一息吐いた了子が静寂に耳を澄ますと僅かに開かれたままの扉から風が吹き込んで来るのが解る。

頬を撫でた風の行き先が何処かと視線を彷徨わせた時だった。

壇上脇の入り口から、その少女が現れた。

「ふえ?!」

「————?!」

夕暮れに照らされた金色の髪。

響いた声が講堂に反響し、了子の耳に余韻を残した。

驚きに固まっている少女が何か行動を起こす前に了子が静かに声を発した。

「貴女は此処の方かしら?」

「あ、えと……少しお祈りをしてて……ちょっと探検……」

了子が内心の滾りを抑えた。

少女の言い訳が、少女の声が、少女の仕草が、了子に多くの事を教えていた。

外国人の少女は日本語が堪能だ。

その上でとても正直だ。

少女の視線が泳ぎ、壇上脇の入り口に一瞬だけ合わせたのは、その奥に少女の気になる事があるから。

今までの何もかもを神に感謝してもいいと良子が少しだけ唇の端にやけさせる。

「そうなんだ。奥に誰かいた?」

「え……う……」

困る少女の顔だけで了子には十分だった。

「それじゃあ、私も少し探検しちやおうかな」

優しく言って、了子が立ち上がる。

それに敏感に反応した少女はまるで怯えた猫のようだった。

「ねえ。貴女の名前は何て言うの?」

「な、名前……?」

「ええ」

「聖……ひじり・そら……聖空……」

「ひじり・・・そら・・・さん？」

ゆっくりと歩み寄っていく了子を前にして車を目前とした猫の如く硬直したソラが瞳に困惑の色を示す。

「そう。良い名前ね」

了子がもう一步でソラの横に立とうという時。

「すみません。そろそろ此処は閉めますが何方かいらっしゃいますか？」

了子が振り返る。

扉の外から入ってくるのは修道服を着た老齡の女性だった。

「あら？ これは可愛い娘さんが二人も。こんにちは。いえ、こんばんわ・・・かしら？」

「此処の方ですか？」

了子の問いに女性が柔和な笑みで頷く。

「はい。ここの管理を任されている藤啼ふじなきと言います」

「藤啼さん？」

「今日はこれから友人が来る事になって少し早く閉めに来たんです」悪戯っぽくウィンクするお茶目さに了子が「そうなんですか。残念です」と肩を落とすフリをする。

「ちよっと坂を上ったところにこんな場所があって驚いて。それで入ったんですけど、此処は平日には？」

「はい。祝日以外は毎日朝八時から午後六時三十分まで」

「なら、出直してくる事にします」

「礼拝にはパイプオルガンの演奏もあります。どうかお気軽に来て下さい。いつでもお待ちしておりますよ」

笑みに「はい」と頷いて了子が扉の方へと歩いていく。

「ところで貴女はこの方のお知り合い？」

了子を見て言う藤啼にブンブンとソラが首を振る。

「そうですか。では、もう遅いですから保護者の方に連絡を入れて向かえに来て貰いましょうか。それまでは此処で過ごされて結構ですから」

了子が扉の外に出ると藤啼がそっと一礼する。

「では、またの機会にお越しを・・・ふふ・・・」

パタンと閉められた扉に鍵が掛けられる。

あっという間の出来事にソラは何も言えずにいた。

ソラへと振り返った藤啼がそっと片目でウィンクして人差し指を唇に当てる。

「！」

ソラが驚くと藤啼がチョイチョイと壇上脇を指差す。

そこにアズの姿を認めてソラは全て理解し、ドツと疲れた顔でその場にへたり込んだ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

閉まった扉の先でどんな会話が行われているのか。

耳を済ませていた了子は暗くなり始めた辺りを見回して、車の一台も止まっていない事を確認し、その場を後にする事にした。

坂道を降りる途中何度か立ち止まり見上げた教会もやがて見えなくなる。

（聖空。外字久重の秘密に繋がる鍵。あの子は一体何を知っているの？）

もう見えない教会の方角を振り向いた了子の瞳には少女の姿が今もハッキリと焼き付いていた。

（間違いない）

テロリストの包囲事件現場で聞いた声は少女のもの。

了子は確信を深め帰路に着いた。

「紹介するよ。此処のオーナー兼管理者。藤啼三郷。ふじなき・みさと 僕の友人の人だ」

横になっている久重の部屋に田木とアズ、ソラ、藤啼が集まっていた。

紹介された三人が一斉に藤啼を見る。

柔和な顔で藤啼が久重の傍まで来ると余った椅子に座った。

「ふふ・・・アズに誰かを紹介されるなんて歳を取ったものね」

「君に言われたくないよ」

アズがやれやれとその藤啼の言い分に肩を竦める。

「このトランクルームを預かる藤啼です。よろしく」

「トランクルーム？」

「都合の悪いものを放り込んでおく場所だ」

ソラが首を傾げると久重が説明する。

「主に武器や書類。それ以上にヤバイものを置いておく事もある」

「君もその仲間入りだよ。久重」

「此処に匿おうってのか？」

「いや、此処はあくまで仮置き場さ。君にはいつもの場所に戻ってもらおう。君がいきなり消えたらお姫様が悲しむだろうしね」

「お姫様って・・・朱憐の事？」

ソラにアズが頷く。

「襲ってきた連中、ソラ嬢の追手、どちらも公権力を公には無視出来ないと見た。あそこはああ見えて地理的にはかなり恵まれてる。複数、財閥を仕切る家が近隣にあるせいで近くで事件なんか起こった日には周辺の監視が厳しくなるし、色々と探られる。更にはお姫様の家が近いから裏社会の連中は大手を振って手が出せない」

「・・・ひさしげって」

ソラのジツトリとした視線を受けて、久重が何も知らなかったと慌てて首を振る。

「お姫様とあんな仲になるとは思ってなかったけど。君は知らない内に守られてるよ。久重」

「全然知らなかった・・・」

「教えてなかったからね」

「教えるよ!？」

「君が恩を恋と錯覚しないか僕は心配だったのさ♪」
グツタリとした顔で久重が寝台に身を沈めた。

「あーごほん。何か本題から逸れているような気が・・・」

田木から指摘されてアズが話を戻す。

「とにかく、久重。君は戻れ。あそこなら連中もおいそれと攻撃はしてこない。大物政治家やG I Oだって今回の部隊壊滅で少しは慎重になる。あっち側のアプローチはこっちで何とかするから、君はいつも通りの生活に戻るように」

「腕の治療はどうする？」

久重の問いにアズがソラを見る。

「ひさしげの家の付近には病院が無い。治療は任せても大丈夫かい？」

「うん。ひさしげの傷は絶対に私が直す」

「という事で決まり・・・かな？」

「まだ、決まってるないだろ。田木さんはこれからどうするんだ？」
久重に田木が首を振る。

「いや、僕の事は気にしないでもらいたい。君達に助けてもらっただけで十分だ」

安心させるような笑顔にソラが顔を曇らせる。

「田木さん。貴方にはしばらく此処で暮らしてもらいたい」

「此処で？」

アズが今まで口を挟まなかった藤啼を見る。

「どうぞご自由に。このルームの借用人は貴女ですもの。アズ」

「という事でしばらくの間は此処で暮らして欲しい。今後の事は状況が落ち着いてからになると思う。連中の出方が強硬なものなら国外への退避を前提に計画を練る事になるよ」

「すまない。君達には本当に迷惑を掛ける」

頭を下げる田木の肩にアズが手を置いた。

「はいはい。お話が決まったならお食事にしましょう。アズ、ほら手伝って頂戴」

「・・・君は僕に家事とかさせる気かい？」

アズのげんなりした顔に藤啼が笑う。

「家事が出来る女が男から好かれるのは理解の範疇でしょう？」

「・・・了解」

「わ、私も」

「あら、手伝ってくれるの？」

ソラが大きく頷く。

「お嬢さんよりもやる気の無い誰かさんとは大違いね」

「勘弁してくれ・・・」

アズのやり込められる様に久重は珍しいものを見たように驚きながら、内側から滲み出す笑いを堪える事が出来なかった。

「僕がやり込められてるのがそんなにかしいかい？」

「意地悪な魔女が聖女に諭されてるなら尚更な」

「さ、それじゃあ、消化に良いものを何か適当に見繕いましょう」

藤啼が締めくくって出て行くとそれにソラとアズが続く。

「・・・」

残された男性陣二人が顔を見合わせる。

「君は随分と愛されているようだ。久重君」

しばしの沈黙の後。

「・・・はい」

答える久重の声は優しかった。

第九話 ラブコメさん（前書き）

活動報告内で設定に私用している技術に付いての説明などがあります。どうぞご利用ください。活動報告四号は現在進行形での研究がなされている「情報熱機関」に付いて。

第九話 ラブコメさん

第九話 ラブコメさん

カーテン越しに黄金の埃が舞う。

密やかにカーテンから漏れる日が新たな世界を運んでくる。

ハローワールド。

そう朝の挨拶する男を思い出して少女は上を見上げる。

視線はいつか天上へ届くのだろうかと停滞している思考で思う。

「博士・・・・・・・・」

その男は言っていた。

朝とは夜を越えた者だけが持ち得る特権だと。

朝とは死んだ世界が甦る儀式なのだと。

闇に消えた全てが照らし出された時にこそ真実は目前に現れる。

そこにはきつと楽しい事だけではなく、哀しくて辛い事も待っている。

それでも前に進み続けるしかないから、人は朝に希望を見る。

今日は死ぬには良い日だと笑って居を後にすら出来る。

「・・・・・・・・」

男は最後の朝に言っていた。

朝日が昇り続ける限り、希望が消える事はない。

夜の帳が降り続ける限り、絶望が終わる事はない。

だが、どちらに目を向けるかは自分で決められる。

闇に閉ざされた空がいつかは照らし出されるかもしれないと見上げるかどうか。

たった、それだけの選択が、人と世界を生まれ変わらせる。

「・・・・・・・・」

熱いモノが瞳の端から一筋零れ落ちて、少女は横を見た。

小さな寝息を立てて眠る青年が一人。

ゆっくりと起き上がる。

薄ぼんやりした意識のまま少女は身を起こし、隣の青年の顔を覗き込む。

いつも人の事ばかり考えていそうなお人よし。

その顔に片手で触れる。

「Hello World・・・」

髪を掻き上げて、少女はそつと唇を触れ合わせた。

ガチャリと扉が開く。

「え—————」

少女はゆっくりと振り向いて、声の主が知っている人間だと認識した。

「・・・・・・・・・・・・？」

己が今何をしていたのか、少女は再確認する。

「・・・・・・・・・・・・！？」

「ソラ・・・さん？」

その日、朝から外字家には恋の旋風が巻き起こりつつあった。

『今日は一日夏日となる事でしょう』

朝の食卓。

肩を包帯に巻かれて身動きが不自由な久重は顔を微かに引き攣らせて目の前で繰り広げられる光景を見つめていた。

『いやあ~~~~今日の特番ドラマ愛してるよ貴女マイハニーは楽しみですねえ~~~~』

部屋の隅にあるラジオから流れる番組など久重の頭には欠片も入ってきていなかった。

『では、今日の運勢です』

ジツと見詰め合う二人の少女がちやぶ台の左右に展開し、黙々と食事を平らげている。

片や六本の縦ロールを従える押しかけ富豪少女。
布深朱憐。

片や金色の髪を靡かせ颯爽とNDを操る不思議少女。

ソラ・スクリプトウーラ。

どちらにしても戦いの趨勢は未だ定まっていはいない。

『おひつじ座の貴方。今日の運勢は最悪。もしかしたら浮気現場を彼女に見られちゃうかも!』

ラジオから垂れ流される番組を真剣に聞くフリをしながら久重は思わずにはいられなかった。

(朝から何でこんな空気!？ いや、それ以前にどうしてこうなった!?)

朝、起きた瞬間から何故か背筋を震わせた久重が見たのは二人が互いに無表情で見つめ合っているところだった。

目が笑っていない、どころの話ではなかった。

乙女達の瞳が澄み過ぎた水のように自分の顔を映した時、久重の背筋には何か言い知れぬ冷や汗が伝った。

清過ぎる水には何も棲めない。

正に聖人君子ならば泰然とその視線を受け止められたのだろうが、何かと後ろ暗い仕事をしている久重にはその瞳が己の真実を移す鏡のようでかなり近寄り難かった。

「ひさしげ様」

「は、はい？ な、何だ？」

オドオドしながら朱憐に振り向いた久重が作り笑いを浮かべる。

「ひさしげ様。今日のお味噌汁はどうですか？」

「う、上手いと思う」

何度も頷いた久重に朱憐が僅かに微笑み、チラリとソラを見てから再び食事に戻る。

「ひさしげ！」

「ソ、ソラ？」

ソラがジットリとした視線で睨み付けるように久重の方に身を乗り出す。

「食事が終わったら包帯変えるから！」

「わ、解った」

頷く事しか出来ない人形のようにカクンカクン首を動かす久重の様子に満足したのか、ソラがチラリと朱憐を見てから何事も無かったように食事に戻る。

「ひさしげ様」

「こ、今度は何だ？」

朱憐の視線が少しだけ迷う素振りを見せてから久重の肩に注がれた。

「その・・・ケガは大丈夫ですか？」

「ああ、大した事ない。少し仕事で痛めただけで三日もすれば直るらしい」

「そうですか・・・」

僅かに顔を曇らせた朱憐が俯いて食事に戻るも箸を止めた。

『腕取れてたのに・・・大した事無いわけない・・・』

久重の耳にソラの沈んだ声が響いた。

ソラが自分にしか聞こえないようNDを使ったのだと気付いて久重はその場の居たたまれなさに頭を掻く。

「ひさしげ様。今までずっと言わずにおこうと思っていた事があります」

「朱憐・・・？」

俯いていた朱憐の顔がいつの間にか上を向いていた。

その瞳に宿る今までとは別の色に久重が戸惑った。

「ひさしげ様。ひさしげ様が普通のお仕事をしていない事・・・わたたくし知っていましたわ」

「・・・そうか」

たぶん、そうなのだろうとは久重にも解っていた。

ご令嬢と呼ばれる人種である朱憐が本気になれば家の力で大概の事は調べられる。

そんな素振りもなくいつも接してくれていたからこそ久重は身分や門地とは人間にとって重要なステータスであるという基本的な事を朱憐では忘れられていた。

それを急に持ち出すという事は朱憐にとっても久重自身にとっても互いの深い場所に触れ合う行為であり、その場は無傷では済まない鋭さを持つ。

「ひさしげ様がただの大学院生ではなくて・・・何でも屋というものをしていて・・・時には危ない事や法に抵触するかもしれないような事をしているのも・・・」

「その通りだ。間違っちゃいない」

久重が朱憐の言葉を肯定する。

「それで失礼かと思いましたが、ソラさんの事も調べさせてもらいましたわ。久重様に留学のご経験は無く、世話になった大学教授もいないと家の者から言われました」

「――いつ調べたんだ？」

「昨日ですわ」

久重がその日数に内心で驚く。

久重は自分が思っていたよりも朱憐の家の力は強大なのだと今更ながらに感じた。

「ひさしげ」

「ソラ？」

箸を置いたソラが朱憐を見つめる。

制止しようとした久重を手で制して、ソラが首を横に振った。

「私が話さないといけない事だから」

その微笑に久重が反論の余地が無いと知る。

「大丈夫だから、ね？」

「解った」

「シュレン」

向き直るソラに朱憐を真っ直ぐに見つめた。

「単刀直入にお聞きしますわ。聖空さん。いえ、何処かの誰かさん。貴女は一体誰ですか？」

「話す前に聞いておきたいんだけど、私の事をシュレンはどれだけ知ってるの？」

「貴女がこの日本では不法滞在者である事。貴女がこの国では存在しないはずの人間である事。貴女の経歴が全て嘘である事。貴女がひさしげ様の仕事に何らかの関わりを持っている事。これで全部ですわ」

ソラが持っていた箸を置く。

「・・・・・・・・・・私はひさしげに助けられたの」

静まり返る食卓からラジオの音が遠ざかっていく。

「それまで私は一人だった。昔親しかった人達と私の道は違えてしまってから、ずっと私は逃げ続けてきた。もう何もかもに疲れてた。そんな時、私はひさしげに出会った」

たった数日前の事をソラは懐かしそうに語る。

「その時の私は何も見えなくなってた。自分はまだやれるって弱気になんてなって無いつて自分が強いフリをしてた」

久重が始めて出会った頃のソラを思い出す。

まるで何もかもを拒絶するように強がった少女の姿が今も瞼の裏に焼き付いていた。

「本当はこんなにちっぽけで何も出来なかったのに・・・・・・・・・・」
己の手を自嘲気味に見つめてソラが拳を握る。

「敵だと思い込んで酷い事をした私にひさしげは優しくしてくれた。私の為に怒ってくれた。私は絶対に忘れない。ひさしげが私にくれた事を」

朱憐がソラの瞳の奥。

揺らめきを見つける。

「・・・・・・・・・・」

耀かしいものを秘めた瞳が自分と同じものだと言葉は認める事にした。

その誰にも侵せない輝きは辛苦を舐めた者の証。

それを知って尚その先を望む者の色。

「私はソラ。ただ聖書のみ（ソラ・スクリプトゥーラ）。世界平和を望む逃亡者」

朱憐がその響きを微かに呟くとソラが頷いた。

「私の本当の名前は誰も知らない。私自身さえ。きっと、私を追いかける者さえ。自分がどんな国のどんな人種なのか私には解らない。予測は出来ても証拠が無い。たぶん、どんなに探したって私の生まれた記録はこの世界の何処にも記されて無い。私に解るのは私が誰にも利用されてはいけないという事だけ」

シュレンとソラが名を呼ぶ。

「貴女に私が教えられるのは貴女の未来に私はいないから心配しないでいいって事。それだけ……」

「————」

その微笑に感じられるものが胸を抉って、朱憐は胸を片手でそっと押さえる。

それは痛ましきだった。

最初からソラという少女が己の未来を信じていないという事実。

朱憐が望む未来に自分がいないと断言するという事はつまり「そういう」話だ。

「空さん。それはご自分を過小評価し過ぎですわ」

「え？」

未だ整理出来ない混沌とした胸の内が僅かに「弾んでしまった」事を朱憐は羞じ悔いる。

「わたくし達には明確な差がある。確かに優劣が最初から存在する。でも、それは貴女の想いが実らない事に対する言い訳にならない。それがどんなに『致命的な溝』であるにしろ、諦めるのは最後でいい」

「————」

今度はソラが何も言えなくなり、胸を押さえた。

「それがわたくしの持論ですわ。わたくしの未来に貴女がいなくても、それはただわたくしの前からあなた『達』がいなくなっているだけかもしれない」

「シュレン……」

ソラの顔に一筋の流れが伝った。

思ってもみなかった言葉がソラの胸を震わせていた。

「殿方の前で無闇にソレを見せてはいけませんわ。それは女の最後の武器なんですから」

ハンカチを差し出した朱憐の手を震える手が捉えて、きゅっと握る。

「あり・・・がとう・・・」

二人の様子にどうやら丸く収まったようだと久重がわざとらしく咳払いをして告げた。

「早く食べないと遅刻するぞ」

「え？ あ、は、はい！？」

腕時計を確認した朱憐が慌てて箸を持つ。

その顔は僅かに高潮していた。

着替えても覗かれたような気分には違いなかった。

自分の心の内を吐露するという事は誰だって恥ずかしい。

「空さん。これからそう呼んでよろしいですか？」

ハンカチで目元を拭いたソラが朱憐に赤い目元を細めて笑った。

「うん！！」

闇雲に走り出せるのは何も若い人間だけとは限らない。

佐武戒十にとっての人生はいつも五里霧中。

その最中を最速で走り抜けてきたからこそ、今の佐武があると言っても過言ではない。

職業倫理スレスレの違法捜査は数知れず。

しかし、自分の正義だけは貫き通してきた。

上から何と言われようと上すら黙らせる結果こそが全てを押し通す剣となった。

磨り減った靴の踵を誇れないならば、己の人生に一欠けらの価値無しと断ずる峻厳さ。

多くの人が佐武を称して「鉄槌」と呼んだ。

その佐武の称号をしてもその結果は警察始まって以来の大戦績だっ

た。

「お宅の住所を家宅搜索させてもらいました。出てきた書類は高度な偽造を施されたものばかり、カード類も免許類も全て偽造。銃弾二十箱。サブマシンガン二挺。フラッシュグレネード七発に通信傍受装置。顔を照会したら何処かの国のテロリストモドキな諜報員ときた。G I Oの実働部隊を捕まえたのは初めてだが、どうやら噂通りらしい」

顔の半分を包帯で巻いている白人の男が黙りこくった。

一晩過ごした留置場で体が固まったのか。

佐武の前でしきりに首の間接を鳴らしている。

「おたくのお仲間半分は自供しましたよ？ 後の半分はG I Oが助けてくれると思っているのかだんまりだが、時間の問題でしょう。ちなみにG I Oにおたく達の顔を照会しましたが「我が社は現在その犯罪者達に内部機密を持ち出されたのではないか調査中ですので」とか何とか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

頑なな男の態度に机の上で手を組んだ佐武が笑みを作る。

「ちなみに此処の留置場の警護は交代で二人」

ピクリと男の眉が動いた事を佐武は見逃さない。

「今時電子錠も掛けてない古い設備なんです、いや困ったな。今日辺り少しの間オレの呼び出しで五分は持ち場に戻ってこないかもしれない」

「——————脅しているつもりか？」

「いやあ？ どういう意味で」

男が唇を噛んで佐武を睨み付ける。

いつ始末されてもおかしくない男にしてみれば、佐武の言葉は『不審死』を遂げたいのかという脅しだった。

「取引だ」

佐武がニツコリと微笑んだ。

「条件を聞きましょう」

「オレが『独自に行った作戦行動の全容』を教えよう。その代わり絶対に釈放するな」

（まあ、さすがにそこら辺が落としどころか）

内心で佐武が一人ごちる。

あらゆる分野に進出しているG I Oの影響力は絶大。

そのG I Oに楯突く供述などしようものなら、どんな方法で始末されるか解ったものではない。

だからこそ、男の妥協点は「作戦内容は教えるがG I Oと自分は公式には関係ないという事にしてくれ」というものだった。

「では、銃刀法違反で書類送検しましょう。検察には話しを通しておきます。気にしなくても彼方が嫌いな国とは犯人の受け渡しが無いので安心を。『幸いな事』に彼方は外国人だ。今のご時勢なら再度逮捕されるでしょうから二十年は堅いでしょう。では」

四十分後、席を立った佐武は外で待たせていた同僚にその場を預けて部屋を出た。

佐武が脳裏で話しを整理する。

男の話を要約すると単純なものだった。

男に暗殺の仕事が舞い込んだ。

とある男を始末しろと言われて手を出したが途中で見失った。

再度見つけた時には女と青年と少女を連れていた。

そこで襲ったが返り討ちにあった。

対象の詳しい情報は知らない。

（国家権力を何だと思ってるやがる）

内心の怒りを静めて佐武はG I Oの遣り方に吐き気を覚えた。

男があそこまで警察に協力的な理由は一重にG I Oに対する恐怖があるからに他ならない。

状況的にぶち込まれるのはもう『詰んでいる』状況の男にとって逆にありがたい措置だろう。

日本程にスパイ天国の国は他に無いが日本程に国家権力が仕事をする国もまた無い。

官僚や幹部こそ天下りだの何だのとやっているが日本の末端の公僕
は外国に比べても犯罪者との癒着や賄賂などに対してのモラルが高
い。

組織内部への宗教汚染や官僚・経済界からの圧力なども比較的容易
に撥ね退け自浄する。

日本の警察組織そのものの独立性が高く、その独立性の高さ故に様
々な外部からの干渉が悪い意味でも良い意味でも届き難い。

未だに民営化されていない刑務所の管理は先進国の中でもとりわけ
嚴重というわけではないが、末端まで行き渡る職業意識が大きな背
任行為を発生させづらく刑務所内での暗殺なんて仰々しい事はまず
起こらない。

これが隣国ならば、知らぬ間に殺されていても何の不思議もないの
だから、男にとって捕まった事は未だ最悪の結果ではないのだ。

「とりあえず回るか」

男の身柄の安全を確保する為、複数の協力者に厄介事を申し入れよ
うと佐武が端末を取り出した時だった。

「佐武さん!!」

声に佐武が振り向くと慌てて今正に男を預けてきた同僚が駆け来てく
るところだった。

「今、被疑者がいきなり死んだ!!」

「—————!?!」

「佐武さん!!」

後ろからまた声がして佐武が嫌な予感に顔を強張らせる。

「どうしたってんだよ!?!」

怒鳴る佐武に他の同僚が二人駆け寄ってくる。

「留置場の連中が軒並みやられた!!」

「死んだのか!?!」

「今、救命処置を行ってるがダメそうだ!」

思わず舌打ちして佐武が唇を噛んだ。

「それで原因は?」

「それが目撃者は全員いきなり苦しみ出して死んだとしか?!」

(やられた!?)

佐武が苦い顔で思考を巡らせる。

(もしナノマシンや毒物なら証拠も残らないクソ!!)

G I Oならば大げさでも何でもなく証拠の残らない殺害方法をコスト無視で行える。

体内に本人達の知らぬ間に何かしらの仕掛けが施されていたに違いなかった。

「それで今現場はどうなってやがる!?!」

同僚の男の端末に連絡が入り、佐武の前で男が渋い顔をした。

「今、あっちの捜査本部が現場を封鎖してるらしい」

「クソが……」

歯を軋ませて佐武がその場から歩き出す。

「どうするんだ?」

同僚達から佐武に質問が飛ぶ。

「オレはこれから出てくる。お前らは何か解ったら連絡してくれ」

同僚達を置き去りにして佐武は騒がしい警察署から抜け出した。

歩きながら佐武が端末を取り出して短縮ダイヤルに掛ける。

「おい」

相手はすぐに出た。

「ふぁ~~~~い。こひら、りょうほ~~~~」

伸び伸びの声が寝起きである事に佐武がげんなりした顔で続ける。

「面白いネタをやる。欲しかったら公園に來い」

「!?! マジ!?! 了解しちゃいますすはい!?!」

「お前の頭には何が詰まってるんだ? ああ!?!」

不機嫌にかなり切れ気味で佐武が怒鳴ると了子が答える。

「それは無論。一にネタ。二にネタ。三にネタ。四に命。五に、く

あ~~~~あ……とりあえず衣食住」

欠伸を挟んだ了子がバタバタと外出の準備を整えていく。

「それならお前もネタ出せ。言っとくがこれからの話は命賭けにな

るかもしれん」

佐武がそう口にするとカラカラと了子が笑う。

「命賭けてないネタでスクープなんて無いですよ。戒十さん」

「冗談に聞こえるか？」

「これでも戒十さんに命賭けなネタを十や二十は上げました。えっへん」

「今回は今までの比じゃねえ」

「……………それでも戒十さんならどうにかしてくれると信じてます」

「お前…………後悔すんじゃないぞ」

「はい！」

了子の電話越しの明るい声に何か救われたような気がして佐武は電話を切った。

昼間の公園に辿り着くまで数分。

（少し他のネタもサービスしてやっかな……………）

佐武の口元にはいつの間にか緩やかな微笑が浮いていた。

永橋風御にとって数日も親友が尋ねてこないというのはほぼ異常事態と言ってよかった。

しかし、それが親友の仕事の話だと言うならば納得するだけの理由として十分だった。

アズトウーアズ。

そう呼ばれる女の仕事にはいつも危険が隣り合わせだ。

風御が知る限り、親友外字久重は常にその危険を^{リスク}背負っている。

数年前。

初めてその年齢不詳の女に出会ってからというもの久重は才能とも呼ぶべきものを開花させている。

それを知る故に風御はその女の情報には気を付けている。

傍から見ればアズと久重の関係は雇用関係の域を出ない。

しかし、風御にはまるでアズが久重を試し鍛えているようにも思え

た。

最初こそ小さな仕事をしていた久重が今では正体不明の女フィクサーの片腕と裏の世界では大評判だからだ。

猫探しだの浮気調査だのやっているだけならば風御はアズという女を見過ごしていたかもしれない。

しかし、諜報機関を相手取り詐欺紛いの手法で翻弄し、武器商人を相手に得物を安く値切り、公安とのパイプを持ちながら公安そのものにマークされ、海外富豪の私設軍隊やSASと一線交え、暗殺者に狙撃されてもケロリと外出しまくり、出所の解らない莫大な資本で特定業種の会社をM&Aし続け、小国だらけの地域でパワーバランスの調整に一役買い、交渉相手が気に入らなければ確実に破滅させる人間は見過ごせない。

そんな危険人物が親友の借金を持っているとなれば尚更に。

親友の傍にいる自分もその類だとは自覚しながらも風御は久重に極力裏社会に関わらせてこなかった。

自分が裏社会でどんな仕事をし、どんな地位にあったのか。

それは恥ずべき事ではあっても、誇れる事ではない。

未だに親友である男にそんな自分の昔を見せる事は出来ない思いながらも、裏社会での仕事から抜けている風御には風聞だけが届いてくる。

情報にイライラもどかしい毎日を送るのは体に悪い。

数日見かけないと思えば、海外で大暴れしているアズのお供が工作員をダース単位で返り討ちにしたのだと聞いて風御は愕然とした事もある。

いつの間にそんな話になっていたのかと溜息を吐きたくなる事は数知れず。

（まったく。持つべきモノは気に掛けてくれる親友だろうに）

毎朝のように朝食をタカリに来るのは正直辟易するものの、風御にとっては久重が裏社会に取り込まれていないか確認するコミュニケーション手段の一環だった。

そんなコミュニケーションを数日ほったらかしている親友が何をしているのかと微妙に気になった風御が朝から外字家を訪問するのは殆ど予定調和かもしれない。

淡々と階段を上り、外字の表札のあるドアをそのまま開けようとした時、風御の耳に甲高い声が響く。

『ひ、ひさしげの変態!!』

「は?」

思わず風御は自分の耳がイカレタのかと思った。

万年、アズ以外の女とは無縁の久重の部屋から若い女の声がする等という事態は風御にとって非常事態と言わざるを得ない。

『じゃ、ジャパニーず銭湯はこ、混浴だって知ってるんだから!!』

「はあ?」

声はたぶん少女。

そんな若い少女が久重の部屋でほんのり桃色空気の会話を展開している。

その事実には頭痛を覚えて風御がドアを少しだけ開けて中を覗く。

「博士が日本のお風呂は裸の付き合いで銭湯は男と女がくんずほぐれつ夢のドリームパラダイスだって言ってた!!」

少女がぎゅっと自分の体を抱きしめてジットリした視線で呆れ顔の久重を睨んでいた。

「凄い混ざってるというか特定の業種に偏ってるというか何から突っ込めばいいんだオレは?」

「ひ、ひさしげが・・・その・・・一緒に入りたいって・・・言うなら・・・考えてもいいけど・・・」

モジモジした少女の姿態にげんなりした様子で久重が首を振る。

「オレはここ数日忙し過ぎて風呂に入っていないという驚愕の事実到现在気付いただけだ」

「うう。私も少し忘れてたけど」

「いや、忘れちゃダメだろ!? 女の子として!!」

「で、でも、ただ忘れてたわけじゃなくて。【ITEND】は体の

老廃物なんかを排除して常に肉体の置かれる環境を保つから汗とか皮脂とかそういう汚れを綺麗にしてくれて」

「オーバーテクノロジー無駄に使ってんな?！」

久重が思わずツツコミを入れた。

「こ、これは戦場なんかで清潔を保つ事で士気の向上なんかを目的にしてる機能だから。それにそういう能力があるから今まで逃亡中も不快な思いはしなかったの……」

「――そうか。悪い。少し考え無しだったか」

頭を搔いて何やら反省した親友の顔に風御は愕然とした。

『あの』外字久重が自分よりも数歳は若い少女を相手にラブコメをしている。

風御の気が遠くなった。

「言っておくが日本の銭湯は混浴じゃない」

「ふえ!？」

「とりあえず、これからは毎日風呂ぐらい入りに行くから」

「ひさしげも一緒?」

「ああ」

「あ、でも……」

「どうかしたのか?」

「その、着替え」

「……悪い。気付かなかった。今日はその辺も含めて買出しに行こう」

「いいの?」

「悪い理由があるのか?」

「それは……だって、ひさしげ貧乏みたいだし」

「そういうのはこっそり心の中にしまっておいてくれると助かるな」

「お金大丈夫?」

「それなりに」

「うん……ひさしげが言うなら。お世話になります」

「畏まらなくていい。少し値段に気を付けてくれれば数着分買える」

金はある」

「無理してない？」

「してるように見えるか？」

「いいわ。ひさしげが驚くくらい安いのにするから」

「それはそれはどうもありがとうございます。お姫様」

おどける久重に少女は輝くような笑みを浮かべた。

【・・・・・・・・・・・・・・・・お前

誰？】

ラブコメを繰り広げる親友へ密かにツツコミを入れて風御はそつとドアを閉め、その場から立ち去った。

どうやら悪い夢でも見ているらしいと二度寝したのはその日の正午過ぎだった。

第十話 命の宣託を

第十話 命の宣託を

病院の奥にはいつも闇が広がっている。

廊下の先で誰にも知られないようにひっそりと人生の終わりが訪れる。

命と向き合う現場は戦争のようで、実際には救われる命よりも消えていく命の方が多い。

超少子高齢化が進んだ世界は葬儀屋こそ儲かるものの、人の命を救う病院に金は回らない。

高騰する医療費に国は抑制策を打ち出し、年金というシステムは破綻し、国民皆保険は崩壊しつつもまだ生きている。

そんな世の中でも技術という一点において人々の医療は守られている。

新技術による高い医薬品や医療機器のコストダウンが医療の質を下げずに値段を下げた結果、未だ医療現場も完全には崩壊していない。人口の激的な減少が起こった【黒い隕石】事件の後も例外的に人口が緩やかに衰退している日本で医療現場と国民は昔よりも親密な関わりを持つようになった。

一日中病院にいる老人達の多くが良い例かもしれない。

患者の誰もが長い生に疲れながらも、笑い怒り泣き、病院で余生を持て余している。

老人だけが通う病院で産声の数は少ないという声が聞こえてくるが、だからこそ人々は子供達にこそ未来を託そうと制度上は手厚い保護を行なっている。

「残念ですが、諦めて頂くしか方法がありません……」

六十を過ぎるだろう医者が僅かに顔を伏せた。

小さな個室で一人の女性が目を閉じ俯いて唇を噛む。

「私の命を賭けても？」

「どうにもなりません」

張り出した腹を撫でて沈む女性を後に医者が出て行った。

押し殺した嗚咽が暗い廊下を伝う。

その場を通り過ぎる看護師達は誰もが顔を沈ませながら早足になる。そんな時だった。

ガラリとドアが開いた。

医療関係者以外入ってくるはずの無い扉を抜けて一人の青年が顔を覗かせる。

「何方？」

女性には両親がいない。

女性には恋人もいない。

女性には友人もいない。

「失礼を。私はこういう者です」

白いスーツを着た青年が印象の曖昧な笑みでそっと名刺を女性に差し出した。

女性が受け取った名刺に視線を移す。

名刺には奇妙にも名前が無かった。

書かれているのは肩書きと会社名だけで胡散臭い事この上ない。

しかし、そこに書かれた一文が女性に僅かな興味を抱かせる。

先進技術。

「何か御用でしょうか？」

「その命を賭けても守りたいと貴女が望んだからこそ、私は貴女の前に現れた」

「……言っている意味が解りかねます」

「今感じた貴女の胸の内の期待を裏切らないだけの用意がこちらにはあります」

「本当……ですか？」

「はい」

「でも、用意できるお金は……」

手を握り締めた女性に青年は首を横に振る。

「我々は先進技術を実用化する為の被検体を探して貴女を見つけた。適合率七十七%、金銭は要りません。ただ、我々の実験に貴女が欲しい」

「この子を……本当に救えますか？」

女性の瞳に決然たる意思を認め、青年は頷く。

「産んだ後、成人まで面倒を見ましょう。しかし、貴女がこの子を抱くのは一度きりとなる」

女性がその言葉に張った腹を撫でて沈黙した。

「神も仏も運命も我々の管轄外ですが、技術という一面において我々は貴女に望むままのものを与えましょう。これは契約書のファイルです。三日の後に回答を」

蛹で封じられた黒い封筒を渡して、青年が背中を向けようとした時だった。

「待ってください」

振り向いた青年が黒い封筒を受け取った女性の視線に僅かばかり目を見開く。

「……お願いします」

「よく内容を読むべきだと思いますが？」

「私には学がありません。難しい事も解りません。でも、この子がもう助からないと医者に言われた時思った」

女性がそっと寝台から足を下ろす。

「何をしても私はこの子が産みたい」

青年が女性の強さに敬服するようにゆっくりと手を差し出した。

「人間を捨てる覚悟があるならば、貴女の願いは叶います。ですが、己の幸せを考えるならよく悩んだ方がいい」

女性の瞳は揺るがず。

「いいでしょう」

手を取って青年が先導する。

「では、行きましょう」

「彼方の……名前を教えてください。」

青年が恭しく名を告げる。

「ターポリン。世界平和を造るサラリーマンとでも呼んで頂ければ。お嬢さん」

その日、病院から女性が一人消えた。

誰もそれに気付く事は無かった。

洒落たブティックの一角。

カーテンが開く。

黒のスラックスに白いワイシャツ。

男装と見紛う姿に金色の髪が清かに擦れる音。

艶やかな色など無くとも少女は美しく笑みを咲かせる。

「どう……？」

恥ずかしげに頬を染めて聞かれて「それは無い」とか言う野暮な者は誰もいない。

しばし見入っていた久重はソラの服のチョイスが少し残念だと思いながらも無言で頷いていた。

「あんまり女の子っぽい服装だともしもの時に動き難いから」

言い訳のようにソラが言って、傍らの黒いコートにチラリと視線を向けた。

「他にも幾つか買っておくか？」

ソラが常に自らが追われている事を意識しているのだと気付いて、何かやりきれない気持ちになりながらも久重は動じずに応じる。

「ううん。これを二着だけでいい」

「金なら本当に心配要らないし、遠慮する必要も無い」

「少しだけ考えたよ。でも、やっぱりいい」

サッと閉められたカーテンの先からの声。

久重がソラの声に耳を澄ます。

「今、一杯服を買っちゃったら久重とまた来れなくなるかもしれないから」

「はい？」

思わずポカンと口を開けて首を傾げた久重にソラが続ける。

「その・・・また、一緒に連れてきて欲しいの・・・ダメ？」

心臓に杭でも打ち込まれたかのように久重の体にジワリと汗が浮いた。

世界の何処にこの破壊力満載なおねだりをダメと言う男がいるというのか。

ソラの声に当てられて紅くなった顔を冷ましつつ、久重は苦笑しながら答える。

「ダメじゃない」

「本当？ それじゃあ、また来てくれる？」

「ああ、折りを見てな」

「うん！」

カーテン越しに輝く笑みを見た気がして、久重がカーテンから視線を逸らし、

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

体を硬直させた。

「—————?!」

店内にいた女性客からの好奇の視線が久重の全身を磔にしていた。

平日の昼からブティックで金髪の少女に服を買い与える青年。

暇な奥様のゴシップ材料には十分すぎるネタに違いなかった。

「行こ。ひさしげ」

上機嫌で服を持って出てきた少女が真っ黒いコート姿をしているとなれば、もう百パーセント周辺の奥様達の噂になるのは避けられない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

手を自然に引かれながら久重は思う。

少女の笑顔が見られるならば、それくらいの事はいいかと。

（いつか、女の子らしい服くらい着せてやりたい、な・・・・・・）
ブティックを出ると昼を過ぎていた。

余計な外食は外字家家計の敵ではあったが、久重は構わずにファーストフードの店に入る。

「知ってる。これって『ふぁーすとふーど』でしょ!？」

まるで幼子のようににはしゃぐ姿にソラの過去が透けて見えて、思わず一番高いセットを注文した久重はほぼ満席の窓際の一角に隣り合って座った。

「ひさしげ。みんな楽しそうだね」

二階の硝子越しに行きかう人の群れを見つめながらソラが微笑む。

何が楽しいのかと思わず聞こうとした久重は口を噤んだ。

楽しいはずだ。

久重にも想像できる程にソラの過去は暗い。

複数の聞かされた事実を照らし合わせれば、ソラにはたぶん明確な親が存在しない。

それどころか育ての親とも言うべき親しい人間すらこの世にいない。残っているのは親しかった「博士」から受け取った【I T E N D】と大きな組織から追撃されているという事実のみ。

まともな精神性を獲得しているからとソラを普通の少女として扱うのは問題がある。

久重が今まで出会ってきたソラの追撃者達は誰もが人格的に何処か壊れていた。

ソラと追撃者達は同じ場所で過ごしていた知り合いらしいが、ソラがその場で異端であった事は疑いようがない。

まともな性格をしているからと言って自分の「普通」に当て嵌めてソラと語り合えば無自覚に傷つけかねない。

久重が見る限り、ソラには常識的な知識こそあるものの経験としての知識が乏しい。

何処にでもあるような町並みに感心するのは新鮮だから。

服を一着買うだけで大はしゃぎなのは買った事が無いから。

妥当な理由が久重の心に重く沈んだ。

「あ、呼ばれてる」

ソラが嬉しそうにカウンターへ向かう後ろ姿を複雑な感情のまま久重は見送る。

それから、戻ってきたソラと共に昼食を平らげ始めて数分後。

「ひさしげ。今日はありがとう」

「どういたしまして」

窓の外に視線を向けていた二人の間に生まれた会話は何処か静かだった。

ポツリと呟いたソラがバーガーを置く。

「凄く楽しかった・・・」

「そりゃ良かった」

「ねえ。ひさしげは楽しかった？」

「ああ、少しだけ緊張したが」

「どうして？」

「異性に付き添ってブティックなんて行くのはリア充くらいなものだからな」

「りあじゅう？」

「簡単に言うとNEETとは対極の人種だ」

「にーと？」

解らないという顔をするソラに解らなくていいと笑って久重が口元に付いたソースを指で拭いた。

「~~~~~?！」

「どうかしたのか？」

「ひさしげってずるいわ・・・」

僅かに俯いた少女の黒いコートが揺れる。

「ひさしげ。日本ていいところよ」

「そんなにか？　ハッキリ言っちゃ何だが技術は進歩しても国力は衰退してるし、国政は数十年前からグダグダで毎年首相が代わるし、オレなんかもう社会の底辺ストレスだし」

冗談交じりの久重にソラが「それでも」と首を横に振る。

「だって、この国には平和があるもの」

「平和？」

ソラの言葉に久重が耳を傾ける。

「街にはゴミが落ちてないし、今日の糧を乞う物乞いもない。家族でショッピングをする人がいて、友達同士で笑い合う場所があって、体を売る人が道で誰かを待っている事もない。空は蒼いまま排ガスで曇って無いし、夜は女の人が出歩いても襲われる事が無い。食料と水を奪い合う時代に飲み水が何処でも手に入って食事も命掛けて手に入れる必要が無い。家族を亡くした子供が通りで一杯座っている事も無ければ、自分の未来を夢見るだけの余裕もある……」

「確かにそうかもしれない。でも、それは『綺麗事』だ」

「うん」

久重の言葉に頷いて、それでもソラは窓越しの蒼い天そらが贗物だとは思えない。

「博士が言ってた。自分のいる其処が戦場なんだって」

久重はそんな「冷たい当然」が未だ幼さが残る少女に教えられた事を内心苦く思った。

「この国で当たり前に享受してる事が実は凄く尊いものなんだってのは誰もがいつもは忘れてる事実なんだろう。でも、それは仕方ない。世界から見れば本当に恵まれてる日本ですら自殺者が出る。純粹に餓死者が毎年必ず出る。行方不明者の数も多いし、変死体だってあるし、孤独死して数年も発見されない老人がいる。他人からどう見えようと確実に「不幸」である人間は消えないんだ。命に関わらなくとも平和とは程遠い奴が大勢いる。老後の年金が無くて困る連中は沢山いるし、今日を生きてく為に病気でも働く奴もいる。住所が無くて日雇いで働いてネットカフェに数十年暮らす奴もいれば、増水しそうな橋の下にねぐらを構えるホームレスも山の如くだ。暮らし向きが苦しくて不和を起こす家族、働き口も無く家で親の財産を細々と食い潰す独り者、信頼できる大人がいなくて非行に走る子供、どれだけ平和だと言ってもそういう人間はこの国で減るところ

が増えてる」

「ひさしげはこの国が嫌い？」

純粹な瞳が久重を見つめる。

「そうだな・・・・・・半分嫌いだ」

「それじゃあ、後の半分は？」

「嫌いじゃない。少なくともオレはこの国で生きて行きたいと思う」

「どうして？」

「オレが悲観主義者じゃないからだ。この国に将来の展望や希望があるとは思わないが、これ以上に悪くなるなら誰かが変えてくれるはずだと信じてる」

「自分で変えられるとは思わないの？」

「思わないな。人間一人の力には限りがある。大きな変革が個人の力で出来る状況なんて限られてる。理想を共有して大勢の人間を動かしてすら、一つの事を変える為に人生は足りないかもしれない。オレに変えられるのはオレの身近な事だけだし、それ以外に手を伸ばす気もない」

ポンポンと久重の手がソラの頭に置かれる。

「喧嘩して仲良くなった居候の今日のご機嫌とか。近頃いつも朝方にやってくる女子高生のご機嫌とか。一体オレ以外の誰が取ればいい？」

「それ・・・何か凄くダメな人みたい」

はぐらかされたソラが呆れた様子で半眼になって睨む。

「いいんだよ。それで」

笑った久重がソラの頭をグリグリと撫でる。

「ひ、ひさしげ！？」

慌てるソラに久重が視線を合わせた。

「オレはそういうのいい。オレは世界を救ったり変革できたりしない。オレはオレが出会った奴が幸せとはいかなくとも笑って過ごせるなら、それで十分な人間だからな」

「ひさしげ・・・・・・」

ソラは気付く。

目の前の人はきつとそういう男なんだと。

助けてくれたのは大そうなる理由からではない。

それがその人にとって当たり前の生き方なのだ。

（ひさしげはもう世界を救ってる……誰にも救えなかったはずの世界を……）

『ソラ・スクリプトウーラ』の死と共に世界は劇的に変わっていたはずだった。

多くの人間の血を流して、世界は変革を迎えるはずだった。

そんな未来を変えた人の言葉をソラは胸に刻む。

「それじゃ……その……ご機嫌まだ取ってくれる？」

おずおずと上目遣いに少女は青年に甘えた。

「そうだな。今日の夕飯は外食にするか？」

「ひさしげが一緒なら凄く安い袋に入った「らーめん」でもいいよ？」

少女が囁く。

「まいったな」と財布の中身を看破されて苦笑する青年は頭を掻いた。

「ま、それはとりあえず保留だ。そろそろ出るか」

「うん」

互いに気付かぬまま、少女と青年の手は結ばれ、その日遊び呆けた後の夕食は屋台の「ラーメン」となった。

黴の臭いが僅かに鼻を擽る図書館の最奥。

十数メートルの本棚を左右にしてカウンターが置かれていた。

天蓋からの漏れるのは緋色。

背表紙は日に焼ける事もなく、静かに智を収めている。

日が落ちれば明かりの全てを失うだろう場所で老人が一人本を読んでいた。

顔は白髪であるものの、燕尾服を着込んだ老人の背筋は未だ鋼の芯

を有している。

カウンターの傍らに置かれたカップから立ち上る香気が市販されるあらゆる茶葉と似ても似つかないものだ」と知る者は少ない。

本とインク、黴と紅茶。

「・・・・・・・・・・？」

全ての薫りが渾然と漂う世界に老人が足音を聞くのは久方ぶりの事だった。

「まだ、その本を読み終わっていなかったんだね？」

アズトウーアズと呼ばれる事もある女にそう言われて老人が顔を上げた。

「これはどうも。CEO」

本を置き、頭を下げる老人にアズが笑った。

「いや、頭を上げてくれないかな。君に此処を任せてるのは頭を下げさせる為じゃない」

「はい。それで今日の御用は？」

「ちよつと昔の資料が見たくなって。七年前と十七年前の移民政策に関する情報。それから三年前のアメリカ上院議会八月の議事録。後はGIOの五年前の資料を」

「畏まりました。今日はええと・・・・・・・・『ろ』の二千八百八十九番と『さ』の六千百二番です」

「ありがとう」

「資料は閲覧後如何しますか？」

「アーカイブに放り込んでおいていいよ。今のところは」

「了解致しました」

頭を下げた老人が手元のキーボードを操作し始める。

カウンターの左右に展開されていた本棚が分割され一本の道だったはずの道が三本に分かれていた。

「今日は右かい？」

「いえ、左に六十メートル。下に五百メートルです。はい」

「ありがとう」

アズが左の道に進むと本棚が再び動き出した。

アズの行く手にギッチリと詰まっている本棚が歩みに合せて左右へ分かれていく。

やがて、きっちり六十メートル進んだアズの足元がゆっくりと下り始める。

その足元を構成していた本棚の多くがまるで生き物のように回転しながら自らを別の場所に置き換え続ける。

アズの足元が回りながらゆっくりと落ちていく。

その視界には無数の本棚が蠢く光景があった。

一分もせずに足元が止まりカチリと音がしてアズの目の前に本棚がせり出す。

一冊だけ置かれていた本をアズが取り出した。

開かれた本の中身は紙ではなく画面だった。

上から高速でスクロールされていく情報を読み取って十数分。

アズが本を閉じて本棚に戻すと再び本棚は何処へともなく埋没していく。

元来た道に戻ったアズの前に広がっていたのはカウンターではなく扉だった。

「また、来るよ」

扉の外に出て行こうとするアズの背後に老人の声が掛かる。

『そういえば少し聞きたいのですが【BMI Sight】の調子は如何でしょうか？』

「さすが工学博士と褒めておこうかな。脳に対する負担は最小限で済んでるよ」

『それは良かった。ソレの適合者が何人か狂ってしまって少し心配していたのですが安心しました』

「まったく酷い爺だ。君は」

苦笑するアズに老人も笑う。

ブレイン・マシーン・インターフェイス エンハンスメント

『今のところBMI技術の課題は生体改造後、何処まで脳が適応し得るかというところにあります。脳と機械を直結しても未だ人間は

脳に直接意味のある情報を入力する事が難しい。高次機能を代替するレベルでは未だ成果も出ていない。だからこそ抹消感覚レベルで置換しているのですが、それでも適応性が低く耐えられない者もいるようです』

「確かに普通の人間なら狂うって言うのは解る気がするよ」

『何か見えましたか？』

「君のコレは高機能過^{みえ}ぎる。問題は其処さ」

片目を手で隠してアズが笑う。

『・・・・・・・・？』

「要は無駄に見たくないものが見える」

『ああ、そういう事ですか？』

「やたらと使い勝手が良くて殆ど完璧な視覚情報を得られる上、『更に』高機能だから最低限の機能でも恒常的に脳への負担が重くなる。普通の人間には少し辛いんじゃないかな」

『IPS細胞との合いの子なので期待していたのですが・・・・・・・・』

何やら落胆した様子で老人の声が溜息を吐く。

「重過ぎるプログラムは嫌われるよ。それと同じ」

『今度取り替えましょう』

「いや、いい。僕にはこっちの方が合ってる」

『では、次回には大改造を』
バージョンアップ

「それもお断り」

『そうですか・・・・・・・・』

少し残念そうな老人の声がしよげる。

「君の言う改造は全身機械とかになりかねないから。健全な青少年を機械に恋させるなんて野暮ってものだろう？」

『まだ、あの男に御執心なのですか？』

「文句でも？」

『誠心誠意これからも応援させて頂きますが』

「男心の掴み方とか教えてくれると有り難いかな」

『女性のしなを作った際の「ねえ」は日本の昔ながらの口説き文句です』

「君の感性が昭和風味なのは理解したよ……」
呆れ笑いながらアズは外へと出ていく。

『貴女の前途に幸在らん事を……CEO』
図書館の扉がそっと光を閉ざした。

太平洋側にある港の埠頭に大型の石油タンカーが横付けされていた。
深夜を過ぎて作業をするものの姿は消えている。

置かれている事務所の一角で握手が交わされていた。

分厚い遮光カーテンに遮られた室内で二人の男が椅子に腰掛ける。

一人は四十代の黒人。

一人は三十代の白人。

どちらの顔にも笑みこそ浮いていたが、内心は厄介事にうんざりで
疲れていた。

「はじめまして。ミスター……何と呼べばいいかな？」

黒人が少し困って白人に訊く。

「商売敵にはOZなんて呼ばれてるが何でもいいさ。マイケルだろうがハワードだろうが」

フランクに白人が答えると黒人が僅かに顔を顰めた。

「この国では身分証明が必須だ」

「なら、オズ・マーチャードでも呼んでくれ」

どうしてもよさそうに適当な答えを返すオズに黒人が溜息を吐いた。

「それじゃあ、オズ。君に三つ忠告だ。一つ目は『ニューカン』に付いて。この国は基本的に密入国外国人に厳しい。移民局こそ無いが法務省下の『入国管理局』はかなり優秀だ。偽造書類は必ず最も信頼できる物を使う事を奨める。二つ目はこの国での態度に付いて。この国だとその態度はかなり目立つ。別人に成り切る演技力が無いなら本国に帰った方がいい。この国での君のような白人のスタンダードは外国人観光客か日本の公共マナーを守る留学生だが、間違っ

ても移民に化けるのは止した方がいい。都市部だと夜間に職務質問の嵐を受ける事になりかねない。三つ目はこの国では公務員その他のあらゆる業種に対して不正を教唆するのは極めて難しいという事だ。チップの習慣は無いし、賄賂も殆ど効かないし、義務や規律の遵守姿勢は尋常じゃないから痛い目を見るかもしれない。もし生の情報欲が欲しいなら、とりあえずその人物のブログやツイッターを調べる方が手っ取り早い。おっと、ゴミは漁るなよ？ 近所の「オバサン」にマークされるからな。後、仲良くなる手法は厳禁だ。顔を覚えられたら似顔絵を描かれて顔を変えなきゃならなくなる」

「三つ以上のご忠告どうも」

軽いノリのオズに黒人が再び溜息を吐いた。

「言っておくがくれぐれも表立った犯罪は行わない方がいい。警察の優秀さは侮れない」

「今まで中東だったから思うのかもしれないが、法治国家なんてまだ残ってたんだな」

「地球が崩壊する日に暴動も略奪も犯罪も起こらなかった国だぞ。

統計だと、その日だけは日本人の犯罪率が劇的に下ったそうだ。無論、移民や外国人達は例外だったが、それもちゃんと機能していた警察に押さえ込まれて死傷者は日本全国でもごく僅かだった」

男が驚きに口笛を吹く。

「本当か？ あの日に警察が動いてたって？ どういう神経してるんだこの国の連中？」

「それが国民性、民度の違いと言ってもいい。インテリジェンスには最適の国と言われる程に平和呆けているし、「スパイテンゴク」なんて汚名も事実だ。世界各国の人間が入り込んで好き放題に情報を盗み出してる。だが、居心地が良いと評判なのは君にもすぐ理解できるだろう。此処に住み着いたら金さえあれば不自由な思いはない。食事は十年違うものを食べていられる程に種類が豊富だし、酒も世界中のが揃ってる。女は総じて御淑やかで露出が少ないものを着てるが『そっち』の文化も進んでるから心配は無用だ」

オズが黒人を呆れた様子で見つめた。

「楽しみ過ぎだろう。おい」

「二十年も居れば愛着も湧く」

「それでオレの部屋は何処に置く事になってる？」

「契約は済んでる。住所はここだ。『カンジ』読めるか？」

「問題ない」

黒人が男に書類一式を渡した。

「ちなみに治安は最高だ。旧華族、旧財閥の名家が乱立する場所が近いせいで普通の組織は手が出せない。だが、逆に犯罪が起きれば徹底的な追及を受ける危険がある」

「こっちから何か事件を起こさない限りは大丈夫って事か？」

「そういう事だ」

「了解した」

書類と鍵を全てを受け取ったオズが事務所から出て行こうとすると背後から声が掛かる。

「言い忘れたがお隣には必ず挨拶に行け」

「はぁ？ 何言って――」

思わず振り向いたオズが黒人が真剣な顔に黙り込む。

「その場所を確保するのに色々とコネを使った。部屋を借りる条件がソレだった」

「・・・そのお隣ってのはどんな奴なんだ？」

「オレも詳しい事は知らない。いや、知りたくない人間だ」

しばし考えたオズがそっと聞く。

「・・・・・・『ヤクザ』？」

黒人が首を横に振る。

「そんなものよりずっと恐ろしい」

「おいおい。危険人物に挨拶に行けってどういう神経してんだ」

「危険は危険だがこちらから手を出さない限りは安全だと保障された。彼女はそれを裏切らない」

「女かよ！」

「いや、正確には彼女の下で働いている男だ」

「男かよ!？」

「それと居候が一人いるらしい」

「何なんだよ?!」

喚くオズに黒人が「まあまあ」と宥めながら汗を浮かべつつサムズアップする。

「頑張れ。相手はただの下働き。ただの『AS』の手下だ」

「——————何？」

時間が数秒止まったオズが再び動き出して訊く。

「……………ウチの上層部が昔は目の敵にしてた?……………」

・

オズに黒人が頷く。

「その『AS』だ。だが、今は協定で互いに過干渉しないと取り決めてある」

「知ってる。そんな時オレの同僚が四人程仕事止めたからな」

「くれぐれも機嫌は損ねないでくれ。この国での仕事が人生最後になるぞ」

「ああ、解った。くそつたれ」

「後は自力で何とかしてくれ。ここもそろそろ引き払う。もう会う事もないだろう。祖国の為に頑張れ青年」

「オレがそんな年に見えるか?　ったく」

オズが事務所から出て行くと黒人がドッと疲れた様子で椅子にもたれてグッタリとした。

階段を上がってくる人の気配に黒人が慌てて起き上がる。

事務所の扉が密やかに開いた。

「あなたいる?」

三十代と思しき女の声に黒人が破顔した。

「おお、マイワイフじゃないか。どうしたこんな夜更けに?」

「お仕事頑張ってるって同僚の方に聞いたから来ちゃった。さっき降りていった人との商談だったのかしら?」

「まあ、ね。とりあえず入りなさい。外は蒸し暑かっただろう」

「ええ、お弁当持って歩いてきたから汗掻いちゃった」

「おお、ベントーか！」

黒人が始めて妻の手に持たれていた大きなバスケットが目に入ったか大喜びする。

（これで借りは返したぞ。アズ……）

黒人はニツコリと笑ってバスケットを受け取った。

二人の賑やかな声が事務所の外に僅かに響き、歩き続けるオズは一人愚痴った。

「何処がテメエの祖国なんだっつーの」

声は小さく闇に吞まれた。

第十一話 偽善者の証明

第十一話 偽善者の証明

佐武戒十は苦虫を噛み潰したような顔でボードの文字を睨み付けていた。

（面倒な事件押し付けられちゃったな・・・）

数日前、警察署内でGIOの裏方の実行犯達を捕まえるという功績を挙げた佐武だったが、犯人達の不審死によって功績どころか一部上層部からの非難を浴びる事態に至っていた。

不審死した犯人達の解剖結果から解ったのは犯人達が同時刻に心不全を起こしたという事のみ。

何らかの検知不能の殺害方法がGIOによって使われたのは目に見えて明らかだったが、立証する為の証拠は何一つ残っておらず、自殺の可能性すらあるという建前で警察上層部は全ての事件を揉消した。

事件の犯人達が数人警察署内で同時刻に殺されたともなれば、警察の信用は失墜するどころの騒ぎではなくするのは無論の事、警察機構そのものの弱体化にも繋がりがかねない。

GIOからの経済界を経由した警察上層部への圧力も犯人達の死亡原因を突然死や不審死、自殺で片付けさせるには十分な判断材料だった。

結果、事件捜査を主導していた佐武はその責任を取らされて、名目上は新たな事件の捜査という話で窓際に追いやられる事となっていた。

「プロファイラーの見地から言わせていただけるならば――」

公には責任を取らせられない事情から無駄に時間が掛かりそうな事件を割り振られた佐武は内心で歯噛みしながらも淡々と事件の概要を頭に入れていく。

「この事からも解るように犯人の性別はほぼ間違いなく女性——」
二日前、都市部の東側でジョギング中の男性が川原で死体を発見し警察に通報。

遺体には四肢が全て欠けていた。

「この遺体を検死解剖した結果、死因は『餓死』だと解りました」
胸糞の悪い説明に佐武が顔を顰めた。

「更に欠落していた四肢は丁寧に縫合され、痕が完全に塞がっていた事から半年以上前に手術されたものだ」と村田先生からは結論を頂いています。全肢を縫合するような手術が半年前以前に何処かの病院で行われていたかを問い合わせてもらいましたが大学病院私立病院開業医どれも空振りです——」

仏の顔を写真越しにそつと覗いて佐武は思わず渋面になる。

今まで惨たらしい死に方の遺体を山のように見てきた佐武だったが、その写真の遺体は異次元の生物でも見せられているような悍おぞましさを秘めていた。

焼死、溺死、窒息死、失血死、圧死。

どれもこれも決して綺麗な苦しまない死に方は出来ない。

しかし、そこには一様に人間として苦しんだ痕跡がある。

(この仏……なんつー面してやがんだ……)

だが、その写真の遺体は人間らしく苦しんで死んだ顔とは佐武にはとても思えなかった。

「尚、当初遺体の年齢は老齡かと思われいましたが……
検死結果では二十代の男性だそうです」
ザワリと会議室の空気が変質する。

「検死結果では白髪化の原因はおそらく心因性のもので、顔の皺も飢餓と心因性のものではないかと……」

気まずそうに進行役の刑事が告げると場の空気が一気に重くなった。誰も彼もが事件の惨たらしさと異様さに汗を滲ませていた。

バラバラ死体なんて昨今珍しいものではない。

問題は殺し方の異常性と遺体の異様さ。

見慣れているはずの刑事達すら遺体の写真を面と向かって見るのは腰が引けていた。

佐武が手を上げる。

「何でしょうか。佐武警部補」

「つまり今までの話を総合すると仏さんはサイコな女に達磨にされた拳句に餓死させられたって事でいいのか？」

『佐武さん！？ 言い方って物が・・・』

同僚の一人が佐武の袖を引っ張り小声で忠告する。

「言い方もあるだろうがそういう事じゃねえのか？」

進行役の刑事が「ああ」と苦い顔で頷いた。

佐武が座る。

「本人確認は現在歯型を照合中。周辺の聞き込みは五班と六班が主軸となってくれ。二班と三班は病院関係者を当ってくれ。一斑と四班は周辺の監視カメラの情報を当って欲しい」

それから会議が解散となるまで佐武は黙り込んだままだった。

「佐武さん」

会議後の一室で同年代の同僚に話しかけられ佐武が顔を上げる。

「今は我慢の時だ。アンタらしくもない」

「近頃、おかしい事件ばかりだろうが。オレもおかしくなる程度で調度いい」

佐武の冗談に苦笑して同僚が肩を叩いて部屋を後にした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

再び佐武が遺体の写真を見る。

全体写真を見れば、それは異様としか言えない死に様だった。

ガリガリに痩せた骨と皮だけの四肢を失った老人。

その顔は形容し難い程に歪み人間の顔とは思えない末期を刻んでいる。

「何かが起きてやがんだ・・・・・・何かが・・・・・・」

まるで連動しているかのように続く不可解な事件の数々が佐武には数日前のテロリストの包囲に端を発している気がした。

事件が立て続けに起こる原因が何なのか。

それを究明しない限り、また何かが起こる。

そう佐武には思えてならなかった。

永橋風御の生活サイクルには労働という言葉が存在しない。

マンションの最上階を全て所有している程度には金に困っていない風御には人生を楽しむ術だけが生活の全てと言える。

居酒屋で引っ掛けた女を連れ込んで次の日には別の女を連れ込んで更に次の日には何処かのパーティーをぶらつき意味も無くホテルのスイートで寛ぎ唐突に家の冷蔵庫が気になって買出しをしてから帰る事もザラだ。

そんな風御の趣味はどうしようもない女を拾ってくるという事に尽きる。

「どうしようもない」という形容は風御本人にとってそう特別な事を意味しない。

顔がボコボコに腫れ上がった腕に注射痕だらけの女をゴミ箱の近くから漁ってくるとか。

完全に捻くれてしまった頭空っぽの哀れな死に掛け不良少女を公園から担いでくるとか。

明日も知らない借金まみれな酔ったソープ嬢を橋の欄干の上からしようがなくお姫様だっこで持ってくるとか。

そういう至って「普通」な慈善行為だ。

裏の世界側にいた風御にとって身を持ち崩す女は日常的に転がっている落ち葉と大差ない。

何処にでもある悲劇を可哀想等とは思わないし、それを救ったからと利益を得るわけでもない。

だからこそ、正に趣味として風御は保護を行っている。

「どうしようもない」女を拾ってきて、とりあえず傷があるなら手当てをし、病気なら看病して医者に見せ、借金があるなら払ってやり、頭が空っぽなら勉強を教え、ヤクザ屋さんが怒っているなら話

を付け、とりあえず問題が解決したら家から追い出す。

まるで聖人か何かのように聞こえる行為も本人からすれば、趣味の範囲でしかない。

その日も風御はブラブラと都市を歩きつつ、落ちた木の葉の中を散策していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黄昏時の都市には多くの匂かおりが混在する。

排ガスよりも濃く鼻に残るのは夕食の香り。

香料と汗と帰路を急ぐ人が立てる埃の臭い。

日常に追われながら生きる者のニオイは都市を昼から夜へと移し変えていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ふと気付けば、風御は小さな映画館の前にいた。

大昔の映画をリバイバル上映しているらしい小さな小さな映画館。

貸しビルの一角へ続く狭い階段を上っていけば、風御も見知った十年以上前の大作のポスターが乱雑に貼り付けられている。

エレベーターも無い貸しビルの三階。

やる気の無さそうな老人が一人ポツンとカウンターに佇んでいた。

耳の遠そうな老人に金を払い途中からでいいかと風御が場内への扉を静かに開けて入る。

風御が辺りを見回すが誰一人として場内にいなかった。

正面のスクリーンに映し出される男が静かに酒を呷るシーンに何の映画だったかと僅かに記憶を手繰りながら歩いた風御は部屋の中央ど真ん中に座る事にした。

微妙に背が高い備え付けの椅子に腰掛けた風御が正面のスクリーンに集中しようとして気付いた。

「？」

スクリーンの前に余計なものが移り込んでいた。

それは風御から数席前の席からヒョッコリと生える鉤型の細い何かだった。

暗い室内でよくよく目を凝らした風御がソレの正体を探る内にスクリーンの内側では男達が銃で無駄弾をばら撒いていく。

『！』

風御の見つめる先でソレがビクリと震え、左右に揺れ始める。

（ああ、何だアホ毛か）

ソレが漫画などにはありがちな表現、髪天边から何故か生えるレーザー的な何かだと気付いて風御は納得する。

スッキリした気分で風御が再びスクリーンに視線を向けると何故かスタッフロールが流れ始めていた。

「・・・・・・・・・・」

何か理不尽なものを感じて風御が溜息を吐く。

とりあえずアホ毛の持ち主に意識を殺がれた風御の千円は無駄になったが、本人にはそんな事どうでもよく。

風御は歩いて自分以外にこんな時間帯の寂れた映画館にいる暇人を確認してみる事にした。

歩いて前に五列目、最前列からは三列目、その中心席を覗き込んだ風御の瞳がバツチリとアホ毛の持ち主の瞳と交錯した。

「誰・・・・・・・・何ですか？」

細い声が風御の耳を抜ける。

「君こそ誰？」

互いに同方向に首を傾げつつ、風御の脳裏が高速で回転し始める。列の中央に座っていたのは未だ中学生より下に見える少女だった。僅かに赤みがかった髪に夏だからと言うには滑らか過ぎる褐色の肌。顔立ちは僅かに日本人に似ているものの、全体的に彫りが深い。整った顔立ちのせいでその年齢その身長にしては大人びて見える。衣服の造りから割と人物の所属する層が推し量れる風御はすぐに少女が低下層の移民二世三世辺りだと解った。

「失礼な人ですね。名乗るならばまずは自分から、でしょう？」

年齢の割にしっかりとした答えが返ってきて、風御は少女が学業を収め、礼儀を躰けられている事実に僅かな驚きを感じた。

「そうもそうかな。ん、僕は風御。しがない大富豪だよ」

シレっと真実を語りながら風御はたぶんはハーフだろう少女の動向を伺う。

胡散臭そうな瞳で風御を見た少女が数瞬だけ考える素振りを見せて口を開く。

「あたしはセキ。しがない移民四世です」

「四世？ 確か日本でも四世は全体の0.00002以下。珍しい部類だ」

「出会った女の子にいきなり珍しい発言をするアナタの方が珍しいのでは？」

皮肉げに答える少女の理知的な瞳に風御は益々驚きを感じる。

「いや、本当に君は珍しい部類に入る。君の国の移民の殆どは自国語での教育に力を入れてるはずだし、こんな場所で見かけるような層は全体でも一万人もいない。それなのに君は平日にこんな場所でこんな時間に映画を見てる。うん、珍しい」

断定口調の風御に少女セキが気分を害するより先に目を細めた。

「そんな事をペラペラ口にする二十代前半の日本人がこんな場末の映画館でこんな平日の夕方にいるのも随分珍しいと思いますけど」
風御はその反論に思わず噴出してしまった。

「確かに・・・つく・・・」

セキが僅かに渋面を作って風御を見上げる。

「これだから日本人は・・・お兄ちゃんを見習わせてあげたいです」

「お兄さんがいるの。セキちゃんには」

「初対面の女の子をちゃん付けで呼ぶ危ない人には教えたくないです」

「それじゃあ、初対面の女の子を呼び捨てにしてもいい？」

「ナンパなら他所でやって下さい」

「生憎と女性関係に困った事は無いね」

「そんな高級スーツを着崩してるなら、そうかもしれませんね」

棘のある言葉の数々に滲み出た少女の『色』に風御は内心冷静なままで会話を続ける。

「貧乏人には高級感が伝わらないよう着てるつもりなんだけど。よく解ったね？　今まで見破られた事ないからさ」

「見ていれば解ります・・・アナタ、何が目的ですか？」

警戒感バリバリのセキに風御は肩を竦めた。

「君のせいで映画を見逃したんだよ」

「は？」

「君のアホ毛が気になって気になって結局内容も覚えてない」

一瞬、啞然としたセキが自分の頭を慌てて押さえ紅い顔で風御を睨み付けた。

「人の弱点を論う。^{あげつら}如何にも金持ちのしそうな嫌がらせですね！？」

「いや、事実君のアホ毛はこの映画館だと他の観客には耐え難い試練だったはずさ。僕には解る。君のせいで数人いた観客も消え失せたのが」

「言い掛かりです！！」

「いいよ。君が何と言おうと事実は変わらないでしょ」

「~~~~~」

ふるふると震える少女の顔が真っ赤に染まる。

怒った顔に風御は「ニヤリ」と笑みを浮かべて手をヒラヒラさせながら道を引き返した。

背中に怒りの視線を感じながら場外に出た風御が幾つかの自販機に財布の万札を呑み込ませて、ドリンクとツマミを大量に取り出す。

「今日何時まで？」

老人が横を指差す。

ボードには午後十一時とあった。

「コレで十一時まで貸切にしてくれる？」

財布から一センチ程取り出して詰んだ風御がニツコリ笑うと老人が僅かに驚き顔を上げてコクコク頷いた。

「それじゃ」

場内に戻っていく風御の背中を見つめていた老人は慌てるように外へと出て行く。

クローズドの札を吊るされた映画館に続く階段には結局、その日最後まで人が訪れる事は無かった。

午後十一時を回った映画館から二人が出てきた時には通りには人通りなど皆無となっていた。

空は暗く、街灯の半分は節電の名目で光量を落としている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ムスっとした顔のセキが無言で歩いていく。

早足のセキが何かに耐え切れなくなったように後ろを振り向いた。

「どうして付いてくるんですか？ 新手のストーカーか何かですか？」

「僕の手で飲み食いして映画を最後まで見てしまった人間の言葉とは思えないよ」

「それは！？ アナタが何かと私に話しかけて来るから！！ お、お菓子だって飲み物だってお詫びとか言ってたはずですよ！！」

「それを真に受けて冗談だと思わない無垢さが現代には失われた日本人の心って奴だね」

「意味が解りません！！」

「考えるな。感じるんだ」

「それは映画の台詞です！！」

「僕はこれでも人見知りする方だよ」

「誰がそんな事聞きましたか！？」

「少しだけ引かなかったから少しだけ観察させてもらったんだ」

「————アナタは・・・・・・・・」

今までの馬鹿話が一転、風御の笑みにセキの顔が冷静さを取り戻していく。

「十一時まで付き合うどころか。君は最初から最後までいるつもりだったでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

押し黙るセキの前に進み出て風御が振り返る。

「人間観察は僕のライフワークでね。僕には君が出会ってから奇妙に思えて仕方なかった」

風御が四つ指を立てる。

「君には四つの不審点がある。一つ目は君の服が近頃流行りの低価格帯を席卷してるブランドだってこと。安くてそこそこ丈夫で可愛いのを売りにしてる。でも、君は四世っていう立場でそれを買うには少し無理がある。何故ならそのブランドがあるのは例外なく付近五十メートル以内に交番が存在する場所だけだからだ。残念ながら移民政策の失敗で今の警察は移民への職務質問は常態化してる。移民が仕事をする場合、例外なく端末を与えられ、ジオネット上で登録、更には常時の位置送信を義務付けられる。職質を嫌って移民は普通自分も自分の子供にもそういう付近に近づかないように教えてる。四世ともなれば親は苦労から必ず日本内での仕来りや作法や注意点を言い含めてるはずだ。つまり、君は普通なら買うはずのないブランドを、やけっぱちにでもならない限り買う機会の無い服を、何故か着てる事になる」

風御が指を一つ折ってセキの靴を見る。

「二つ目は靴。君の靴は僕が知る限り近頃発売されたばかりのものだ。値段こそ最廉価の代物だけど発売からたった十日でそこまで汚れるわけがない。もしも汚れるとすれば状況がそうさせているはずじゃない？ 例えば、ずっと靴を履き続けてるからとかね。君の歩き方がぎこちないのは靴擦れで足が痛いからでしょ。成れない靴を延々と履けば誰だってそうなる」

二つ目の指が折られる。

「三つ目は君が映画館に一人でいた事。君のアホ毛が気になったからって普通は金を出した映画を最後まで見ないなんて有り得ない。でも、君は実際に一人だった。トイレの途中で聞いたけど、あの映画館は数人の常連が何時間も見たりする場所らしい。でも、君がいた時間帯には誰一人としていなかった。つまり、一つの映画だけな

らまだしも君があゝの場所にずっと陣取り続けていた為に常連は今日のところは止めて帰ったって事が推測出来る。あの映画館は客の入れ替えなんてやらずに老人がフィルムだけ入れ替えて続け様に上映してると言っていた。杜撰な管理だから客の出入りを老人が記録して居た時間分だけで料金を取ってるらしい。教えてもらったところによると君は一番最初の上映からずっといた。つまり、君は学校帰りでもなく平日の朝っぱらから映画漬けで学校を休んでいるって事になる。更に言えば、朝から入り浸りだったのに君の近くには飲み物のゴミも食事の痕跡も無かった。普通何時間も飲まず食わずで映画なんて見るもんじゃない。映画は楽しく見るものなんだから。そうしなかったのは無論お金が無いから。普段なら絶対こんな胡散臭い僕から奢られたり施しを受け取ったりしないであろう君がついお菓子を手に取った理由はソレで間違いない。そんな君がわざわざ映画を見ている理由は・・・まだ聞きたい？」

セキが啞然とした後、風御をキッと睨み付ける。

「あたしが家出少女みたいだからってアナタに関係ありますか？」

「大有りじゃない？ 共に寝食を共にした仲間なんだから」

「いつ一緒に寝たんですか？」

「映画が退屈で寝てたよ」

頭痛を抑えるようにセキが片手で額を押さえる。

「アナタと話していたら帰りたくなってきましたから帰ります」

「そう。僕も帰ろっかな」

「それではあたしはこれで」

「それじゃ、僕もこれで」

バイバイと手を振って風御がセキと分かれた。

数分後、分かれたはずの二人はコンビニの週刊誌を置く場所でお会った。

風御を見つけたセキが風御の横まで歩いてくる。

「どうして此処にいるんですか？ 帰るんじゃないかったですか？」

「ほら、今日月曜だから立ち読みしたくなって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でセキが風御をすり抜けてトイレへと入る。

数分後、セキがトイレから出てくると風御の姿は消えていた。

しかし、嫌な予感が胸を過ぎったセキはすぐさまにコンビニを出て近くの小さな公園へと歩き出した。

数分後、セキが公園のベンチに座ってグツタリとして目を瞑る。

疲れた溜息を吐いて虫の声に耳を澄ましていたセキの頬に急に冷たいものが当たった。

「ひぁ!？」

思わず可愛らしい声で飛び上がらんばかりに驚いたセキが振り向くと冷えたコーヒーを腰に手を当てながら一気飲みする風御がいた。

「な、なな、何なんですかアナタ!？」

「え? 何だか缶コーヒーが無性に飲みたくなって自販機でちよつと買ってたら君が勝手に僕の座ってたベンチにいたからお裾分けを」きょんとした顔で言う風御にセキは脱力した。

「本当に何なんですかアナタ・・・・」

「ただの通りすがりの大富豪かな。ちなみに虫除けスプレー要らない?」

「・・・・・・・・要ります」

もはや諦めの境地に達したセキが缶コーヒーを受け取って自棄気味に飲み始める。

一気に飲み干した缶が憎いとばかりに近くのゴミ箱に八つ当たり気味に投げ入れ、風緒の手から耄り取ったスプレーを全身に振り掛けた。

風御が横に座ってもセキはもう何も言わなかった。

ただ、ジッと風御を見つめていた。

欠伸をし始める風御にセキが不信感もそのままに心底不思議そうに聞く。

「どうして、こんな事して何かアナタに得でもありますか?」

「僕がそんなケチな人間に見える? ほら、アレだよ。アレ」

「アレ？」

「こう大富豪的な慈善活動というか。報われない無垢で哀れな子羊にお布施をしてあげるような心地というか」

「つまり偽善ですか？」

「うん、ソレ」

「少しは悪びれて!!」

ベチンと風御の頬にセキの手型が付いた。

「どうしたのセキちゃん？」

「どうしたのってアナタおかしいですよ!!」

「何処が？」

「何処がって・・・それは全部が！」

「何で？」

「普通、こういう時は・・・『これから家に止めてあげるよ』とか『何しやがんだテメェ』とか何か言い包めたり脅したりして持ち帰りしようと企んだり・・・って何言わせるんですか?!」

乗りツツコミ全開で再び風御の頬にビンタが炸裂する。

「別に君じゃ後四年は立たないから安心していいよ」

ニッコリ聖人の顔で平然と言う風御にセキが顔を紅くした。

「~~~~馬鹿にして!!」

「僕の友人にダメな人間がいるんだけど」

「人に話を振っておいて唐突に振り切らないでください!？」

「そいつが社会のクズでどうしようもない貧乏人だったりするわけ」
もう何を言っても話し続けるらしい風御にセキは黙り込むしかなかった。

「僕はいつもそいつに毎日のように朝食を奢ったり仕事を一億とか二億とか使って手伝ったりするんだけど、そいつは僕を殴ったり理不尽だったり怒ったり笑ったりしてくる。ホント馬鹿な付き合いだとは思うけど、僕にはそれが人生のスパイスみたいなものに見える」

風御がスーツの内ポケットからクシャクシャになったタバコを一本

取り出してジッポで火を付け噴かした。

「そいつは社会のクズではあるけどさ。人間のクズじゃない。いや、どっちかと言うと人間としたら聖人クラスかな。だから、そいつが人助けしてるのを見てると何か自分が空っぽだなあと少し羨ましかったりする。人間として大切なものをそいつは沢山持ってる、自分はそのなにも持たなくて……」

タバコをポイ捨てして風御が踏み潰した。

「僕は君に同情したりしてないし、君がこれからどんな目に会うのかリアルに想像できても可哀想だとは思えない。でも、ちょっと友人みたいに君を助けられたならそいつに少しは胸を張れる気がする」
風御がセキに視線を合わせた。

「こういうのは僕の趣味の範疇。で、君はもの凄く不幸そうなオーラが出てる家出少女A。つまり、君がもしも困ってるなら僕は君を助ける用意がある。無論、君がそんなのお節介だと言うなら僕は君を『必ず助ける』」

セキが風御の言葉に何か難解な問題でも解いていたように額を揉み解した。

「つ、つまり、アナタはあたしを自分の自己満足の為にこっちへ何の意見も求めず勝手な判断で助けるって事ですか？」

「え、そう言わなかった？」

あまりの「あまりっぷり」にセキが今度こそ全力全開で脱力した。

「こう見えても功績結構はある方だよ。薬中にアル中にソーブ嬢に自己破産女に頭空っぽな不良と色々見てきたから」

「同じにしないでください！！」

風御がセキに手を差し出す。

「あたしは……家には帰りません」

「好きなだけ家にいればいい。三食パスタか店屋物で良ければ」

しばしの無言の後、二人の手はしっかりと握手で結ばれた。

「まあ、近頃はその友人が人間のクズ（性的な意味で）になりかけてるような気がするけどさ」

「今サラッと重要な事言いましたよね!？」

「いつの間にか自分より十歳位下の女とラブコメ（性的な意味で）やってるらしいし」

「ラブコメは性的な意味を含むはず!?　じゃなくて?!　やっぱり止め――」

「生憎とクーリングオフって制度は嫌いなんだよね」

「もう嫌〜〜〜〜!!」

ズルズルと引きづられるように少女は風御に連れられてゆく。

その夜の事。

前日から幾度かお持ち帰りしている二十三歳OL独身が未だ家にいるという事実を風御が思い出すのはOLが裸エプロン姿で手料理を持って出迎えた直後の事だった。

「サイテエエエエエエエエエエ!!」

永橋家の玄関に嵐が吹き荒れ、二つの手形を頬に付けた風御は翌朝まで放って置かれる事となった。

風御家で主が伸びている頃、外字家の小さな一室でソラは両隣で寝ている久重に気付かれないよう背を向けて額を触っていた。

その額は僅かに発光している。

浮かび上がる文字が流れていく度にソラの顔は曇りを帯びてゆく。

Link Protection Error.

Delusion Amulet Stand By.

Execution.

Error.

Execution.

Error.

「……………まだ、これでも……………」

【SE】Fragment.

Super Resemble Closely Replica

Increase.

【Devil】Central Core Closed System 【Fatalist】.

Intervention Start.

Invade Collapse Rate 0.00000000
09%

「やっぱり」

やがて、何かを諦めたソラが小さな溜息と共に目を瞑った。

数分後、小さな寝息が聞こえ始める。

少女の唇が僅かに寝言を呟き、青年は己の無力さを噛み締めながら意識を閉ざしていく。

密かな少女の呟きが青年の胸にはとても痛く、とても温かった。

【ひさしげ。守るから】

二人の日常は未だ始まったばかりの劇にも似て。

(.)

青年の想いは答にならず。

(情けなさ過ぎだ)

胸底に澱重なっては沈み。

(守ってもらってるのは本当はどっちだった)

明日の夢に燻り続けて。

(. クソ)

やがて、消え去っていく。

(必ず お前を)

その想いの終着点は。

(オレは)

未だ青年の目に映ってはいなかった。

第十二話 よくある話

第十二話 よくある話

よくある話だが、彼女は何よりも兄を愛する。

「おにーちゃん。もうこっちは大丈夫だよ」

微笑みながら彼女は草むらで兄との逢瀬を楽しんでいた。

誰もいない草むらで彼女は兄の横に座って日常を語る。

今日は嫌な奴と会ってしまった。

昨日は優しい人に助けてもらった。

明日は大好きな映画を見に行く事にした。

話題は絶えない。

「今はおっきいマンションに住んでるの」

最新のファッションはこうだとか。

きっと、これから来るのはこのアイテムだとか。

どうでもいい話は尽きる事なく彼女の口から溢れ出す。

「昔は辛い事ばかりだったけどさ。今は全然楽しい事ばかりなんだ。お友達は全員優しくしてくれるし、それにお金だって心配しなくてもよくなったんだよ。凄いでしょ」

彼女は一人喋り続ける。

喋れぬ兄の代わりに。

髪を撫で口元を少しだけ緩めて微笑む。

「誰も今まで助けてくれなかったのにね。少し顔が変わっただけで態度が全然違うんだよ。おっかしーよねー。人間は心だって道德の時間、先生だって言ってたのにさ」

彼女は辛かった過去を思う。

生まれの別名を運命と言う世界で彼女達は生まれた。

違う国、違う人種、違う肌、違う思想、違う言葉、違う教育、違う世界。

社会の最底辺として生を受ければ、世間は冷たかった。

【ガイコクジン】には冷たい人々に彼女と兄はいつも途方にくれていた。

親達はいつもいつも彼女と兄に勉強をしろと言った。

勉強をすればきつとどうにかなると言った。

彼女がそれに疑問を持ったのは『ガッコウ』に入った頃。

『ガイジン死ねよ』

ランドセルとノートには落書きが一杯だった。

幼心に彼女は解らない文字が悪口なのだと解った。

兄はそんな彼女をいつも慰めては抱きしめてくれた。

「その、ね。今ね……付き合ってる人がいるんだ……おにーちゃんがもう心配しなくてもいいように、おにーちゃんがちゃんと安心していられるように。べ、別におにーちゃんが嫌いになったわけじゃないんだよ！？　ただ、ほら、おにーちゃんとは兄妹だから、だから……その……おにーちゃん離れしなきゃいけない気がして……」

今まで黙っていた罪悪感から彼女はグツと唇を噛んだ。

「その人ね。おにーちゃんに似てるんだよ。凄く優しくて、凄く頼りがいのある人なんだ。でも、ちよつとだけ掴みどころが無くてフラフラ風船みたいに何処かへ飛んで行っちゃう事があって……あはは、ごめんね。おにーちゃんに言うような事じゃないよね。だって、おにーちゃんが喋れないのに一方的に喋ってばかりで……これじゃ、妹失格だよ」

彼女は顔を翳らせて兄の手を握る。

「もう、行くね。最後に話せて良かったよ……おにーちゃん。【半年間ありがとね】」

彼女はそつと兄に口付けして、早足に草むらを去った。

その頬には涙の痕が幾筋も幾筋も流れていた。

誰も来ない草むらは夏の盛りに猛る。

一日でどれだけ長くなつたかも知らない背高ノツポな草達は兄を最後まで隠していた。

最後の別れを告げられた彼女の兄はただ世界を見上げていた。その瞳に蠅が集り始めた次の朝、彼は発見された。

羽田了子の口癖は常に「ネタ」である事は間違いない。

「ネタ~~~~ネタ~~~~最高のネタ~~~~」

その日も了子は合いも変わらずネタを追い求めている。

踊り出しそうな上機嫌で愛車を運転する了子が回想する。

戒十が窓際に追いやられ、テロ関係の仕事から遠ざけられたのは数日前の事。

それ以降これといったテロ系のネタも無く、チマチマと地道な情報収集をしていた了子が戒十から新ネタを提供されたのは数十分前の事。

【達磨殺人事件】（仮）。

今時猟奇なバラバラ殺人などありふれている。

しかし、戒十が了子に調べろと言うならば、それにはそれ相応の価値がある。

戒十からネタを聞いてから短時間で重要情報を入手した了子は即座に行動を起こしたのだった。

「♪」

そもそも了子が前々から追っていた失踪事件が新ネタの事件と妙な合致を見せた事が大きかった。

とある場所の近辺で連続した失踪事件の被害者と新しい事件の被害者の顔写真が了子の頭の中でカチリとパズルの如く嵌り、速攻で車庫から車を出発させるに至っていた。

戒十から送られてきた被害者の顔写真はかなり悲惨なものだったが調べていた失踪者の一人に間違いなかった。

急いで端末のファイルを整理して引っ張り出し、被害者の身元を特定、良子は被害者の住所へと急行していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

車内で不意に了子が静かになる。

近頃キナ臭い警察に任せる事など何も無い。

了子の勘は何か得体の知れないモノが蠢いているのを感じていた。

テロリストを警察が包囲した日以来、都市には何かと多くの噂が浮上している。

白いスーツ姿のサラリーマンがおでんを食べていたとか。

気味の悪い子供が夜な夜なビルから飛び降りているとか。

病院で原因不明の病が流行るとか。

世界の滅亡が再び起こりそうとか。

隣国と戦争になるとか。

まったく馬鹿げた話の数々は了子の興味をそそり過ぎる材料だ。

不安になる程、未知の感覚が了子の第六感とも言うべき記者の勘を刺激していた。

（まだ、あの男の事も解ってないし、これから何が起こるって言うの・・・・・・・・）

テロリストの包囲された日、了子の前に地下道から飛び出して倒れた全裸の男。

病院に搬送されたはずの男の所在は終に解らずじまいだった。

了子が調べたにも関わらず、警察の伝手を幾つか使ったにも関わらず、男は忽然とあらゆる情報の中から消えてしまっていた。

（誰が彼を何の為に隠したかったのか。それが問題・・・少なくとも政府系の機関に干渉出来る【何処か】なのは確かだけど・・・）

大規模な情報操作が行われているのを了子は肌で感じていた。情報操作には三つの遣り方がある。

一つ目は関係者への口止め。

古来から人の口に戸は立てられないと言うが、殆どの政府系の情報操作はソレに含まれる。

二つ目は媒体上の情報削除。

ネット情報やら住民基本台帳やら一枚の写真やら媒体から情報を削除する方法。

最も困難であるものの【人間を含めた】媒体の削除は基本的に成功すれば二度と任意の情報を引き出せないという厄介極まりない方法だろう。

三つ目は偽情報の拡散。

九の嘘に一つの真実を混ぜてしまう事で物事の本質を見誤らせる。真実が漏れてしまったのであれば、真実がただの噂に堕すればいいという考え方は良子にとって最も好かない類の遣り方に違いない。どんな荒唐無稽な話にも真実が混ざっているものだが、殆どの場合には偽と真を見分ける術が無い。

噂はとりわけ問題になる。

嘘でも本当でもない【噂】は多くの情報を塗り潰してしまう。

(まずは地道に足で探しましょうか・・・)

ハンドルを強く握り締めて了子はスピードを上げた。

朝、外字家の賑やかさは限界を迎える。

セレブリティー全開な女子高生と怪しさ爆発の美少女がガチンコで微笑み会うからだった。

朝から胃をキリキリさせた久重がアズの呼び出しで仕事へと赴いたのはそんな食事時が過ぎ去った後。

僅かに腹部を片手で押さえつつ、冴えない顔でアズのクーペに乗り込んだ久重とソラはさっそくその日の仕事内容を聞かされる事になっていた。

窓の外に流れてゆく町並みを眺めているソラの元気が無い事を気に留めつつ、久重はアズから渡された書類に目を通した。

「行方不明者の搜索か。オレにこの仕事を回す意図は？」

「それを見て半分は理解してる。違うかい？」

「半分、ね。問題はジオネット上の個人登録だな」

「その通り。誰かが行方不明者の最後の目撃場所を指定してジオプ

ロフィットを仕掛けてる。かなり複雑な条件を付けてる事からも何らかの意図があつての設定だ。なら、行方不明者達が回つたであろう場所を巡れば……」

緩やかな笑みで答えるアズに久重が嫌な顔をした。

「おいおい。オレに行方不明になれとか。それ以前に達つて何だ達つて」

「それ以外にも幾つか搜索を頼まれてる。でも、その全ての行方不明者達も最後の目撃場所はそこなのさ」

「警察と政府のジオネット管理業者には問い合わせたのか？」

「無駄だよ。その情報だつて僕のネットワークでキャッシュを抽出したに過ぎない。そもそもそんなジオネット登録は【無かった】んだから、答えようも無い」

「……ジオネットへの干渉なんて政府機関か諜報機関か。どっちにしろ痕跡が残つてないはずはない」

「それが残つてないから問題なんだよ。久重」

「何だ。つまり、その登録を抹消したのは正規の管理IDを持つてる奴か。あるいは痕跡を完全に消せるハッカーなわけか」

「どちらかと言えば管理IDの方だと思つて構わない。ジオネット上でそんなハッカー紛いな事が出来るのは僕と数人の実力者。それと機関係の連中だけ。連中や実力者達がこんな馬鹿げた行方不明事件を演出する理由は皆無だよ」

「解つた。それでオレは今日このルートを通ればいいんだな？」

久重が書類上のジオネット上に設定されていたルートを見つめた。

「登録そのものが消されても行方不明者を出す【原因】が見逃してくれるとは限らないからね」

「魚が其処げんいんにるとは限らないがな」

「それでもまだ潜んでいないとも限らないから君の出番と」

互いに視線を投げ合い、久重が渋々、アズはニヤリと互いの顔を確認した。

「ひさしげ。私も一緒に行くから」

後ろから掛かった声に久重が振り向く。

「いや、それは……」

真剣な表情のソラに昨日の夜の寝言を思い出して久重が途中から何も言えなくなる。

「ソラ嬢。ひさしげを後ろから見守っててくれないかな」

アズが割り込んだ。

「どうして？」

「行方不明の原因究明には男が必要なんだよ。今までの行方不明者の全員が二十代の男性のみ。ジオネットの設定にも一人でルートを通るようにと出てる。つまり、同伴する誰かがいたら無駄骨になるかもしれない」

「ひさしげ……」

ソラの不安そうな顔に久重が重い空気を笑い飛ばすように笑みを浮かべる。

「本当に危なくなったら頼りにしてもいいか？」

「うん」

「決まりだね」

アズの声と共にクーペが旧市街地へと侵入した。

国道を高速で駆けていくクーペを最大望遠で監視していたパーカー姿の少年メリッサはつまらなそうな顔で端末に耳を当てていた。

「現在、東南東に向かって進行中……先輩いいですか？」

『どうかしましたか？』

「ハイテクも使わずに望遠レンズで覗きするのは仕事としては虚し過ぎます」

クーペが走る道路から十数キロ離れた高層ビルの屋上。

無駄にゴテゴテしたデカイ双眼鏡を片手にメリッサがうんざりした声を出す。

『支給品のソレは十分にハイテクの領域ですが？ ナノフォトリクス系の研磨技術なんて惚れ惚れします。超高精度のレンズ研磨は宇

宙開発を下支えする基礎の一つで――』

「ウチには最新の盗聴機器とハッキングシステムと量子コンピューターの最新型が在ったと記憶してます」

『空からの監視と電子的な盗聴は不可能だそうで』

「どういう事ですか？」

『【SE】の一部が雲で都市部での移動を偽装しています。都市部全域で【D1】と同じ微弱な反応を偽装して反応もロストしました。通常電子機器の盗聴はあのクーパーに乗っている方の防衛プログラムが優秀過ぎて昨夜返り討ちです』

「ふ、『連中』の無能さには頭が下りますよ」

『いえいえ、少し見ていましたが中々の鉄壁ぶりです。たぶんは【SE】の能力の大半を天候操作と【D1】の隠蔽に使っているのです。よう。【D1】の偽装モードを使われないだけマシと考えれば』

「夢の環境技術の無駄遣いだと思えますけど・・・」

『今の状態だと最も気付かれず監視する方法はソレしかありません』
「分裂した他の【SE】の行方は？」

『『連中』は世界中の都市部に潜伏した状態で自己開発モードを起動していると推測してますが、たぶん見つからないでしょう』

「先輩の考えは？」

『廃坑になった鉱脈跡や火山近辺で活動しているのではないかと思えますが』

「鉱脈は解るとして火山近辺ですか？」

『増殖に必要な鉱物資源やレアメタルを大量に確保し、尚且つ熱エネルギーに困らない場所。ピッタリ合致すると思いませんか？』

「火山性のガスだと腐食するんじゃない・・・」

『生憎と【SE】は地球環境下なら何処でも運用できるよう開発されました。熱エネルギーと運動エネルギーを相互に極小スターリングエンジン群で置換し、モーターや太陽電池で光、電気エネルギー、運動エネルギーと相互変換しつつ抽出する。これは最終的にはあらゆる環境下での対応を想定していた為です。雷雲の中、陽光の下、

火山の付近、烈風の最中、如何なる場所でもエネルギーを取り出す事が出来る』

「でも、それを連中には教えてないわけですか？」

『さあ？ それはご想像にお任せしましょうか』

「これから移動します。次の定時連絡までは通信を途絶。引継ぎ役の到着まで監視を続行」

『了解しました。では、明日11…20時に引継ぎ役を向かわせませう』

「ちなみにこの件の正式な監視役は誰になったか知ってますか？」

『【テラトーマ】が就くようですが』

僅かにメリッサがターポリンの言葉に息を飲んだ。

「……どういふつもりですか？ ターポリン先輩」

『どういふつもりとは？』

平然と返されて、メリッサが言い淀む。

「……何処の世界に戦略兵器へ偵察任務を行わせる馬鹿がいるんですか？」

『いえいえ、近頃デチューン処理を施されたらしく前に比べればスベック上殆ど無害です』

「先輩がそう言うなら……この件に関しては何も言いません」

『スポンサーも近頃は使いどころが無くて持て余し気味だったらしくて、返品したかったものをこちらで引き取ってリサイクル処理しただけの話です。問題無いでしょう』

「『第三世界の終末がこれで少し遠のいたと安堵してる』の間違いですよソレ」

『人間無駄に強い力を持つと後で気づくものです。こんなはずじゃなかったと』

「ええ、そうかもしれません。それじゃあ、もう行きます」

『では次の提示連絡で』

メリッサが通話の切れた端末を手の中で碎いて捨てた。

「ヤバイ？……よなあ……アレがデチューンされたから大

人しい威力なんて誰が信じるわけ」

しばし、沈黙していたメリッサが脳裏で回線を開く。

『こちらメリッサ。サーバーへの接続許可申請』

電子音声メリッサの声に応じた。

【はい。確認しました。認証番号20880211。サーバーへの接続許可申請通りました。閲覧情報、深度Bまでが開示されます。閲覧項目を選択してください】

メリッサが作り物の眼球を通して視界に複数の項目を確認する。

【第三世界からの人事異動引き揚げ者のリストを確認します。現時点で引き揚げ者無し。尚、貸出しされていた『戦略兵器テラトーマ』が準人員として該当ヒットしました】

『テラトーマに関するスペックの閲覧申請を』

【不許可。テラトーマのスペック閲覧には閲覧深度A以上の人員の同意が必要となります】

『・・・接続終了』

【接続を切断します】

諦め気味に接続を切ってメリッサはビルの屋上からそっと飛び降りた。

メリッサの瞳はもう遠く消えていくクーペに固定されていた。

長橋風御が目を覚ました時にはもう昼を過ぎていた。

ソファアーに転がされて上に薄いタオルケットが掛けられている。

むっくりと起き上がった風御は寝癖が付きまくった頭を掻きながら直ぐ側の絨毯の上に移民四世少女セキが寝転がっているのを見つけた。

「おはよう」

「ん・・・おはようございます」

寝起きが良い方なのか。

セキが身を起こした。

「目が覚めましたか？ 駄目人間」

「駄目人間？」

いきなり駄目人間呼ばわりされた風御が首を傾げる。

「あの人。泣いてました。もう帰るって……アナタによろしく言うておいて欲しいって」

「そう、悪い事したかな」

「悪い事したかなって!？」

何で裸エプロン姿の同棲してる女性が
いるのに家に家出少女連れ込もうとするのですか!？ どういう神

経ですかアナタ!!」

昼から少女の激高した声が無駄に広い部屋に響く。

「言ったはずだけど。趣味だって。彼女もその類と思ってくれて構わない」

「な?! アナタの為に料理まで用意してたのに!？ 何て言い草!!」

風御が相手にせず冷蔵庫を漁って、テーブルの上にラップが掛けられている料理の横に大量のシリアルと牛乳を入れたボールを置いた。凄惨な形相で憤慨するセキを横目にスプーンでシリアルと食べ始める。風御はテーブル上の冷め切った料理に目を細めた。

「昨日、何かあの人と話した？」

「話しましたとも!! あたしはアナタに連れられてきただけで全然まったく関係ない他人だと強調しておきました。それから自己紹介したら、その人も移民三世だって言っていました。あたしの家族の事を親身に聞いてくれて、それからあたしに【この人優しい人だから後は頼む】とか勘違い全開の泣きそうな笑みで出ていって……この駄目人間!!」

セキの怒りも何処吹く風で風御がシリアルを平らげて一息吐いた。

「そっか。やっぱり僕じゃ彼女は救えない……か」

「何を他人事みたいに!？」

胸倉を掴まれて風御がセキの瞳を初めて見る。

その瞳の奥に敵愾心だけを認めて、風御がソファに沈み込みながらセキの手を退けた。

「行っておくけど彼女を見つけたのは一ヶ月前だから」

「え．．．．」

セキが固まる。

セキはOLと少し話したただけだったが、まるで長年付き合っているような話しぶりであった事は覚えていた。

「君は色んな意味で勘違いをしてる。とりあえずそれを幾つか正しておけど」

風御が指を四つ立てた。

「一つ。彼女と僕は一ヶ月の付き合いだ。二つ。僕と彼女は体の関係こそあったけど付き合っていない。三つ。彼女は君と同じで「どうしようもなさ」が目についたから連れてきただけの人間で、それ以上の感情はない。四つ。僕と彼女が会ったのはこれで四回目だ」

「え？ いや、でも、そんな風には．．．は！？ 誤魔化そうとしてもそうはいきません！！ ど、どっちにしろアナタは四回しか会っていない人間に裸エプロンをさせる最低人間という事です！！」

「まあ、それはいいとして。君には彼女がどう見えた？」

「よくないです！！」

「いいから。問題の本質は僕と彼女の関係じゃない。僕が聞きたいのは彼女の不自然さに気付かなかったかって事」

「ふ、不自然．．．？」

少しだけ己の中で引っかかっていた事を指摘されて、セキの勢いが削げた。

「不自然で．．あの人はあたしと同じ移民だって、それで今は会社でOLしてるって。着替えたらホントに日本人のOLみたいに綺麗で服だってちゃんとしてて——」

「本人が言い出さなければ日本人のOLにしか見えなかった？ ちなみに君が見ただろうものは彼女の自前だけだ」

「あ．．．．」

風御がラップを取り、冷め切ったオムライスにスプーンを突っ込む。
「気付いた？」

「で、でも、あたしに嘘を付く理由なんて!」

「今の情勢でOLをやってる移民なんているわけがない。いや、どちらかという日本人のOLにしか見えない移民なんているわけがない、の間違いかな」

オムライスを平らげながら風御が続ける。

「君も知ってる通り、今の日本は移民を下層労働階級で固定してる。派遣法の改正で非正規雇用では移民が『優遇』されてる」

「あれは差別でしょう!!」

風御が「確かに」と頷く。

「そして、基本的に何処のどんな小さな会社だろうと純日本人の下に移民を置く構図が出来上がってる。社会の風潮がそもそも移民外国人を正社員にしている会社を受け付けない。過去の外資や移民外国人労働者との軋轢から、今の日本の会社と社会構造は海外からの出稼ぎや転勤してきたような永住資格を持たない外国人なんかには偏見を抱かないが、永住資格を有した移民外国人労働者に関しては仕事上の『逆差別を理由にして』採用しないのが一般的だ」

「・・・都合の良い事ばかり言って連れてこられたってお爺ちゃん達は言っていました」

「そこは世の中の議論にでも預けておいて。僕に聞かれても正しい答えなんて返せないから」

「・・・・・・・・」

「それで本題だけど。日本のOLみたいに見える人間がわざわざ自分を移民と言う理由は無いらしい、逆に移民が自分をOLに見せかける理由もまた無い。本当に移民ならば綺麗な服より明日の家族の糧を得るのに必死だろう。日本人に見えるような整形をしても通り名が禁止され移民である事が仕事を探す上で隠せない以上、そんな金を使う理由にはならない。そんな金を使えるならそもそもOLになる必要も見い出せない。つまり、彼女はとても不自然な存在だった」

「アナタの言う「どうしようもない」って事ですか？」

「そう「どうしようもなく」不自然な日本人に見える移民がいて、

デパートの屋上の遊戯施設のフェンスで黄昏^{たそがれ}てる。だから、僕は彼女をとりあえず家に連れてきた。それ以降同じ場所に行くと同じように黄昏てるから仲良くなってみたわけ。彼女は少し人格的に壊れてたから・・・何とか直してあげられれば良かったんだけど・・・」

「こ——そんな言い方・・・」

「人間観察は得意な方って言わなかった？ おにーちゃんと話が出来なくて寂しいとか。おにーちゃんになってくれるとか。色々言われて何度か深く聞いてみたら支離滅裂で曖昧な話を始めたりしてたから、精神科を薦めようかと思ってたんだけど」

風御が平らげたオムライスの皿をテーブルに置いた。

今まで話を聞いていたセキが風御を真剣な表情で見つめ、何を言うべきか内心から言葉を探した。

「どうして」

「何？」

「どうしてアナタはそんな顔で態度で・・・話が出来て・・・」

「僕も「どうしようもない」から」

「アナタも？」

「セキちゃん。君は今の話を聞いたから何か自分に出来る事があると思う？」

「それは・・・少しぐらい話を聞いてあげられるかもしれませんが」

「そう、君に出来るのは其処までだ。僕に出来る事もそう変わらない。君と僕の差は大人と子供。金の有無。付き合いの長さ。でも、どれをとっても彼女を本当に幸せに出来るような差じゃない」

「やってみなければ、やってみなければ分かりませんッ」

「いや、分かる。僕には限界がある。君にも。君に出来る事で解決するような問題なら僕にも解決できる。けれど、僕にも解決できないなら君にも出来ない」

「そんな事——」

「無い？」

瞳の奥を覗き込まれて、セキが拳を握った。

「……【この人優しい人だから後は頼む】って彼女は言っていました」

「そう」

「あたしはアナタを正直好きになれません。でも、アナタが彼女にそう言われるような人だって事は分かります」

「君も言ってたように偽善だよ」

「それでもアナタはお人好しです」

「友人に集^{たか}まれるくらいだから」

風御の言葉にセキが立ち上がる。

「彼女を迎えに行きます」

「彼女はたぶん戻ってこないだろうし、きっとあそこにもいない。勘^{かん}だけど」

セキが風御の持っていたスプーンをもぎ取ってテーブルを指した。意味が分からず風御が首を傾げる。

テーブルの上には色とりどりの肉と野菜が数皿並んでいた。

「とってもよく出来てます。どれもこれもちゃんとした下拵^{ごしら}えが無いと出来ません。手間も時間も掛けない手料理なんてありません。

まだ日本人に一宿一飯の恩義を感じる感性があるなら、アナタは彼女を追わなければならないはずです」

「移民が語るようになったら日本はおしまいかもしれない」

セキが首を横に振って、思い切り風御の頬を張った。

「移民でも日本人でも！ 男が女の手料理を食べたなら褒めるのは当たり前です！！」

風御が驚いたまま固まって、軽く溜息を吐いた。

「確かに礼くらい言わないと罰^{ばち}が当たる手料理だ・・・」

「冷めても美味しいように作り直してたから当たり前です」

「へ？」

風御が思わずセキを見た。

「昨日の分はあたしが頂きました。それは彼女が改めて作り直して置いていったものです」

風御がテーブルの上の料理を見つめて、深く、深く溜息を吐いた。

「・・・・・・・・コレ食べたらし出し出るけど君はどうする？ セキちゃん」

「移民は金に汚い社会のクズだって言われます。けど、人に本当に助けられて恩を返さない奴は人間のクズですから」

セキが風御に手を差し出す。

「昨日とは逆になったかな」

二人の手が握手で結ばれた。

（アナタの手があったかいと思ったから・・・彼女もあたしもきつとアナタに・・・）

十数分後、永橋家には誰もいなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8164w/>

GIOGAME

2011年11月10日15時05分発行